浅葱色の恋

山吹　蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浅葱色の恋

【Ｎコード】
Ｎ３９２９Ｅ

【作者名】
山吹　蘭

【あらすじ】
幼い頃から共に暮らしてきた試衛館の仲間を追い、京へ来た一人の少女。彼女は新選組の女中となり、遊女という名の密偵になる。暗殺、切腹、裏切り…様々な感情の混在する中、彼女を支えたのは沖田総司との恋だった。

はじまり

「…何故お前がここにいる。」
近藤は苦い表情で目の前に居る少女に言った。
「先生達のお役に立ちたくて来ました。」
そう言った少女。この小説の主人公『なつ』。
彼女は幼い頃に試衛館の前に捨てられていた所、当時『島崎勝太』と名乗っていた近藤勇に拾われ、試衛館で育てられた。幼い頃から試衛館の門人達と一緒に稽古をし、そんじょそこらの男共よりは剣の腕があるのは近藤も認めていた。
近藤は、文久三年、上洛する将軍の警護の名目で集められた『浪士組』に参加し、試衛館の門人と共に京へ来ていた。『浪士組』をまとめる清川八郎という男は、京へ着いた途端に本来の『浪士組』の目的を翻し、朝廷のために働くと宣言したのだ。
それに反対した近藤率いる試衛館一派と水戸浪人の芹沢一派は『壬生浪士組』として京に残ったのであった。
なつはというと、江戸にいる時に連れて行ってくれと懇願したが、それを許してもらう事は出来なかった。しかし、虎視眈眈と狙っていた上京の機会を、『壬生浪士組』を結成したという近藤からの文で見出したのである。

「…で、お前は江戸へ帰るつもりはないんだな？」
「当たり前じゃないですか。帰れなんて言わしません。お願いです、近藤先生！炊事、洗濯、掃除何でもやります。だからここに置いて下さい！」
必死に願い出るなつに温かい言葉が飛んできた。
「良いんじゃねぇの？八木さんに世話になってばっかりだし、こいつに任せたら。」
ぶっきらぼうに言い放ったのは土方歳三。近藤の幼馴染みで試衛館

の門人。なつとも共に生活してきた、兄のような存在。
「私もそれが良いと思いますよ。それに女中を雇うよりこちらの方が…」
井上源三郎。近藤の兄弟子だが、試衛館が大好きで門人として住み込んでいた。なつからすると父でもない、兄でもない、でもそれに並ぶくらい大好きな人間であった。
「土方さん！！源さん！！」
「ここは歳と源さんに免じて置いてやる。ただし、弱音は吐くなよ。」
「ありがとうございます！精一杯、皆さんのお役に立てるように頑張ります。」
こうしてなつは『壬生浪士組』の一員となる事ができたのである。

再会

なつらが話している部屋の外からバタバタと足音が聞こえてきた。
「なつーーーー！！！」
「総司！！」
走って入って来た総司と呼ばれた男、沖田総司。若くして試衛館の塾頭となり、天才的な剣の持ち主。なつの二つ上で幼い頃から共に生活し、兄妹のような存在であった。

「なつは絶対何かやらかすと思ってたよ。まさかここまで来ちゃうとは。」
「だって置いてきぼりなんだもん。ねえ総司、後で試合しよう！」
「なつなんて一瞬で片がついちゃうよ。」
「そんなことないよ！あたし、皆が京へ行った後、道場破りの相手してきたんだよ？それに、近くの道場でも教えてもらってたの。」
なつと総司は久しぶりの再会に会話が尽きなかった。

「盛り上がってるとこわりぃが、俺、洗濯ものが溜まってるから、なつ任せた。」
土方は自室から山盛りの洗濯物と洗濯用たらいを持ってきた。
ものすごく嫌な顔をするなつ。
「『弱音は吐くな。』近藤さんにそう言われただろう？」
ニヤリと片方の口だけ上げて笑みを浮かべた土方。してやったりという顔だった。

これからお世話になる八木家の皆さんに挨拶をし、早々に大量の洗濯物を始めたなつ。そこへは、なつの突然の訪問を聞きつけた試衛館の門人達が集まり始めた。
「なっちゃん！」

そう呼んだのは山南敬助。北辰一刀流免許皆伝の腕前を持ちながら、近藤の人柄の惚れ込み、試衛館で生活するようになった。学があり、なつにとって学問の師であった。

「山南さん、お変わりなく！」

「なっちゃんは少し綺麗になったんじゃないか？」

「やだなぁ、そんなお世辞言っても何も出ないですよ？」

「なつじゃねぇか！」

「こんな遠くまでよく来たな。ハハハハハ。」

原田左乃助、種田流槍術免許皆伝。非常に豪快な男で、それ故、場を読めない事が多々ある。

永倉新八、神道無念流免許皆伝。永倉も若くして剣の才能を発揮し、沖田に並ぶとも言われている。

二人とも妙な縁で試衛館の転がり込むようになっていた。この二人は兄というよりも悪戯仲間といった方が良いかもしれない。

「おなつちゃーん！」

藤堂平助、北辰一刀流免許。試衛館では一番年下でなつと同い年。元気もあり稽古熱心な真面目な男。実はなつに惚れている。

皆、なつとの久しぶりの再会を喜び、また歓迎してくれるのであった。

真実

総司は京の町の案内役として、なつの買い物の付き添いをしていた。久しぶりに会った二人はおしゃべりに夢中。江戸にいた頃を思い起こさせるようにはしゃいでいた。

「京へ来て、どんな仕事をしたの？」

「将軍様の警護だよ。」

実はこの時、総司は嘘をついていた。清川が作った浪士組から離れていた壬生浪士組は、ただの浪士。どこにも属してもいない、将軍警護要請も来ない、ただ将軍の行列を見ているだけだった。

しかし、なつはすっかり信じ込み、試衛館の仲間が京を護っているのだと思っていた。

「すみませーん！これくださーい！」

なつは八百屋の主人に声をかけた。

「へーい。おおきに。……。」

八百屋の主人はなつと総司を見て、言葉を無くした。

「あ…あの～何か…？」

まじまじと顔を見られて不審に思うなつと総司。

「いや～別嬪はんと凛々しいお方があまりにもお似合いやさかい、見とれてしもてたわ。勘忍え～。」

本人達は気付いていないのだが、実はこの二人、横に並ぶと美男美女という言葉がぴったりなのだ。それを自覚していない二人なのだが…。

「やだな～商売上手なんだから。じゃあ、お葱ももらっちゃいます。」

「お世辞ちゃいまっせ～、ほんまの事や。お譲はん、どちらから来はったん？」

「江戸から来ました。今、壬生浪士組にいます！」

自信満々に答えたなつ。総司はそれを止めようとしたが間に合わなかった。
急に八百屋の主人の顔が変わった。
「あんた、『壬生浪』の仲間なんか。あんな田舎侍に食わせるもんはない。もう来んといてくれるか。」
「…え？どういう事ですか…？」
「…っ…なつ行こう！」
総司に引っ張られ、八百屋を後にした二人。重苦しい雰囲気が流れた。

鴨川沿いを沈んだ顔で歩く二人。話す言葉を探していた。
「総司…どういう事…？」
やっとの思いで口を開いたなつ。
「実は…私たちは京の人達から、恐れられてるみたいなんだ。」
言いにくい言葉を続ける総司。
「原因は、壬生浪士組のもうひとつの一派の芹沢先生達なんだけど、あちこちの貸金屋からお金を借りまくっているんだ。それも脅迫紛いで。確かに今、壬生浪士組はお金を貰える立場にいない。そうしないと生活していけないのは確かなんだ。」
なつには信じられなかった。壬生浪士組は将軍様を護り、京の人々を護っているのだと聞いていた。それは方便だったのだ。
「じゃあ、総司たちはどうやって生活してるの？」
「芹沢先生に…貰っている…」
それは、京の人々からお金を巻上げているのと同じだとなつは思った。何のために京にいるのか、疑問しか思い浮かばなかった。
「総司…ごめん、一人にして…」
まだ京に来て間もないのに一人にはできない。総司はなつからは見えない所に身を隠し、後ろから付いていくことにした。

なつは悲しかった。上様を護り、京の人々を悪い奴らから護って

いる皆がなつの誇りだったのだ。それなのに護るどころか『壬生浪』と恐れられていた。お金が無いなら、無いなりに働く事もできるはず。それなの、強請、たかりでお金を京の人々から奪い取り、のうのうと暮らしているのが許せなかった。

「芹沢って人にやめてもらえば良いんだ。」

なつはこの時、まだ知らなかった。芹沢という男の正体を。

実力

なつが通りを歩いていると、大きな人だかりが出来ていた。
「ん？何だろう？」
近づくにつれ、男の声と、恐怖を感じている女の声が聞こえてきた。
「おい、女。俺達に付いて来いって！」
「離してください！うちは買い物の途中なんどす！遊んでる暇はないんどす！」
明らかに嫌がっている。男は四人。女のまわりを囲んでいる。女は周りの野次馬達に助けを求める目をするが、誰も助けようとしない。
「何で誰も助けないの…？」
なつが呟くと、近くにいたおじさんが話してきた。
「そんなん、助けに行ったらこっちがやられてまうやないか。そのうち奉行所のもんが来るさかい、見てるだけでええんや…」
なつは唖然となってしまった。人任せもほどがある。女は今にも連れて行かれそうなのに。
なつは人だかりをすり抜けて、前に出た。総司は慌ててなつの後を追う。

「ちょっとそこの頭の悪そうな浪人さん？その人嫌がってますよ～。見て分からないの？」
なつは考えるより先に体が動いてしまった。なつの言葉に怒りを込めた言葉が返ってくる。
「…お前…頭の悪そうというのは俺らの事か…？」
男達は既に標的をなつに変えていた。
「あんた達以外、誰がいんの？」

「お前、女だからって…！！！うっ……」
主犯格の男がなつに近づくと、突然、男は低い呻きをあげて意識を失った。
「？！？！兄貴？！」
子分と思われる男が倒れた男に駆け寄る。倒れた男はどこも怪我をしていない。しかし、意識を失っているのだ。
「っお前！！兄貴に何をした？！」
「ちょっと眠ってもらっただけ。そのうち気がつくから心配ないですよ。」
なつは、男が近寄ってきたすきに首元に手刀をお見舞いしたのだ。
「この女…調子に乗ってんじゃないぞ！！…？！？！」
兄貴を倒されたのが悔しいのか、歯向おうとした子分。しかしなつは子分が刀を抜こうとした瞬間にその手を抑え、またもや手刀で意識を絶たせてしまった。
まわりの野次馬は呆気にとられている。そりゃそうだろう。女ひとりで男二人を倒してしまったら。
そして総司もホッとしたのと同時に、なつの度胸の良さに感服していた。

なつは女の無事を確認すると、その場を立ち去った。
京の町では、なつはちょっとした噂になった。まるで救世主が現れたかのように。しかし、その噂もなつは気にも留めていなかった。当然のことをしたまで。それぐらいにしか思っていなかった。

試合

屯所へ帰って来た総司は、まっ先に土方の部屋へ向かった。理由はなつの武勇伝を話すため。

「土方さん！なつ、ものすごい事になってますよ！もしかしたら、平助ぐらいならやられちゃうかも…」

何気に失礼な事を言う総司。平助とて北辰一刀流の免許を持っている。そう簡単に女であるなつにやられる訳がない。

「確かになつはそこらへんの男よりは腕もある。でもまさか平助を超える腕は持っていないだろう。」

「信じないならやらせてみましょうよ。」

ただの興味から、なつと平助の試合は始まった。

「一本勝負。どちらか一本取った方が勝ち。」

審判の総司はそう言った。

「おなつちゃん、町での武勇伝は聞いたけど、私は負ける訳にはいかない。悪いけど、手加減はしないよ？」

平助にも意地はある。ましてや惚れている女に負ける訳にはいかない。

「手加減なんかしたらぶっ飛ばすよ？！あたしも本気でいく。負けても恨まないでね！」

なつは久しぶりに試合ができるということで、単純に喜んでいた。『壬生浪』の事を忘れている訳ではないが、今はこの試合に本気を出していた。

「始め！」

総司の号令でなつと平助の試合は始まった。

両者、相手の動きをじっと見つめ、出方を見定めていた。最初に動いたのは平助。素早い動きでなつの面を狙った。しかし、なつに

平助の動きは読めていた。竹刀と竹刀のぶつかり合う音が響く。
さっと間合いを取り、次の攻撃に備える。
「平助さん！本気でって言ったでしょ？！あたしを甘くみないで！」
なつからは異様な程の威圧感が出ていた。
次に仕掛けたのはなつだった。面を打つと見せかけてスッと懐に入る。そして平助の竹刀を弾き、後ろへ飛びながら面を打った。
「一本！そこまで！」
なつは平助に勝ってしまった。
「平助さん、女だからといって手加減しないでくれるかな？はい、約束。」
なつの言葉が終わるか終らないかのうちに、飛ばされていた。まさに『ぶっ飛ばす』という言葉の通りだった。
周り者はその光景を呆気にとられて眺めていた。

「なつ…前より強くなったな…」
しばしの沈黙の後、ようやく近藤が口を開いた。そしてその言葉に皆が頷くのであった。

「近藤さん…この女は…？」
皆が声の主の方へ振り向いた。
「斉藤くんか。江戸では会った事はないか？なつだ。試衛館にずっといたという話はしたことがあるだろう。」
斉藤一。江戸で人を斬り、逃亡した果てが京であった。近藤とは江戸で親交があり、近藤らが壬生浪士組を結成して直ぐに入隊している。腕は総司、永倉に並ぶとも言われている。
「なつ、斉藤一くんだ。彼も壬生浪士組の一員だ。よろしく頼む。」
近藤はなつに斉藤を紹介した。斉藤はなつをじっと見つめている。
「斉藤さん、初めまして。なつです。掃除、洗濯何でもしますので遠慮なさらないでください。」
「お前か？京の町で噂になっているのは。」

「そうみたいですね。京の人々があんなに白状な人ばかりだとは思いませんでしたけど。」
斉藤には信じられなかったのかもしれない。こんな娘が男二人を気絶させ、平助までも負かしてしまった。斉藤はなつという娘に興味が湧いてきたようだ。

二人の夜

その夜、なつと総司は縁側に座り、夜空を見上げていた。
「江戸も京も空は同じなんだね…」
なつはそう呟いた。
『そうだね』と言おうとした時、ふと見たなつの横顔。月明かりに照らされて、白く透き通るような肌が輝いて見えた。
ドキン……

総司の心がひとつ飛び跳ねた。
（……なんだ…？）
まだ総司は知らなかった。これが恋の始まりだったことを。

「ねぇ総司、いつまでこんな生活続けるの…？」
それは、いつまで強請、たかりの生活をするの、という意味だった。
「私だってこんな生活したくない。近藤さんだって土方さんだって考えてるんだ。でも良い案　が浮かばないって言ってた。」
総司は顔を歪めた。悔しいのだろう。夢を持って京まで上ってきたのに、待っていた生活は、江戸にいた頃よりひどい。見えない未来。どんなに不安な毎日を過ごしているのだろう。
そう分かっていながらも、なつは嫌味を言ってしまう。
「お金を稼ぐことぐらい、なんとでもなるじゃない！今の近藤さん達は、芹沢さんに悪いこと　を押しつけて、自分はのうのうと暮らしているだけでしょ？！あたしは、そっちの方が陰湿　だと思うな…」
こんな事言ったらいけない。でも我慢できなかった。なつは罪悪感に苛まれていた。

つい暴言を吐いてしまったなつ。総司の傍にはいられなくなった。自室に戻り、溜め息をつく。

「……ハァーーー……」

あんな事を言ったらいけない。総司だって、近藤さんだって土方さんだって、ちゃんと考えている。この情況の打開策を。

でも悔しかったんだ。将軍様のため、京の人々のために働いているはずだった近藤さんや総司達が、あたしの誇りだった。それなのに…

『壬生浪に食わせるもんはない。』

京の人にはそんなふうに思われていた。なんか…悲しいよ…。

なつが去った後に残された総司。浮かない顔をしていた。

なつはきっと夢を持ってひとり、京へ追いかけてきた。ここまで追いかけて来てくれたことはすごく嬉しかった。でも逆に怖かったんだ。今の自分たちの状況を知られるのが。

早く、何とかしなくては…。

鴨との対面

総司と気まずくなってから、食事の時以外顔を合わせることがなくなった。唯一、顔を合わせる食事の時間でさえ、目も合わせない。お互いが避けているのは、周りの者の目にも明らかだった。

今日は朝から屯所が慌ただしかった。皆がそわそわというか、落ち着きのない者が多かった。

「平助さん、なんか今日、ばたばたしてない？」

特に落ち着きのない平助に尋ねた。

「あ、おなつちゃんまだ知らないんだよね？今日、筆頭局長が帰ってくるんだよ。」

「芹沢さんて人？」

「おなつちゃん、芹沢さんには関わらない方が良いよ。」

平助はそう言い残し、また落ち着きなくうろうろとしに行ってしまった。

（関わらない方が良いと言われても、あたしはここの女中な訳で…洗濯とかやらないといけな　いし…）

そこまで言わせる芹沢という男が、なつの興味を掻き立てだした。

芹沢らの到着は昼前だった。なつが昼食準備をしていると、玄関が騒がしくなってきた。

「おおい！芹沢先生のお帰りだ！出迎えは無いのか！！」

新見錦。芹沢の頭脳であり、腰巾着のように芹沢にくっついている男である。

新見の声に慌てて出てきた近藤。

「芹沢先生、お帰りなさい。大坂はいかがでしたか？」

「まぁまぁだな。」

芹沢は近藤に金子の入った巾着を渡した。

「……すみません…」
近藤の表情には悔しさが溢れていた。この金も大坂の商人から脅し取った金だろう。近藤にとって不本意だった。しかしこれがないと生活していけないのも事実。近藤は拳をグッと握りしめた。

「近藤…あの女は誰だ？」
振り向いた先にはこちらの様子をみているなつが立っていた。
「……あの娘は…「お初にお目にかかります、芹沢先生。壬生浪士組のお世話をさせていただ　くことになりました、なつと申します。なんなりとお申し付けください。」
近藤の言葉を遮り、なつがはっきりと芹沢に向って話した。
「へぇーー…」
芹沢は舐めるようになつを見つめる。
「お前、なかなか別嬪じゃねぇか。何なら俺の夜の世話でもして貰おうか？」
「……お望みとあらば…。」
なつは芹沢の強い視線に負けまいと、睨みつけるように見返した。
「お前、面白いな。気に入った。」
芹沢はなつの頭をくしゃくしゃとなで、部屋へ入って行った。

なつは近藤の部屋へ呼ばれ、近藤、土方、山南の三人から厳しい視線を向けられていた。
「なつ、お前、自分が言った事の意味、分かってんのか？」
近藤の怒りの声がなつに降り注いだ。
「分かってますよ。でも芹沢さんだって本気で言ったわけじゃないでしょ？」
「お前は芹沢って男を何も分かっちゃいない…」
土方が呆れた声で言った。
「芹沢はそういう男なんだよ。嫌がってる女を無理にでも抱くような男だ。」

「まるで土方さんですね。」
なつの一言で、張り詰めていた空気が一気に解けた。
「…ククク…本当だな、歳…」
近藤は、大笑いしたいところ、必死にこらえている。山南は顔を背けているが肩が小刻みに上下している。
「…んなっ！！！俺は無理矢理抱いたりしねぇ！！！」
「どうだか…」
土方となつの言い合いが始まった。それを笑いを堪えながら傍観している近藤と山南であった。
なつの芹沢への発言はすっかり忘れられたようである。

自覚

土方となつの言い合いが一息つくと、なつは疲れたと言い、部屋から出て行った。
「あいついつの間にあんな口が達者になったんだよ。腹立つ…。」
土方はイライラしっぱなしである。
「あ、そうだ。俺は考えてたんだが、なつをこのまま女中に留めておくのはもったいないと思　うんだ。」
土方がいきなり、妙な話を持ってきた。近藤と山南は怪訝な表情を浮かべる。
「どういうことだ??」
「平助との試合、見たろ?あいつ、俺らが江戸にいた頃より遥かに強くなってる。言葉は悪い　があの力を利用しないのは勿体ねぇ。」
「なつを隊士にするつもりか?!」
「隊士にはしないさ。女人禁制だからな。でも表に出さなきゃ良いんだ。」
近藤はしばし考え、土方の言いたい事を予想した。
「表向きは女中…ってことか…」
「流石だな、俺の考えてる事をよく分かってる。なつには密偵として店に出て貰ったりできる　んじゃねぇか?あの強さなら己の身も護れる。」
土方は言い切った。

今まで黙っていた山南が口を開いた。
「ちょっと良いだろうか?なっちゃんに密偵になってもらうということは、遊女になってもら　うという事だろう?確かに妙案だ。女になら口も開きやすい。しかしそれを沖田くんが納得　するだろうか…」
総司となつは、誰がどう見てもお互い想い合っている。それに気

付いていないのは当の本人だけなのだ。
「あいつには俺が言う。……っていうかあいつらはなんであんなに面倒なんだよ！」
またしても土方のイライラに火をつけてしまった。
「総司も総司だ！俺があいつの年の頃にはもうかなりの女抱いてたぞ？！」
土方の話はかなり脱線し始めた。
「…お前と総司を一緒にするな…」
近藤は溜め息交じりの声で、幼馴染みの発言を一掃した。

土方が自室へ戻ると、覇気の無い顔の総司が土方の布団で寝ていた。
「遅かったですね……ハァーーー……」
深い溜め息をついた総司。
「なんだよ、その溜め息は。辛気臭い顔しやがって。」
「……土方さんには私の気持ち分りませんよ…。」
総司はなげやりに言った。
「あぁ分かんねぇなぁ。好きな女が追い掛けてきたにも関わらず、顔も見ない目も合わせな　い、毎日毎日溜め息ばっかりついてるお前の気持ち、これっぽっちも分らねぇよ。分かりた　くもねぇ。」
土方は早口に捲くし立てながら言った。その迫力に圧倒されぎみの総司。
「…そんな言い方しなくたって…それに何ですか？好きな女って。そりゃなつは好きか嫌いか　で言ったら好きですけど、私にはそれ以上の気持ちはありませんよ。」
そういう総司を呆れた表情で見る土方。
「……っっ…何ですか…」
「……餓鬼……」
一言呟いた土方。言葉の出ない総司。
「……お前には本当の事を言う。俺はなつに惚れてる。」

「……え…？」
土方は勝負に出た。総司に嫉妬させるという勝負に。もちろん、なつに惚れているというのは方便だ。
「お前がなつを女として見ていないんなら、俺は遠慮なくなつを貰う。今までお前に遠慮して　いたが、もう遠慮しねぇぞ？良いんだな？」
総司の頭の中に、土方と仲良く肩を並べたなつの姿が浮かんだ。
……嫌だ…なつの隣は…私だけのものだ……
「お前のその感情、なんていうか知ってるか？」
「感情…？」
「あぁ…『嫉妬』っていうんだよ。俺がなつと仲良くしているの想像しただけで嫌になっただ　ろう？見たくないって思っただろう？」
「…はい。」
「…それを嫉妬っていうんだよ。」
総司には困惑の表情が浮かんだ。
「……でも嫉妬なんてまるで私がなつを好きみたいじゃないですか。」
土方は力が抜けてしまった。どこまで鈍感なんだ。
「お前は馬鹿か！嫉妬するってことは相手を好きだって証拠だ！」
もう土方は手に負えないといったように言い放った。
そうだったのか……私はなつの事が好きだったんだ……。
ようやくなつへの想いに気付いた総司。好きだと思い始めると、気持ちは大きくなる一方だった。

助言

近藤の部屋を後にした山南。自室に戻ろうとすると、縁側に腰をかけ、暗い顔をしたなつの姿を発見した。
「なっちゃん。」
なつが声のする方を振り向くと、そこには優しい笑みを浮かべた山南の姿があった。いつもなつが悩んでいると、必ずこの顔で聞いて助言をくれていた。厳しい目で助言してくれる土方に対し、甘く助言してくれるのが山南であった。
なつはこの二人が大好きだった。
「どうしたの？何でも聞くよ。」
「山南さんには何も隠し事できないなぁ。」
「沖田くんの事だろう？」
やはり全部分かってくれている。
「あたし…総司に酷い事言ったんです。芹沢さんに町の人々からお金を巻上げさせて、自分ら　の手は汚さずに生活しているのはもっと陰湿だって…。」
「…反論はできないよ……確かにその通りだ。」
山南はひどく辛そうな顔をした。
「でも、考えているんでしょ？このままじゃいけないって…」
「もちろん、このままの生活をしていたら、何の為に我らが京へ来たのか…。でもなかなか良　い案が浮かばないんだよ…」
「山南さんでも分らない事、あるんですね。」
なつにとって山南は、何でも知っている尊敬すべき人物であった。その山南にも分からない事があるという事がなんだかおかしかった。
このままでは話が続かないと思ったなつは、声の調子を明るく変えて山南に向き直った。
「ねぇ、山南さん！壬生浪士組が京の治安を護るって誰が決めたの

？」
「…？？…私たちだけど…？」
なつの疑問は尤もだが、山南はなつの変わりように驚いていた。
「じゃあ、壬生浪士組が出来る前は誰がその仕事をしてたの？」
「…会津の人だよ。京都守護職の……」
山南の言葉が止まった。
「何で会津の人が京を護って…「それだ！！」
「？！？！？！」
山南の突然の大きな声に驚いたなつ。山南は滅多に人を驚かすようなことはしない。
「それだよ！なっちゃん！！京都守護職の松平容保侯に近藤先生のお気持ちを伝えるんだ！あ　の方なら近藤先生の想いをきっと分かってくれるはず…」
山南はひとりで納得している。普段の山南からは考えもつかないほどの興奮ぶりに圧倒されるなつ。言葉が出ない。
「そうとなったら早く伝えなければ…ありがとう！なっちゃん！」
山南は踵を返し、元来た道を戻り、近藤の部屋へと急いで行ってしまった。
「いえ…どういたしまして…」
なつの返事は山南には届かなかった。

平助の嘘

なつの思いもよらぬ助言により、近藤は京都守護職松平容保侯に嘆願書を提出した。そして壬生浪士組は晴れて『京都守護職御預壬生浪士組』となったのである。

公に町の見回りができるようになった壬生浪士組。今日は平助が担当していた。

「平助さん、お帰りなさーい！」

玄関の掃除をしていたなつは、平助の姿を見つけると大声で手を振った。

「おなつちゃん！ただいま…／／／／／／／／／／／／」

「どうしたの？平助さん、顔赤いけど…？熱でもあるの？」

平助のなつへの恋心、大概の人は知っているのだが、なつは全く気付いていなかった。そのなつに顔を覗き込まれ、ますます顔を赤くする平助。

「熱があったら…おなつちゃん、看病してくれる…？」

「当たり前でしょ！あたしは壬生浪士組のために働くの。隊士が風邪ひいたら看病するのが当　然でしょ！」

平助の頭に、自分だけを見てくれているなつが浮かんだ。熱を計るため、おでこに手を乗せるなつ。お粥をフーフーして口にはこんでくれるなつ。手を握ってくれるなつ。

どれも魅力的以外何ものでもなかった。

「私…熱があるみたいだ……」

平助は、嘘をついた。

「本当に？！こんなとこにいたら酷くなっちゃうよ！早く寝ないと！！」

なつには、平助の嘘を見抜けないという欠点もあるようだ。

なつは平助の手を引張り、平助の部屋へと入って行った。
それを偶然見てしまった男がひとり…。
（あれ…？なつ…平助の部屋に……何で…？）
嫉妬の心がフツフツと沸き起こる総司。
「…何でなつと平助が……」
総司の周りには負の空気が纏っていた。そんなことに気付かない哀れな男が、総司に声をかけてしまった。
「おーい総司！将棋でもやんねぇ？！」
お気楽な場を読めない左ノ助である。
「…やりません。」
「そんなこと言わずにやろうぜ～？！俺、暇なんだよ。」
「私は暇じゃありませんから。」
「じゃあ一回だけ！やろうぜ～！！」
左ノ助のしつこい誘いに、総司が、キレた。
「うるさいですねぇ！私は暇じゃないって言ってるでしょ！？左ノ助さんは日本語も分らない　んですか？！これ以上言うと…斬りますよ…」
総司の右手は既に刀の柄を掴んでいる。
さすがの左ノ助も危険を感じたようだ。あっという間にその場を去って行った。

争奪戦

左ノ助を殺害しそうになったのを堪えた総司。より強い負の空気を纏っていた。しかしそんな総司を諸ともしない土方が総司に声をかけた。

「おい総司、何そんなに苛立ってんだよ。」

「土方さん…今、私に近付かない方が良いですよ。土方さんであっても何をするかわかりませ　んから…」

そんな総司を見て、土方は溜め息をつく。どうせなつ絡みだろう。

「何があった…話してみろ。」

土方に見透かされたような気がして、総司は黙った。

「黙ってちゃわからねぇだろ。」

「じゃあ話しますよ。さっき、なつがへ平助の手を引張って、部屋に入っていくのを見ちゃっ　たんです。そしたら無償に腹が立って。土方さんなら私の気持ち分かってくれますよね？！　なつに惚れてるなら…」

土方は何の事だ？といった表情をした。そしてすぐに思い出した。

（そうか、総司の中では俺はなつに惚れてる事になってんだな。これを使ってやろう。）

「土方さん？！人の話、聞いてます？！」

反応の無い土方に苛立ちを見せる総司。

「あぁ…悪い…。おい総司！俺は腹が立ったからなつを奪いに行く！」

突然訳の分からない事を言い出した土方。仕方なく、総司もそれに付いていくことにした。

突然、何の了承も無く開けられた平助の部屋の襖。あまりの音の

大きさに身を縮めるなつと平助。ちょうど、お粥を口に運んでもらうところの平助だった。
「…ひ…土方さん……」
顔を引きつらせる平助。
「おう平助、どうした、風邪か？それともなつに看病してもらう口実か？」
土方は全てを見透かしたような声音で言った。
「ちょっと土方さん！病人に向かってそんな言い方する事ないでしょ？！」
「…病人か…。じゃあ、今日は皆で飲みに行くつもりだったがお前は病人なんだから無理だ　な。もちろんなつも行くけどな。」
平助を脅すように言う土方。平助はもう泣きそうである。
「病人ひとり置いて行く訳にはいかないでしょ。あたしは残ります。」
「おなつちゃん、私は大丈夫だから…」
だんだん罪悪感を感じてきた平助。
「そうだよなぁ。平助も仮病なのになつを引き留める訳にはいかないよなぁ。」
「ちょっと土方さん！仮病なんて平助さんがあたしを騙すような真似する訳ないでしょ？！」
平助はもう黙っていられなかった。土方には仮病だとばれている。なつを騙したと言われればそうだ。素直に謝るしかない。
「ごめん！おなつちゃん！私、熱なんかないんだ。ただおなつちゃんをひとり占めしたくて…　私、おなつちゃんが好きなんだ！！」
謝るだけでなく、告白までしてしまった平助。突然の告白に戸惑うなつ。
「お前はどうなんだ…？なつ…。」
なつの頭に浮かぶのは、幼い頃から共に生活してきた総司だった。寝食を共にし、稽古も掃除もいたずらも、いつも一緒にしてきた。

近くに居すぎて気がつかなかった、総司への想い。

そうか…あたしは総司が好きなんだ……。

平助の告白で自分の想いに気付いたなつ。正直にありのままの気持ちを平助に話すことにした。

告白

部屋にはなつ、平助、土方。そして障子の陰には総司がいた。総司の存在を、なつは知らない。
「平助さん…貴方の気持ちはすごく嬉しい。」
「…え？じゃあっ！！」
顔がパァっと明るくなる平助。
「でも、あたし好きな人がいるんだ。」
なつの『でも』で自分では無いと確信した平助。一気に顔がどんよりとする。なつの言葉に一喜一憂する平助はまるで百面相だ。
「今まで、近くに居すぎて気付かなかった。その人はいつもあたしの傍にいてくれて、いつも　一緒に笑ってて…誰よりも大切な存在だってようやく気付けた。ありがとう、平助さん。貴　方のお陰かな。」
好きな相手にこんな事で感謝されても喜べないなと思う土方であった。

「おなつちゃんの好きな人って…沖田さん…？」
聞かずにはいられなかったのだろう。傷つくのを分かっていながら聞いてしまった平助。聞いた事を後悔する。
「……うん……。」
顔を赤く染めて頷いたなつ。
「……だってよ…総司。」
土方は障子の陰に向ってそう言った。
「……えぇ…？！？！」
なつはこれでもかという程、目を見開き、障子の陰から現れる姿を凝視した。そこに現れたのは、こちらも顔を赤くした総司だった。
自分の告白を自分の好きな相手に聞かれてしまったなつ。どうしてよいのか分からず、あたふたとし出した。

「な、な、な、何でそ、総司が…／／／／／／／」
動揺しているのは誰の目から見ても分かる。
「総司がなつと平助が二人で部屋に入っていくのを見て、左ノ助を殺しそうになったから　　よ…」
ちょっと間違った伝え方をしてしまった土方。なつの混乱はさらに酷くなる。
「は？！何で左ノ助さんが殺されそうになるの？！」
「……まぁ左ノ助はどうでも良いんだ。」
殺されかけた左ノ助。どうでも良いらしい。哀れ、左ノ助…。

「…っとにかくだな、お前らが煮え切らないから手助けをしてやったんだよ！」
人のために何かをするというのが似合わない土方。自分でも分かっているのか照れてしまう。
「でも…土方さんもなつに惚れてるんじゃ…」
総司は勘違いしたままだったのだ。
「それは、お前に『嫉妬』を教えるための方便だよ…。だいたい自分の気持ちにも気付かない　こんな餓鬼を好きになるはずないだろうが。」
なつを指差し、土方は怒り口調で言った。
「俺はもっと大人の色気のある女が好きなんだ。例えば「その話はいらないです。」
土方の話そうとする言葉を遮り、総司が言った。少しイラっとした土方。
「とにかくだな、お前らを自覚させるためについた嘘なんだよ！」
これが土方なりの優しさだった。直球では勝負しない、不器用な優しさ。そんな優しさに総司となつは心が温かくなった。
「お前ら、最近ろくに話もしてないだろ。お互いの気持ちも知ったんだし、ゆっくり話せ　　よ。」
土方は、仮病の平助を連れて出て行った。

いや、今はもう仮病ではないかもしれない。心に傷を負った平助、彼の心を癒してくれるのは誰なのか…。

確認

部屋に取り残されたなつと総司。沈黙が二人の間を流れる。
話すことは山ほどあるはずなのに、久し振りすぎて言葉が見つからない。ましてやお互いの気持ちをさっき知ったばかりなのだ。
「「…あ…あのさ…」」
話しだそうとするとかぶってしまう。
「な…何？総司から言って…」
「…い…いいよ…なつから話せよ…」
お互い譲り合う。

「…久しぶり…だね……／／／／／／／／」
「……そうだね……／／／／／／／／」

いつまでたっても話の進まない二人。横に並んで座ったまま、目も合わせられないでいた。
しかし、こうやって二人でいる時間が嬉しくもあった。

総司は勇気を振り絞り、なつの方へ向いた。そして、腕を引張る。
「……え…？」
何をされたか分からなかったなつ。気付いた時には総司の腕の中だった。
「／／／／／／／／／…総司…？」
総司の大胆な行動に、動揺するなつ。
「…顔…見ながらだと…恥ずかしいから…／／／／／／／／」

トクン　トクン　トクン

総司の心臓の音が聞こえた。規則的に聞こえるその音が、とても

心地よかった。
「……なつ…」
「……何…？」
総司は一度、深呼吸をし、意を決して言葉を紡いだ。
「……好きだ…なつのことが…大好きだ。」

トクッ　トクッ　トクッ

総司の心臓は、さっきよりも早くなった。
「…総司……あたしも…総司が好き…」

ようやく見つめあった二人。お互い照れたように笑い、おでこを合わせた。
そして、ぎこちなく、甘い口付けを交わした。

お梅との出会い

なつと総司がお互いの気持ちを確かめ合った日以来、それまでの空白を埋めるかのように、毎晩、仕事が終わると二人で縁側に座りながらたわいもない会話をしていた。

そんなある日、知らない女性が、二人の後ろから声をかけてきた。

「おばんどす…」

後ろを振り向くと、艶やかな色気のある女性が妖艶な笑みを浮かべ立っていた。

「…おばん…？」

「江戸の訛りでゆうたら『こんばんは』やな…」

その女は、二人の後ろの座り話し始めた。

「おなつはん…その節はおおきに…」

どの節なのか分からないなつ。そしてなぜ自分の名前を知っているのかも分からなかった。

「あの…どこかでお会いしましたか？」

「いややわ～、覚えてはらへんの…？町で浪人に囲まれてた時に助けてくれはったやないの…」

以前、不逞浪士を懲らしめた時に助けた女だったのだ。その時は名前も聞かずに立ち去ってしまったなつ。

しかし、今、この女から放たれている色気を、あの時には感じることは出来なかった。まるで別人のようだ。

「貴女なんですか？本当に？」

「信じられへんの？そやなぁ。町に出るときはこんなんちゃうかもな…せや、うちは梅いいま　す。よろしゅう…」

梅と名乗ったこの女。同じ女であるなつから見てもとても魅力的な女性だった。色が透き通るように白く、しなやかで気品がある。仕草のひとつひとつに目を奪われる。女から見てそうなのだから、男なら一瞬で梅に惹かれてしまうだろう。

「あの…お梅さん、貴女が何故ここにいるのですか？」
「うち…？芹沢先生に拾われたんや…」
妖艶な笑みを浮かべるお梅。
「何で芹沢さんと…？どのようなご関係ですか？」
「…嫌やわぁ…そんなんうちの口から言わすん？…そやなぁ…関係ゆうたら、男と女の関係や　な…」
恥じらいもなく、さらりと言ったお梅。顔を赤らめるなつと総司をからかっているようだった。

女の色気

「おたくは沖田はんでっしゃろ…？芹沢先生も沖田はんには一目置いてはるんどすえ。」

お梅はなつから総司へと視線を移し、まるで誘っているかのような目をした。

そのお梅の目に完璧にやられてしまった総司。なつが横にいるにも関わらず、デレデレとした表情になった。

何？総司もお梅さんみたいな色気のある人が好きなんだ…。

疑念の表情のなつに全く気付かない総司。お梅はそんななつを見て怪しい笑みを浮かべた。

「沖田はん…ちょっと…」

お梅は総司に手招きし、なつの聞こえない所へ総司を来させた。

「おなつはんが、妬きもちやいてはるえ…？」

総司に耳打ちするお梅。なつから見ると、それはお梅が総司の頬に口付けをしているようだった。

お梅は妖艶な甘い香りを残し、芹沢の部屋へ帰って行った。残されたなつと総司。なつは腕を組み、眉間に皺を寄せて考え事をしてる。総司にはその姿が怒っているようにしか見えなかった。

「あ…あの…なつ…？」

「総司！！」

「は…はい…」

「あたし頑張るから！！」

なつはそう言い残し、足早に総司の元からいなくなってしまった。何を頑張るのかも分からず、総司も腕を組み、考えだしていた。

「ひーじかーたさーーん！！」
障子を力いっぱい開け、部屋の主の許可も得ず、いきなり飛び込んできたなつ。土方は額に青筋を浮かべる。
「てめぇは常識を知らんのかっ！！！！！」
殴りかかりそうな土方。しかしなつはそんなことでは怯まない。
「土方さんっ！あたしに女の色気を教えてください！」
「……」
拳を振り上げたまま固まる土方。なつの言っている事を直ぐに理解することが出来なかった。
「何言ってんだ？お前…。」
「総司、お梅さんに惚れちゃったんです。取り返したくて！」
なつの目には、総司はお梅に惚れたと映ったらしい。
「総司がそんな直ぐに乗り換えたりしないだろ…それに誰だよ、お梅って。」
どうやらお梅の存在はまだ知られていないようだ。
「芹沢さんの女の人です。芹沢さんの部屋にいますよ。」
「あの野郎、もう女を囲ってやがるのか！！」
土方はそっちの方に怒りが込み上げてきた。
「土方さん！そんなことどうでも良いんです！あたしに女の色気を教えて下さい！！」
とにかく必死ななつ。土方にもいつもと違うなつの気迫が伝わったのか、真面目に聞く体制になった。
「女の色気っていって何で俺に聞くんだ？」
「男の人が求める女の色気を知るには土方さんが一番手っ取り早いかと思って。」
「まぁ間違ってねぇな。」
納得する土方。
「お前、総司とどこまでした？」
「は？」
「どこまでしたかって聞いてんだよ。」

「だから何を？」
全く分かっていないなつを見て、土方はこれ以上聞く事を諦めた。
「お前に分かるかどうか知らねぇが、俺が女の色気を感じる時は、その女に触れたいって思っ　た時だよ。」
土方にそう言われ、考え込んだなつ。そして出た答えは、
「土方さんはあたしに触れたいと思った事ありますか？」
ものすごく真面目に聞いているなつ。土方は少し考え、
「お前には無い。」
はっきりとそう言った。なつは口を引きつらせ、何も言わずに土方の部屋を後にした。

お梅の色気

土方に、『お前には色気が無い』とはっきり言われたような気になり、落ち込むなつ。しかし、こんな事でへこたれるなつでは無かった。

なつが次に向かったのは芹沢の部屋。女の色気は女に聞けとばかりに、お梅に聞くことにしたのだ。総司にあんな目をさせたお梅。彼女に聞けば、何か分かるかもしれない。

なつは芹沢の部屋の前に来ると、申し訳なさそうに声をかけた。土方との対応の違いは歴然である。

「芹沢先生、なつです。夜分遅くに申し訳ございません。お梅さんいらっしゃいますか？」

「入れ…」

一言呟き、なつを部屋へ入れた芹沢。

「失礼します……っ！！／／／／／／／／／／／／」

ゆっくりと障子を開け、中の様子を伺いながら入っていった。そこには、今まさに事が終わった後のように、着物の乱れた妖艶さをさらに増したお梅が布団の上に座っていた。

そして芹沢はいつものように杯を傾け続けていた。

「お梅…お前に客なんざぁ珍しいな。」

芹沢は笑いながらなつを見ている。

「おなつはん、どないしはったんどす…？」

お梅に聞かれ、我に返ったなつ。

「あの…お梅さんはなんでそんなに色っぽいんですか？どうやったらそんな色気を出せるんで　すか？」

お梅はそんなことかと言わんばかりに、笑った。

「そんなん出そう思て出してるんちゃいますえ？自分では気付いてへんのやけど、勝手に殿方　が寄ってくるんや…。」

なつとお梅の会話を聞いていた芹沢が口を開いた。
「なつ…俺が教えてやるよ…」
芹沢が怪しく笑った。
「女の色気はなぁ……男に抱かれる事で身体から出てくるんだよ…」
思いもよらない芹沢の発言に、赤面し、言葉が出てこなくなった。
「お梅の色気はなぁ…相当な数、男に抱かれたって証拠だ。お前には全く色気なんかかんじねぇ。今すぐ色気が欲しいなら…俺が抱いてやってもよいぜ…？」
怪しく笑う芹沢は、ますます厭らしい笑みをなつに向けた。
「けっこうです…あたし…失礼します！！」
なつは逃げるように芹沢の部屋を出て行った。

「あんたも意地悪やなぁ。なんも知らん女子にあないな事言うなんて…」
言葉はなつを同情しているが、顔は笑みを浮かべるお梅。
「良いんだよ…あいつ、これから良い女になるぜ？」
芹沢はまた怪しい笑みを浮かべ、お梅の肌に吸い込まれていった。

新入隊士

芹沢の部屋での一件以来、なつは色気については忘れようとしていた。考えるだけ無駄のように思えてきたのだ。
総司がお梅に取られないよう、見張っていれば良い。そう考えるようになった。実に前向きななつである。

今日は隊士募集の日。屯所の中には見慣れない人がチラホラといた。おそらく隊士として合格した人達だろう。
腕があれば身分を問わずに入れる壬生浪士組。ここにいる人達はお世辞にも武士に見えそうな人はいない。町人であったり、力だけが取り柄のような人もいたり、ただでさえ評判の悪い壬生浪士組がますます柄の悪い集団なんじゃないかと思えてきた。
普段、あまり気にしていなかったが、こんな男集団の中にいる自分はけっこう危険なんじゃないかという思いすらしてきたなつであった。

その夜、新入隊士を歓迎する宴が行われた。
「皆さん、私は局長の近藤勇です。こちらは筆頭局長の芹沢鴨先生だ。壬生浪士組は尊皇攘夷　の志の元、上様のため、京の治安を護るという素晴らしい働きをします。共に頑張りましょ　う！」
近藤が声を張って挨拶をした。
「「「「オォォォーーー！！！」」」」
さすがである。屯所に地響きが起こりそうなほどの声を出した新入隊士達。近藤も満足そうである。

「おい！お前、名は？！」
既に酔いかけの左ノ助がある新隊士に絡んでいった。
「はい！俺は島田魁です！！美濃出身！力仕事なら誰にも負けませ

んよぉ！！！」
島田は大きな声で叫んでいた。
「おぉ～！なかなかやるじゃねぇか！でも俺なんかもっとすごいぜ？なんたって俺の腹は刃物　の味を知ってるんだからよ～。見るか？！見るか？！」
「はいぃぃぃ！！！見せてくださいぃぃぃ！！！！！」
どうやらこの二人、気が合うらしい。テンションが同じだ…。

それぞれがワイワイガヤガヤしている頃、なつが酒を持って現れた。騒いでいた新入隊士達の視線が一点に集中する。それもそうだろう。男ばかりだと思っていた壬生浪士組に年頃の女がいれば…。
「紹介しておこう。女中として働いてもらっているなつだ。何かあればなつに頼むと良い。」

「こんなかわいい娘がいるのか…」
「なんか…楽しみだな…」
「おなつさん…」

どの隊士もなつとの恋を妄想していた。男集団に咲く一輪の花を自分の者にしてやろう。楽しい生活を想像したが、それは一瞬にして砕かれた。
「皆さん！なつに頼むのは掃除や洗濯だけですよ。なつは私のものですから。」
総司は胸を張ってそう言った。
「なんだよ…男いたのか…でもあれぐらいの男なら…」
とある新入隊士が呟いた。総司の実力を知らないこの男からしたら、こんな男からなら奪えると思ったのだろう。
男が持っていた猪口が突如、真っ二つになった。それもキレイに半分に。
「申し遅れました。副長助勤、沖田です。覚悟しておいてください。

」

総司はにっこりと笑い、刀を鞘に納めた。男は顔を青ざめ、失神寸前である。

総司の力をまざまざと見せつけられた新入隊士達。決してなつに手を出すまいと心に決めたのだった。

そしてもうひとり、幹部の中にも大きな傷から立ち直れない者がいた。藤堂平助。彼を癒してくれる女性は現れるのだろうか。

親心

宴会は大変盛り上がった。ほとんどの隊士はこれでもかと酒を浴びるように飲み、既に夢の中である。

しかしそんな中をせっせと動き回るなつを近藤はじっと見つめていた。近藤は休みもせず、台所との往復をしているなつを、まるで娘を見るように優しく、愛おしく眺めていた。その視線に気づいたなつ。

「近藤さん、何か？」

「いや…よく働くなと思って。」

「当たり前ですよ！これはあたしの仕事ですよ？あたしがやらなかったらずっと散らかったまま　まじゃないですか。」

喋りながらも手を休めないなつ。

近藤は以前、土方が話していた言葉を思い出した。

『なつをこのまま女中にしておくつもりか？』

与えられた仕事以上の働きをするなつ。それでいて学問一通り学び、剣の腕もある。これだけ揃った女が他にいるだろうか？

もしこれから過激攘夷志士達と対峙することになれば、彼女の力が必要になるかもしれない。

ただの女中として置いておくことはいくらでもできる。しかし彼女の力を見てみたいというのも本心。

しかし、わざわざ危険な目に合わせたくはない。

近藤は決まらない心と闘っていた。

「近藤さん？何、難しい顔をしているんですか？」

近藤の顔を不思議そうに覗き込むなつ。

「なつ…お前は普通の人生と危険な人生、どちらを選ぶ？」

近藤からの突然の難しい質問に、しばし考えた。

「平凡な人生を選ぶなら、あたしはここにいません。」

それは、なつはこの壬生浪士組と共に生きていく事を選んだとい

う事。危険な路を選んだという事。
「それに、あたしにとって近藤さんや土方さん、総司がいない人生なんて無いも同然ですから！あたしは一生ついていきますよっ！」
なつは満面の笑みを浮かべ、近藤に言った。
「そうか…。なつ、今日はゆっくり休みなさい。明日、俺の部屋に来てくれるか？頼みたい事　があるんだ。」
「かしこまりました。伺います。」
近藤は、なつの言葉でもう迷いは無くなっていた。この少女に賭けてみようと。

依頼

翌日、なつは近藤の部屋を訪れた。そこには難しい顔をした近藤・土方・山南の姿があった。
「なんですか？そんな怖い顔して…あ！帰れって言われてももう江戸へは帰りませんよ？！」
なつは勘違いしているようだ。
「大丈夫だ。そんな事は言わん。」
「じゃあ何ですか？三人して腕組んで怖い顔されてたら困るんですけど…」
近藤は一息ついて、話しだした。
「なつ…俺の頼みを聞いてくれるか？」
頼みがあると言われて来たのだから、当然の事なのだが。
「勿論ですよ。土方さんの頼みは聞かない事もあるけど、近藤さんの頼みなら何でも聞きま　す！」
微妙に青筋を浮かべる土方。
「…そうか。じゃあ…なつ、京ことばを学んでくれないか？」
「…は？京ことば？」
疑問の表情のなつを見て、土方が話し始めた。
「何れこの壬生浪士組は、京で大きな働きをするようになる。過激な奴らを捕まえなくてはな　らないこともあるだろう。そういう時に必要なのは情報だ。」
なつは納得した。なぜ近藤らは自分に頼むのか。それは女にしか出来ない。女という事を生かして情報を得るなんて、仕事は一つしかない。遊女になるという事。
「分かりました。女として生まれた以上、女を生かせる仕事が出来るなんて幸せです。」
すぐに理解してくれたなつは頼もしかった。

なつが出て行った部屋では、安堵の表情をした三人がいた。
「なっちゃん、かわいい少女だったのに、いつの間にあんな大人になってたんでしょうね。」
山南の意見に頷いた近藤。
「試衛館の前に捨てられていたのが嘘みたいだ。」
「いや…あいつはまだまだ子供だ。何てったって男を知らねぇからな…」
土方の話が脱線しそうになったのを察知した山南は、すぐさま話を変えた。
「そういえば、沖田くん、よくなっちゃんが遊女になることを許したねぇ。真っ先に反対しそ　うなものだが。」
土方の目が泳いだ。

しまった…あいつらくっつけるので忘れてた…

「おい、歳…まさか話してないんじゃないだろうな…？」
近藤は土方の微妙な変化を感じ取った。
「わ…忘れてねぇよ！総司ももう大人なんだ。それぐらい…分かってる…と思う…」
語尾に向ってどんどん声の小さくなる土方。疑いの目を近藤と山南に向けられ、慌ててその場を後にした。

羽織り

ある日、皆で朝食を取っている際に、芹沢が突然提案をしてきた。
「おい、聞いてくれ。俺達も会津藩の御預かりになったことだし、揃いの羽織りでも作らねぇ　か？」
「羽織りですか？」
「いつまでもばらばらの着物より俺達だって分かる方が良いだろ。」
今日の芹沢は機嫌が良いようだ。
「しかし、揃いとなるとけっこうな額がいりますがそんな余分はないでしょう。」
山南が意見する。
「それはまぁ俺がなんとかするさ。案ずるな。」
どうせまた強請をするのだろうと皆が思った。しかし、羽織りというのには皆、興味が湧いた。確かにいつまでもそこらへんの浪人と一緒じゃ示しがつかない。ここではっきりと壬生浪士組の名を京に知らしめるべきなのかもしれない。
「じゃあこうしましょう。大坂の鴻池から借りる事にしましょう。」
新見が言った。
「あそこはこの前、不逞な輩を退治してやったところだから出すだろうな。」
この話が本当なのかどうかわからないが、芹沢らを信じる他無かった。

「どのようなものにするかはもうお考えなのですか？」
興味津津で身を乗り出す近藤。土方はそれを抑えようとしているが、近藤の興味の方が勝っていた。
「まだ決めていないが。」
「じゃあだんだら模様なんてどうです？赤穂浪士の羽織りを真似て。」

「だんだら模様って山形のやつですか？」
近藤の意見に永倉が袖に山形を手で作りながら聞いている。
「そうです。あれなら夜でも味方だって分かるじゃないですか。」
近藤は目をきらきらさせながら話している。
「よし、それでいこう。色はどうする？」
「口挟んでもえぇ？浅葱色なんてどう？涼しい色やし気持ちえぇでぇ？」
お梅が芹沢の後ろから出てきてそう言った。
「浅葱色？！あんな派手な色にするのか？！」
土方はあからさまに嫌な顔をした。
「いや、浅葱色は武士が切腹する時に着る裃の色ですよ。」
山南の意見に土方は舌打ちをした。
「よし、じゃあ決まりだな。今日、鴻池に行ってくる。」
芹沢は、朝食後すぐに新見らを連れて大阪へと出て行った。

「本当に浅葱色で良いのか？！」
土方はまだ納得いっていない様子だ。
「まぁまぁ土方さん、以外と良い色かもしれんぞ？」
永倉は浅葱色の羽織りが楽しみなようである。
「良いじゃないですか。涼しい色だし、それに総司に似合いそうだし…」
語尾がだんだん小さくなるなつ。聞こえるか聞こえないかの声だったが一番遠くに座っていた土方が吠えた。
「おまえの基準はそこか？！」
「地獄耳…」
ぼそっと呟くなつ。しかしまたしても雷が落ちた。
「お前は黙ってろ！！」
土方は毎日何らかでイライラしているなぁと暢気に考える試衛館メンバーであった。

土方の不満

しばらく経ったある日、出来上がった真新しい羽織りを見て、近藤は言った。
「実に良い！見てみろ、歳！涼しい色じゃないか。」
近藤は興奮気味に、土方をばしばし叩きながら子供のようにはしゃいでいた。
「おい、近藤さん、これを着て京の町を歩くのか？！笑い者だぜ！？」
実物を見てさらに納得のいかない表情の土方。しかし、他の者は気に入ったようだ。
「土方さん、慣れますよ。そのうちこの羽織りが京になくてはならない色になる。そうでしょう？」
あまり口数の多くない井上が土方をなだめるように言った。
「源さんに言われちゃ何もいえねぇよ。」
井上はにっこりと笑い、土方に羽織りを二着渡した。疑問の表情の土方。
「総司に渡しといて下さい。声をかけたのに取りに来ないんだ。」
土方の口角が引きつった。最近、暇があればなつと総司は二人でいる。それも何故か土方の部屋で。部屋の主がいなくても勝手に部屋に入り浸っているのだ。土方は踵を返すと、浅葱色の羽織りを握りしめ、自室へと向かった。

土方の部屋では、土方の予想通り、なつと総司が二人仲良く話していた。
「今日の晩御飯何にしよう。総司、何が食べたい？」
「なつが作るものなら何でも良いよ。」
実に幸せそうな二人。そこへ全く違う空気を持った部屋の主が帰ってきた。

「てめぇら、いつもいつも人の部屋で何してやがるんだ？」
地を這うような怒りのこもった声で言う土方。普通なら誰しもが恐れる空気。しかしこの空気に慣れている二人にとっていつもの事。多少土方が怒っていても全く恐れる気配はなかった。
「あ！これ羽織りですか？できたんだ！総司着てみて！」
土方から羽織りを奪い、総司に渡すなつ。
「似合う？」
「やっぱり総司に似合うなぁ～この色。」
土方の存在を忘れているようだ。
「てめぇら出てけーーー！！！」
土方の怒号が屯所を揺らした。

「うるさいなぁ、土方さん。こんな近くにいるんだからもっと小さくても聞こえますよ。」
眉間に皺を寄せ、嫌そうに嘆くなつ。
「お前…遊んでねぇで仕事しろよ！！」
「土方さんに言われなくてももう終わりましたよ！」
ああ言えばこう言うなつ。だんだん土方も諦めてくる。それを楽しそうに眺める総司。
「お前、京ことばはどうした。総司と遊んでる暇があったらやれよ。」
「ちゃんと習ってますよ。おまささんに。」
おまさとは、屯所の近くの飯屋の娘で、隊士達は常連となっていた。
「…京ことばって何ですか？習うって何の為に？」
土方はうっかり口を滑らせてしまったことに後悔した。土方に心を読み取った総司。
「土方さん、何を隠してるんですか？なつがなんで京ことばを習うんですか？」
普段、人の気持ちなど考えない総司。しかしこういう時にはやた

らと敏感になる。
「いや…それはだな…」
土方が弁明しようとしたその時だった。
「会津藩からお達しです！」
平助が慌ててやって来た。
「総司、仕事だ。この話はまた今度話す。」
仕事となれば仕方ない。総司と土方は皆が集まる部屋へ向かった。

初出動

総司と土方が部屋に行くと、皆は既に所定の位置に付いていた。なつは部屋の外から話を聞く事にした。

「会津候からお達しがあった。最近、長州の奴らが徳川幕府を比喩した歌なるものを立札にして立てているらしい。私たちはその撤去を命じられた。」

この頃、長州の久坂玄瑞らによる幕府を挑発するかのような行動に、会津藩は頭を痛めていた。これを会津直々にやってしまうと、長州を完璧に敵に回してしまう事になるのだ。

長州は過激なやり方ではあるが尊皇攘夷には変わりはない。ここで敵に回すのは得策ではない、と会津は考えているようだ。

そこで会津には直接風は当たらず、立札を撤去する方法として、壬生浪士組に託されたのであった。

「この人数で行くと騒ぎが大きくなる。よって選りすぐりの者で行こうと思う。」

近藤の言葉に、皆、息を飲んだ。

「沖田、原田、永倉、平間、野口。以上五名と芹沢さんと私だ。」

それまで目を瞑り、腕を組んでいた芹沢が意を決したように叫んだ。

「出陣だ！」

立札の前には、人だかりができていた。京の人は、京雀といわれるほど、噂話が大好きなのである。そして長州贔屓の京の人々からしてみれば、この立札はひとつの楽しみでもあった。

それを撤去するということは、京の人々から楽しみを奪うということにもなる。そして、長州に壬生浪士組というものを敵視されるようになるという事でもあった。

「近藤さん、これを抜いたらもう元には戻れねぇぞ。」
「元に戻る気持ちなど、清川に楯ついた時からありませんよ。」
局長二人の会話。それを総司らは見守った。
「いくぞ…」
芹沢の一言で、壬生浪士組の運命は進み始めた。
「我らは会津藩御預かり壬生浪士組である。」
立札の前に立ちふさがる壬生浪士組。京の人々の彼らに対する目は、決して良いものではなかった。訳の分からない田舎もんが京にやってきた。その程度のものだった。

京ことば

初出動を無事に終え、しばらく経ったある日。非番だった総司と井上が京の町をブラブラとしていた。いつも冗談ばかり言っている総司が何やら考え事をしながら歩いている。不思議に思った井上が総司に聞いた。

「総司、どうした？考え事か？」

「あのね、源さん、私何か忘れてるんですよ。」

「何を忘れているんだ？」

「その何かが思い出せないんですよ…。」

そう言われてはどうしようもできない。ちょうどおまさの店の前を通りかかった。

「小腹が空いたし、何か食っていくか？」

総司はなおも考え事をしながら、店へ入って行った。

「おまささん、なんか適当に見繕ってくれないか？」

「へい、おおきに。」

考え事をしている総司とお茶をすすりながらそんな総司を見つめる井上に、聞き覚えのある声が奥から聞こえてきた。

「きょおはさむおすなぁ」

「もうかりまっか」

「ぼちぼちでんなぁ」

商いの言葉としか思えないような、そして完璧棒読みの言葉に唖然としていると、

「そんなんあかんあかん！そんな棒読みやったら京女にはなれしまへんえ？京ことばはもっとやんわりゆうんよ。もう少し頑張らなあかんな、おなつちゃん。」

「「……なつ？！？！」」
あのたどたどしい京ことばを使っていたのが身内だったとは…。名前を呼ばれたなつは、特に驚く様子もなく、呑気に握り飯を口に運んでいた。

「なんでなつが京ことばを…？」
「あれ？源さん、土方さんに聞いてないんですか？」
「おなつちゃん、うちみたいな京女になりたいねんて。せやからうちが教えてるんよ。」
ひとり、噛み合わないおまさ。しかしそれには気付いていなかった。そして総司はようやく思い出した『何か』の真相を土方に聞くために、なつの手を引張り屯所へと帰って行った。

「お二人、仲良ろしなぁ。」
おまさは天然というのか、なんというのか…。

真相

屯所へ戻った総司となつ。総司の足の速さに合わせて走って来たため、なつはもうへとへとであった。
「そ…総司…土方さんの部屋でしょ…？先行ってて…」
息を切らしながら言うなつ。総司は頷き、土方の部屋へ風のように飛んで行った。

何の前触れもなく、勢い良く開かれた土方の部屋の障子。目が点になる土方のその先には、真剣な眼差しで睨む総司の姿があった。
「お…おぅ…総司…どうした…？そんなに急いで…」
総司のあまりに鋭い目線に、流石の土方も怖気づいてしまった。
「どうしたもこうしたもないです！なつが何で京ことばを学んでいるんですか？！土方さん、なつを危ない事に巻き込もうとしてませんか？！」
土方が隠し事をしている。それは総司に話しにくいこと。なつに危険な事をさせようとしている。
総司の第六感がそう教えているのだ。
「あぁ、その話か…。聞かれないから良いかと「良い訳ないじゃないですか。」」
土方の言葉を遮り、総司が言った。
「分かったよ。ちゃんと話すから最後まで聞け。反論なら最後に聞く。」
「分かりました。」

土方は深呼吸をしてから話し始めた。
「俺はなつと平助の試合を見て思ったんだ。なつの力を使えないかと。」
土方は誤解の無いよう、ゆっくりと言葉を選んで話始めた。

「特別に隊士にする事も考えたんだが、ここは女人禁制だ。女が隊士だと他の奴らの士気が下がる。そこで考えたのは、裏で働いてもらうという事だ。」
総司がピクリと動いた。
「裏というのは要するに密偵だ。なつには島原の女に扮して長州の奴らの情報を聞き出してもらう。島原の女には京ことばが必要だ。それで学ばせてるんだよ。」
しばしの沈黙が続いた。
「以上ですか？」
「以上だ。」
「反対です。」
間髪入れずに帰ってきた反対に、土方は大きな溜息をついた。

「反対ですよ！何故そんな危険な事をさせるのです！もし新撰組だとばれたら命だって危ないんですよ？！」
二人の討論が始まった。
「なつの強さなら己の身をも護れる！」
「もし相手の人数が多かったらどうするんですか？！」
「遊女に重要機密を喋る時に周りに人を置くはずが無い。そんな事喋るのは惚れた女にだけだ。惚れた女となら二人を望むだろう。まぁ、子どものお前には分からねぇかもしれねぇけどな！」
最後を強調して言った土方。しかし総司の頭を駆け巡ったのは『惚れた女』という言葉だった。

今までも、平助のようになつに告白した男はいた。しかしそれはなつ自身が断ってきていた。
もし、遊女としてのなつに惚れた男がいた時、なつはどうするだろう。否定？いや、情報のためなら肯定するかもしれない。肯定した先に待っているものは何だ？
他の男になつを触られるなんて絶対に許せない。

「やっぱり私は承知しかねます。」
男としては当然の答えだろう。好き好んで自分の女を遊女にさせたりしない。土方にも総司の気持ちは痛いほど理解できた。
「総司、分かってくれ。なつはばれるようなへまをするような奴じゃない。与えた仕事以上の仕事をする奴だろ？」
総司もそれは分かっていた。なつはへまなんてしない。でも気がかりなのは、もし、そういう事を求められたら…。
与えられた仕事以上の仕事をするなつなら、絶対に無いという保証はない。総司はそこが不安なのだ。
「お前が言いたい事は分かってるよ…。」
土方自身にもあった不安を総司が感じないはずがなかった。

決意

総司と土方の会話が止まったところで、障子がスッと開いた。
「なつ…」
なつは総司と走ってきた後、呼吸を整え、すぐに土方の部屋の外へ来ていた。しかし中から聞こえてくる二人の討論に、入ることが出来なかったのだ。なつは向かい合う総司と土方のちょうど斜めになるところに腰をおろした。
「総司、土方さん、約束します。あたし、絶対に身を売るような事はしません。それが誰であっても。」
総司を納得させるにはこう言うしかなかった。
もちろん島原の女になれと言われた時、そういう事を考えなかった訳ではない。総司よりも先に、他の男と関係を持ってしまうかもしれない。それは承知の上であった。
その罪悪感は、今の段階では分からない。仕事だからとその時、割り切れるかも分からない。でもなつには新選組には自分が必要だという証が欲しかったのだ。近藤や土方がそれを望むなら、喜んで島原の女になる。

「…だとよ…。総司、まだ納得してくれねぇか？」
総司はしばらく考え、心を決めたように呟いた。
「……分かりました。…でもお願いなんですけど…。」
総司のお願いが簡単な物であることを願う土方。
「京ことばを学ばせるなら、お梅さんにしてもらえませんか？」
言葉の出ない土方。とんでもないことを言うんじゃないかと構えていた土方が拍子抜けしてしまった。
「…それは別に構わねぇがなんでまた？」
「お梅さん、島原にいたんでしょ？それならその場にいた人間に教えてもらった方が良いじゃないですか。」

納得する土方となつ。
「それに…。」
「まだあるのかよ。」
「おまささんの教え方じゃまるで商人なんですもん。」
総司にすらこんな事を言わせるなつの京ことば。店で聞いたなつの京ことばがよっぽど駄目だったんだろう。
「…そんなに駄目だった？」
総司は申し訳なさそうに頷いた。
「なつ、覚えた言葉話してみろよ。」

「きょおはさむおすなぁ。もうかりまっか。ぼちぼちでんなぁ。」

固まる土方。
「芹沢の女に教えてもらえ…。」
頭をかかえながら土方が呟いた。
「えぇ～？！そんなに駄目ですか？！これ、さっきおまささんに合格もらったんですよ？！」
自信たっぷりに言うなつ。一方の総司と土方は頭が痛いといった動作をした。

京女への道のり

土方から一連の経緯を聞いた近藤は、なつと共に芹沢の部屋へ来ていた。一通りの説明を終えた近藤が、芹沢に頭を下げた。
「ぜひ、芹沢さんとお梅さんの力を貸していただきたい。」
近藤が頭を下げるのを見て、慌ててなつも頭を下げる。
本来ならば、なつを密偵にする事は芹沢に伏せておこうと思っていた。しかしお梅の力を借りるとなれば全て話すしか道はなかった。
「お前が密偵か。はっ…お梅教えてやれ。」
鼻で笑う芹沢に多少の違和感を感じながらも、納得してくれた事に安心した。
「うちが京ことば教えるんはかましまへん。せやけど中途半端は大嫌いや。やるなら完璧な京女になってもらいますえ？」
お梅は妖艶な笑みを見せながらなつに言った。なつもやるならば完璧になりたい。そう思っていたため、お梅の意気込みは逆に嬉しかった。

なんとか道が開けたと思い、近藤も安堵の表情を浮かべる。しかしそれは芹沢の一言で一気に不安な表情へと変わった。
「なつ、お前これから俺の部屋で寝ろ。」
「「……はい？！」」
思いもよらぬ芹沢の言葉に、なつも近藤も固まってしまった。
「完璧な京女になるんだろう？それならお梅がどんな言葉を使うのか、常に聞いておいた方が良いんじゃねぇのか？」
それも確かにそうだと納得しかけた近藤。しかしまたもやその納得は裏切られた。
「いややわぁ、芹沢はん。“あの時”もおなつはんを傍においておかはるの？」
それは妖艶にさらに磨きのかかったお梅の言葉であった。

「当たり前だ。遊女になるなら当然だろう。“そういう時”に京女がどう喘ぐのか、知っておかねぇと京女じゃないってバレちまうぜ？」
近藤は芹沢に怒りすら感じられた。自分の娘のように思っているなつにそんな事はさせられない。
「芹沢さん、やはりこの話は無かった事に「分かりました。勉強させていただきます。」」
近藤の言葉を遮ってなつが言った。
「なつっ！！」
「近藤先生、芹沢先生の言うとおりですよ。万が一に備えて万全を期すのが当然の事でしょう。」
なつは真っすぐ近藤を見据えていた。その視線に何の迷いもない。こうなったら頑として意見を変えないのを近藤は知っていた。そして自分が撒いた種だという事を後悔した。
なつを遊女にするという決断。これが正しかったのか、今の近藤には判断する頭を持ち合わせていなかった。

こだわり

それからなつは、仕事以外の時間はお梅と共にするようになった。お梅から発せられる一言一句、聞き逃すまいと必死だった。

夜、仕事が終わると芹沢の部屋へ行き、お梅の隣に布団を敷いて寝る。幸い、二人が事を成すことはなく、今のところ、問題なく順調に進んでいた。

なつの仕事は朝食の支度から始まる。それを終えると皆を起こしに行くのだ。

「山南はん…お食事の用意が出来ましたえ。」

山南の部屋の外から声をかけるなつ。山南は、照れくさそうに障子を開けた。

「なっちゃん、私たちの前では普通に喋って欲しいな。なんだかくすぐったくて…」

山南は苦笑いしながら言った。

「せやけど山南はん、普段からつこておかな完璧な京女にはなれしまへんやろ？せやから…勘忍え。」

なつは山南にニコリと笑いかけると、足早に他の隊士の部屋へ向かった。

なつの京ことばについては、幹部隊士は理由も全て知っての上だった。しかし平隊士には、単になつが京ことばに興味を持ったからという事にしてある。密偵になるという事は幹部にのみ話された事だったのだ。

ただ、なつにも京ことばに対してこだわりがあった。総司と二人の時は使わない。それはなつの優しさ。総司といる時だけは、偽りのない自分でいたいと思ったからであった。

なつは総司の部屋の前へ来ていた。
「総司、ご飯出来たよ。」
「……。」
返答がない。まだ寝ているのかとそっと障子を開けた。そこにはまだ規則的に呼吸をする総司の姿があった。

総司、まだ寝てたんだ…。

人が近くにいるというのに、何の警戒心も持たずに寝息を立てている総司がおかしかった。本当にこの人が剣客なのか不思議になるほどだった。

あたしが刺客なら、間違いなく総司、殺られてるよね。

物騒な事を考えつつ、総司の寝ている隣に寝転がり、寝顔を眺めていた。綺麗な目鼻立ちは誰もが見入ってしまう程。それをこんな間近に見ていると、自然と顔が赤くなる。
すると突然目の前が真っ暗になった。そして温かな温もりが伝わってくる。少し離れて転がっていたなつを総司が引き寄せたのだ。
「朝から寝転がってきて何してんの？」
「……／／／／／／何してるはこっちの台詞だよっ／／／／」
総司に抱きしめられながら、強がりをいうなつ。恥ずかしさでいっぱいだった。

なつを抱きしめたまま一向に離れない総司。
「そ…総司？いつまでこうしてるの？あたしまだ土方さん起こさなきゃいけないんだけど…」
「…んーもうちょっと。土方さんなんてどうでも良いよ。」
土方本人が聞いたら青筋をたてるだろうが、総司の言い方はとても可愛かった。

「総司、もう少し警戒心持った方が良いんじゃない？あたしが刺客なら総司殺られてるよ？」
笑いながらいうなつに総司も笑いながら返した。
「本当の刺客なら殺られないよ。なつだって分かってたもん。」
総司はなつの廊下を歩く足音で起きていた。それは毎日聞く音で、愛しい人の音だから。
「え～！寝たふりしてたの？」
「そうだよ。」
悪戯っ子のような笑顔でなつの顔を覗いた総司。思った以上に近かった顔に赤面する。それはなつも同じ事で、目を逸らしてしまった。
しかし逸らした視線をもう一度ぶつかり合わせ、静かに目を閉じた。

唇が重ね合いそうなその時、
「総司いつまで寝てんだ！！なつはど…こ……に……。」
なつが起こしに来ないと食堂へ行くと、総司もまだ起きてきていない事を知った土方。なつの居場所を総司に聞こうと総司の部屋へ来てみたら…。
土方の目に映ったのは、布団の上で抱き合いながら今にも口付けしそうな距離の二人。
「てめぇら朝から何やってんだーーー！！！！」
土方の怒号が屯所中に響き渡るのであった。

鴨の噴火

ここ最近、芹沢は目立った動きをしていなかった。ようやく壬生浪士組として、京の治安を護るべく働いてくれるのだと近藤は思っていた。しかしそれは嵐の前の静けさであった。

ある日の晩、芹沢らは大和屋に押し入り、借金を申し立てに来ていた。この日、大和屋の主人は外出しており、番台が対応していた。番台が言うには主人が帰って来てからでないと金は出せない。ということだ。

「おい、お前…。我らは会津藩御預壬生浪士組であるぞ。その我らに金が出せないというのなら、御厚誼に楯つくという意味か？もう一度聞く。金を出せ。」

芹沢は地を這うような声で言った。

「せやからお客はん、今日は出せへんいうことですわ。明日、主人が帰って来ますさかい、今日は勘弁しとおくれやす。」

番台はすっかり困り果てている。京で恐れられる壬生浪士組が来ている。こんな時に限って主人がいない。

「そうか、分かった。」

芹沢に言葉に安堵した大和屋の番台。ようやくこの苦しみから解放されるのだと思った。しかし、その番台の想いは大きく違っていた。

「金を出せんというのなら、御厚誼に楯つくものとみなす。お前ら、やっちまえ。」

芹沢は、平間・平山・野口に言った。彼らは形ある物全てを破壊していく。芹沢と新見はそれを愉快そうに見ていた。

店の者は逃げ惑い、番台は破壊されていくのをただ茫然と見つめていた。

部屋の中の物を破壊し終えると、家財道具や帳面を蔵に投げ込ん

だ。そしてそこに火をつけた。蔵は瞬く間に炎に包まれ、轟音を成して燃えていた。

大和屋の一件は会津藩からの使いにより、近藤・土方に伝えられた。

「芹沢さん、なんてことをしてくれたんだ…。永倉くん、左乃助、島田を火消しに回してくれ。」

近藤は早急に指示を出した。

芹沢の暴挙は止まるところをを知らなかった。次の事件は島原の『角屋』で起きた。

ひとりの芸妓が芹沢の問いかけを無視した形になってしまったのだ。もちろん故意ではない。周りが騒がしく、聞こえなかっただけなのだ。

芹沢はそれに腹を立て、愛用の鉄扇で目の前にある器を割っていった。それだけではおさまらず、壺や掛け軸、壁などを破壊した。そして自分に無礼を働いたという理由で角屋に七日間の営業停止を申し出たのであった。

芹沢を無視したとされる芸妓は女の命ともいえる髪を切られ、芹沢はそれを酒の肴にしたという。

この事件は会津藩へもすぐに知らせが行った。公用方の広沢より、自分たちの始末は自分たちでしろと半ば諦めのようなお達しがあった。芹沢らの悪行により、壬生浪士組の会津藩からの信頼は皆無に等しくなってきていた。

狂喜（前書き）

少々、過激な表現が出てきます。

狂喜

角屋で暴れ帰って来た芹沢は、自室に戻り勢い良く障子を開けた。そこにはいつもの通り、お梅と仕事を終えたなつが床に就いていた。乱暴に開けられた障子の音に二人は目を覚ます。

「芹沢はん…お帰りやす。」

起き上がり、頭を下げたお梅。芹沢はお梅を見つめ、なつに視線を移す。芹沢のその視線に背筋が凍るような嫌な汗が流れた。

芹沢は笑っている。いや、口元は笑っているが目は笑っていない。

「おい、なつ…お前に良いものを見せてやるよ…。」

そう言うと、芹沢はお梅の唇に乱暴に自分の唇を押しつけた。

「ちょっと…芹沢はん…？！」

お梅は驚きながらも嫌がる様子は無く、芹沢のされるがままになっている。そして次から次へと来る芹沢の波に身を任せ、時々なつの顔色を伺うのだった。

迫りくる波に、お梅の顔は歪んでいく。しかしそれはとても美しく、普段のお梅よりも遙かに色気のある表情をしていた。

「どうだ…なつ？お前もそのうちこんな事をするんだ。その相手が沖田なのか島原の客なのかは知らねぇがな…。」

芹沢は笑っている。まるで血に飢えた獣のように。

芹沢は必要なまでにお梅の躯を求め、お梅はその度に快楽の渦へ身を投じていた。

なつは動けなかった。芹沢とお梅の激しい求め合い。見たくないという感情とは相反するように、なつの視線は芹沢とお梅から離れなかった。そしてふと気付く。

身体が熱い…。

自分の中に生まれたほてり。これが何なのか分からない。ただ、

身体が熱かった。

動かぬ体に鞭を打ち、ようやく芹沢に部屋から脱出したなつ。芹沢の部屋からは遠い縁側に腰を降ろしていた。

まだ冷めやらぬ身体を摩りながら、思い返してしまった芹沢とお梅の成り行き。

芹沢の獲物を見つけたような獣の目。

お梅の淫らな声と快楽に歪む顔。

お梅から放たれる尋常ではない色気。

お梅のあの色気を感じた時に、ようやく分かったことがある。あれが『男に抱かれてでる色気』

なつは思い出すだけでまたほてりを感じるようになっていた。

大人への階段

溜まった仕事に埋もれていた土方。気分を変えようと廊下へ出た。そこには月明かりに照らされ、顔をほんのりと染めた、なんとも言えない表情をしたなつの姿があった。

トクン…

土方は自分の中に起きた違和感に気が付いた。

な…何動揺してんだよ、俺…。

今晩のなつにはいつもと違う雰囲気が漂っていた。土方が自分の中の違和感と葛藤していると、なつが土方の存在に気付いた。

「土方さん…。」

トクンッ……

…まただ……。

いつもと変わらぬ声なのに、いつもと全く違う空気に包まれているなつ。

土方が頭を抱え、何やら呻いている。不思議そうに土方を見上げていると、土方はなつの隣にどかっと腰を下ろした。

「土方さん、どうしたの？」

土方の様子に疑問の表情を浮かべるなつ。

「何でもねぇよ…。」

まさかなつに女を感じたなんて、口が裂けても言えない。土方はいつもと変わらぬふりをした。そんな土方に、なつは質問をぶつける。

「土方さん…なんで土方さんは女の人を抱くの？」
「…はぁっ？！」
なつから出た思わぬ質問の声が裏返った。
「何で？好きだから？どんな時に抱きたいって思うの？」
「…それはだな……抱きたいからだ。抱きたい時に抱く。」
「それだけ？じゃあ今は？今は誰かを抱きたいって思う？」
なつの話の意図が全く読めない土方。しかし、なつから感じた女の色気に、身体が熱くなったのは事実だった。
しばらく考え、ボソッと呟いた。
「そういや最近、抱いてねぇなぁ…」
次になつから発せられる言葉に、土方は唖然となる。
「…じゃあ土方さん……あたしを抱いて…？」
言葉の出ない土方。開いた口が塞がらないとはこの事。
なつの表情は真剣だった。
「…あのなぁ…いくらなんでも総司の女抱くほど不自由はしてねぇよ…」
「土方さんのためじゃない。あたしのために…。」
「抱いてほしけりゃ総司の所に行けよ。あいつに妬まれるのはごめんだぜ？」
「……。」
この時、土方は気が付いた。なつが元の言葉に戻っていることを。最近は総司と二人の時以外、京ことばで話していたのだ。それは土方に対しても同じ事であった。しかし今のなつはすっかり戻っている。
「お前…なんかあったろ？何があった？話してみろよ。」
土方の誘導するような言い方に、なつの口も動く。
「芹沢さんが…お梅さんを……。」
「ついに…か…。それを見せられたんだな？」
なつは小さく頷いた。
「動けなかった。見たくないのに金縛りにあったみたいに身体が言

う事利かなくて…。そしたら身体が熱くなってきて、自分の身体じゃないみたいで、怖くて…。」
なつは身体が震え出した。土方はなつを落ち着かせるようになつの肩を抱き、自分の方へもたれかからせた。
「なつ、それはお前の身体が男の身体を求めてたんだ。」
土方の発言に、なつは顔を紅潮させる。
「っそんな…求めるだなんて…／／／／／／／」
あのお梅の立場になりたいと、自分の身体が言っていたのだろうか。あんな淫らな声と表情になりたいと…。
「何も恥じらう事じゃねぇ。大人になった証拠だ。」
土方にそう言われようと、女が男を求めるなんて…。否定しようと口を開けかけた所で、土方に割って入られた。
「実際、俺に抱いてくれって言ったじゃねぇか。」
「っっ…それは…」
「男と女が求め合うのは恥じらう事じゃねぇ。それじゃないと餓鬼は生まれねぇし、俺やお前だってそうなった末に生まれてきたんだ。」
納得する反面、なつの中に疑問が湧いた。
「土方さん、子どもいるの？」
またもやなつの発言に唖然とする土方。
「いねぇよ！何で俺に餓鬼がいんだよ！！」
突拍子もないなつの質問に本気で否定する。
「だって土方さんぐらい女の人抱いてたら一人ぐらいいるのかな～と思って。」
「…いや、俺はだな…餓鬼ができねぇようにうまくやってんだ…って俺は何を言ってんだ！！」
「……。」
なんの返答も反応も無くなったなつ。顔をのぞいてみると、気持よさそうに眠るなつの姿だった。

はぁ～…しょうがねぇ奴だな…。

土方はなつを横にさせ、自分の膝になつの頭を乗せた。

誤解と弁解

いつの間にか眠ってしまった土方。目を覚ますと、周りには疑いの目を向ける試衛館組がいた。
「おはよう、歳。」
「お…おう…？」
現状の掴めていない土方。
「土方さん、どういうことですか？」
総司の言い方にはやたら刺がある。
「な…何がだ…？」
そこに土方の膝枕で寝ていたなつがむくりと起き上った。辺りを見渡し、
「皆さんお揃いで。おはようさんどす。」
昨日とは打って変わってすっかり京ことばになっているなつ。こちらも現状を掴めていない様子だが、土方と顔を合わせ思い出した。
「「……あ…」」
声の揃うなつと土方。
「何が『あ』なんだよ。土方さんが総司の女に手ぇ出しちゃまずいんじゃねぇの～？」
ニヤニヤと茶化すように左乃助は言う。
「いや…これには訳があってだな。昨日の晩、気晴らしに部屋の外に出たらなつがいて、抱くだの抱かねぇだの話してたら寝ちまったんだ。」
明らかに要約の仕方を間違えた土方。最も怪しい回答をしてしまった。
「歳！！お前って奴は…なつは総司と恋仲なんだぞ？！分かってそんなことをしているのか？！」
「土方さん、やっぱやることが違うね～。」
「土方さん…いつでも殺してあげますよ…？」

「こんなところで…ですか…？」
「土方さん、これは沖田さんに謝った方が良いのでは…。」
皆、口ぐちに言う。
「うるせぇぇぇぇぇぇ！！！！」
土方のあまりの声の大きさに静まり返る一同。
「何を勘違いしてんのか知らねぇが俺はなつを抱いちゃいねぇ！ちょっと女に見えただけだ！！」
無言でさらに軽蔑の目を向けられる土方。またもや爆弾発言をしてしまったのだからもういい訳の仕様がない。
「あ、いや、そういう意味じゃなくて…。」
「そう言う意味じゃないとなるとどういう意味なのでしょう？」
普段、物静かな源三郎にまで言わせてしまった。よっぽどだったのだろう。
そんな中、喜ぶ者がひとり。
「土方はん？うちのこと、女に見えたんどすか？それは色気を感じたいうことやろか？」
昨日のなつはどこへ行ったのか。悪戯っ子の目をしたなつがそこにいた。
「いや…色気を感じてないって言ったら嘘になるけど、いやでも…」
しどろもどろな土方の言い方に、ますます怪しい疑いが掛かってきた。
「と、とにかくだな…悪いのはおめぇだ総司！！」
「わ…私ですか？！」
突然、悪者扱いをされた総司。
「おめぇがさっさとなつを抱いてりゃこんなことになんねぇんだよ！！」
朝の発言とは思えないことを言い出した土方。皆、呆れたように戻って行った。
自室で先ほどの発言を反省した土方。誤解招く言い方をし、朝と

は思えない発言。動揺していたとはいえ流石にあれはまずい。土方は善は急げと総司の部屋へ向かった。
「総司いるか？入るぞ。」
「何ですか？変態副長。」
総司は皮肉たっぷりで言った。
「へ…変態って…。」
「あれ？違いました？私の中で土方さんは変態以外何者でもないんですけど。」
総司の言葉ひとつひとつが痛い。総司は自分の知らないなつと土方の時間によっぽど恨みがあるようだ。
「俺はちゃんと釈明しようと思って来たんだよ。」
「分かりました。聞きますよ。」
ようやく聞く体制になった総司。誤解のないよう、言葉を選びながら話し始めた。
「昨日の晩、部屋の外に出たらいつもと違う雰囲気のなつがいたんだ。嘘は言わねぇ。俺はあいつに色気を感じた。そしたらなつが俺に気付いて、俺に抱いてくれって言ったんだ。」
総司は目を丸くした。まさか自分の恋仲の相手が他の男に抱いてくれなんて言うとは…。
「でも普通ならそんなこと言わねぇだろう。問いただしたら、どうも芹沢が女をなつの目の前で抱いたらしい。戸惑ったんだとよ。そしたら身体がほてりだしたらしく。その意味を俺が教えてやった。」
「なんて言ったんですか？」
「それは身体が男を求めてる証拠だってな。」
言葉が出ない総司。おもわず顔を赤らめる。
「そういうことを話してたらあいつが寝ちまったんだよ。動かすのもあれだから寝かせてやってただけだ。だから俺は変態じゃねぇ！」
語尾を強調するが、総司の耳にそんなことは入らない。
「なつ、なんで私のところへ来なかったんだろう…。」
「さぁな。恥じらいがあったんじゃねぇか？……お前、もしなつ

がお前の部屋に行ってたらどうしてた？」
「どうしてたとは？」
「なつを抱いてたか？」
「……当たり前じゃないですか…。」
自信のなさ気に言う総司。それに気付きながらも土方は言葉を続ける。
「じゃあ早くあいつを抱いてやれ。大人になれよ、お前も、なつも。」
総司は赤くなった顔を土方に見せないように俯いた。

土方が部屋を出て行った後、総司はひとり考えていた。
土方にああは言われたものの、どうして良いか分からなかった。なつと恋仲の関係になり、だいぶ経つ。なつは今、芹沢の部屋で寝ているためそういう機会もない。
自分がなつを求めて拒絶されたりしないだろうか。その自分をなつはどんな目で見るのだろうか。様々な不安が頭を過ぎった。なつを大切に思うが故の考え。総司は頭を抱えていた。

密偵要請

局長室では、近藤・土方・山南の三人が険しい顔をしながら話していた。
「何やらここ最近の長州の動きが怪しいんです。帝に攘夷を実行してもらうとかもらわないとか…会津藩からは何も情報が入りません。正確な情報が欲しいとこだが…」
山南はいつも浮かべる優しい笑みを消し、腕を組んでいた。
「そろそろなつの出番だな…。」
頷きながら言う土方に、近藤が待ったをかける。
「いや、歳…その話はもう少し考えないか？やはりなつには荷が重すぎる。」
呆れたように土方が反論した。
「おいおい、本気で言ってんのか？何のために京ことばを習わせたんだよ。今更無しにしようなんてなつが納得するはずねぇだろうが。あの頑固者。」
「近藤さん、なっちゃんには新選組にとって必要だという自信を持たせた方が良いと思いますよ？女中としてだけでなく、私たちの片腕として。それを彼女は望んでいるんじゃないですか？」
土方に続いて意見する山南。二人にここまで言われたら、無しとは言えない。納得したような、まだ迷いがあるような表情で近藤は言った。
「……分かった。なつを呼んで来てくれ。」
土方は立ち上がり、なつを呼びに行った。

その頃なつは、中庭で大きなたらいに大量の洗濯物を入れ、洗おうとしているところだった。
「おなつちゃん、手伝おうか？」
平助が声をかけた。実は平助、未だなつへの想いを断ち切れずに

いた。しかし総司となつの間に入るつもりもなく、ただなつの傍にいられれば良いという純情な想いを抱いていた。
「平助はん、おおきにな。」
ニコリと笑うなつに、平助は顔を赤らめる。総司のいない、なつとの二人の時間。堪能しようと思っている平助の想いは見事に打ち砕かれる。
「なつ！仕事だ。」
土方の真剣な表情に、その仕事が女中としての仕事じゃないことをすぐさま察知する。しかし、洗濯物はやり始めたところ。中途半端にはできない。
そのなつの心を読むかのように、土方が平助に言った。
「平助、頼んだ。」
「……え？一人で？」
当たり前だという土方の視線に、平助は何一つ反論できない。
「平助はん、よろしゅう。」
なつはまたニコリと笑う。その顔を見て嫌だとは言えない平助は、ひとり黙々と洗濯物をこなしていくのであった。

土方の後ろを、緊張の面持ちで歩くなつ。土方は黙って近藤の部屋へ入った。
「失礼します。」
土方に続いて入り、近藤の正面に座る。
「なつ、よろしく頼む。」
ただそれだけで、仕事が任務だという事を理解した。
「承知致しました。」
頭を下げる近藤に、なつも同じように頭を下げる。
「詳しい内容は山南さんに聞いてくれ。お前が行く店は富音屋という店だ。」
山南に任務内容を聞き、近藤の部屋を後にした。

「総司に言っておくべきかな…。」
自室で独り言をボソッと呟いた。
しかし、顔を合わせて何を言って良いのかも分からず、総司はもちろん、他の隊士に会わないように裏口から出て行った。

天神牡丹

屯所をひっそりと出てきたなつ。必要最低限のものだけ持って、見回りの隊士に合わないように急いで島原へやってきた。
なつの密偵は幹部のみが知る、重要機密でもある。いつ新選組に長州からの間者が入るかも分からない。もしなつが密偵であることが長州にばれると密偵であることの意味がなくなってしまうからであった。

なつが遊女として出る店は、富音屋という店。島原に多くある置屋のひとつでもある。
「こんにちはぁ。」
なつの声が店の奥にいる女将に聞こえた。
「へぇーい…あんた、おなつはん？」
「なついいます。急なお願いで申し訳ないんどすけど、よろしゅうおたの申します。」
なつが頭を上げると、にこやかな女将の姿があった。
「おなつはん、よろしゅう。うちは女将の菊どす。あんたには天神を用意してあるさかい、頼むえ？」
天神という太夫に次ぐ地位をもらい、驚きの表情のなつ。その顔を見て、女将はくすくすと笑った。
「なんえ？その顔。あんたぐらい別嬪なら天神じゃたりひんぐらいやわ。太夫にしてあげたいんやけど、それやったら張り合いないやろ？おきばりやす。」
「天神なんうちにはもったいないくらいどす。せやけど精一杯努めさせてもらいます。」
なつの前向きな姿勢は、女将に好印象を与えていた。
「せや！うち、あんたの名前考えてん。『牡丹』や。寒い冬に咲く花。この物騒な世の中でも綺麗に咲いてほしいんや。えぇ名前やろ

？」
「ほんまえぇ名前。名前に恥じんようにせなあかんな。女将さん、ほんまおおきに。」
ここに新選組密偵なつ、天神牡丹が誕生した。

天神には、身の周りの世話をする『禿』という、見習いの女の子が付く。寝食を共にし、天神の振舞いや気配りなどを見て学ぶのだ。
禿はほとんどの子が売られてきた子。七、八歳ほどの少女だ。こんなにも小さい頃から、遊びに来る男達を見ている。心に傷を負っている子も少なくなかった。
天神牡丹に付いた禿は八歳の蓮華という少女である。彼女はとても好奇心旺盛で、彼女の方からなつに話しかけてきた。
「牡丹姉はんはどこから来はったん？」
「うちは大坂から来たんよ。」
「ほなすぐ大阪に帰りはるん？」
「うちはここに手伝いに来たんや。せやから何れは帰らなあかん。」
そういうと蓮華はとても悲しい顔をした。
「そうなん…。うち、牡丹姉はん好きや。ずっと傍におって？」
「しばらくはずっと一緒やで。仲良うしよな。」
蓮華の頭をぽんぽんとすると、蓮華は満面の笑みを浮かべた。
「蓮華、ひとつ約束事があんねん。」
「なんどすか？うち、約束は絶対守るえ！」
人懐っこい笑顔を見せた。
「うちの大事なお客はんが来てはったら、良い言うまで入ってきたらあかんえ？」
蓮華は一瞬戸惑いの表情を見せたが、その意味を理解したのかしてないのか、大きく頷いた。

こんな小さい子に見せるわけにはいかない。ここは島原、遊郭。男と女には何が起きるか分からない。ましてやなつは密偵としての

仕事がある。体を売ってでも得なければいけない情報が眠っているのだ。

愛する相手でなくとも、仕事だと割り切らなくてはいけない。それが天神牡丹に与えられた使命。

不安

なつが島原へ行ってからの隊士たちへの食事は、八木家の人が作っていた。どうも食の進まない者が多かった。

「なんか食ってる気しねぇなぁ。全然味がねぇ。」

どんなものでも文句を言わない左乃助でさえ、こんなことを言い出した。それもそのはず、なつが作る食事というのは東の味付け。京の人からすればそれは食材の味を消しているとでも言うかもしれないが。それ故、京の味付けは全く味がないように感じていた。

「おなつちゃんがいないんだろう。仕方ないさ。」

「なつはどこに行ったんだよ。」

「土方さんに仕事だって呼ばれてから見かけてませんよ。もしかして、島原にいったんじゃ…。」

「そうか…」

左乃助・永倉・平助は味のないものを仕方なしに口にしながら話している。

「島原か…総司、納得したのか？…っていうかあいつ、大丈夫か？」

三人が総司の方を見ると、定まらない視線でどこを見ているのか分からない。出されている料理を口に運んではいるが、味など全く分かってなさそうにしていた。

総司は何も考えられないようだった。自分に一言も無しに行ってしまったなつ。いつ帰ってくるかも分からず、行こうにも店の場所も名前も土方は教えてくれなかった。

場所が場所なだけに、総司の不安は募る一方。ただ溜め息ばかりが出ていた。

そんな総司を見つめている近藤。土方のやり方は正しい。しかし少し強引なのじゃないかと思う所もあった。

「歳、総司にぐらい店の場所を教えてやったらどうだ？」

こちらも食の進まない様子だが、それでも出されたものは全てたいらげた近藤が土方に耳打ちした。
「それじゃなつの身がはいらねぇじゃねえか。せめて何かの情報を得てからだ。」
ぶっきらぼうに言う土方。近藤も分かってはいるが、総司を見ているといたたまれなくなるようだ。近藤自身が総司に教えてやれれば良いのだが、重要機密ということで、土方以外知るものはいなかった。局長である芹沢も近藤も例外ではない。
なつは絶対に新選組の関係者だとばれてはいけないのだ。そのためには情報も徹底する。それが土方のやり方だった。

久坂玄瑞の野望

天神牡丹はすぐに座敷にでることとなった。まるで運命に引き寄せられるように、牡丹は長州の侍の座敷へ。

「長州のお侍はんは羽振りがえぇんや。頼むえ？」

女将は親指と人差し指でお金を表しながら牡丹の肩を叩いて行った。

「失礼いたします。天神牡丹どす。よろしゅうお頼申します。」

座敷に現した天神牡丹は、整った顔立ちに遊女特有の化粧をし、真紅の着物に包まれていた。

「おぉ！これが天神か？！じゃあ太夫はどんな賜物なんだ。」

牡丹が顔をあげると、そこには男が二人。そして二人とも天神牡丹に釘付けになっていた。

「桂さーん、俺、この女気に入った。別嬪だし、この顔は頭がきれるぞ。知的な女、かっこ良いじゃねぇか。」

一目で気に入られるとはなかなか幸先が良い。そして桂と呼ばれた男は呆れながら言う。

「お前、一目惚れか？久坂。牡丹、この男は良い男だぞ。学もあり、剣の腕も天下一品だ。少し無鉄砲なとこもあるがな。」

「無鉄砲は余計だ。」

桂小五郎と久坂玄瑞。この二人は長州の重要人物であることを、牡丹は野生の勘というのか、逃してはならないという気がしていた。そしてここからが天神牡丹の本領発揮である。

「久坂はん、うちは強うて頭の良いお方が好きなんどす。男はんは強引なとこがあった方が魅力ありますえ？」

褒められて、好かれて嫌な男はいないはず。そして男も好きになる。まんまと天神牡丹に騙された男は、牡丹の誘導で重要機密ですら話してしまう。それには、天神牡丹は知的である必要があった。

久坂は早速、天神牡丹の罠にはまってしまったようである。

金払いの良い長州人。牡丹は次から次に酒を勧め、桂は既に眠ってしまっていた。それも牡丹の罠だとも気付かずに。
「久坂はん、また来てくれはります？今度はお一人で。」
牡丹は久坂にもたれ掛かるように、久坂の膝に手を添えながら上目づかいで言った。久坂は顔を赤らめ、小さく頷いた。
「久坂はん、照れ屋なんどすなぁ。そういうとこ、好きや…。」
重要機密を喋るには、まず邪魔者がいてはいけない。二人きりになって初めて、真意が聞けるというもの。そのために牡丹は久坂ひとりに的を絞ったのだ。そしてそれは正しかったという事が直ぐに証明される。

そう、久坂は本気で天神牡丹に惚れてしまったようであった。あれから毎晩のように牡丹は久坂の座敷へ出ていた。もちろん久坂は一人だ。
話は久坂の生い立ちから、吉田松陰という師の下で松下村塾に通っていたこと、そしてその師が幕府により処刑されたこと、久坂が京にいる訳、桂という人物、松下村塾の他の塾生のこと…。牡丹が聞くこと全てに久坂は答えていった。それにより、久坂玄瑞という男が、長州の過激攘夷派志士だということを牡丹は知った。
「久坂はん、今から何をしようとしてはるの？うち、久坂はんの事は何でも知りたいんや。」
牡丹は久坂に酒を注ぎながら言った。
「牡丹、お前は俺に惚れてるのか？」
「なんえ？いきなり。」
久坂は牡丹の両肩を掴み、顔を覗き込む。動揺する牡丹、久坂の真っ直ぐな視線に固まってしまった。そして久坂は自分の唇を牡丹の唇に押しつけた。強引で、欲望が渦巻くような口付け。牡丹はもがくもなかなか離さない久坂。酸欠で頭が朦朧としてくるほどだった。ようやく離された口から大量の空気が肺に入り、むせ返す牡丹。

呼吸を整え、久坂を睨みつけた。
「す…すまない…。」
牡丹に睨まれ我に返る久坂。しかしその口から、牡丹の欲しかった情報が紡がれた。
「牡丹、我らは帝に大和行幸を行っていただく勅許を得たのだ。八月十三日、帝に攘夷の祈願していただくために大和国へ参拝していただく。そして攘夷を始めるのだ。もたもたしている幕府には任せておけんからな。」
そして久坂から真意が語られる。
「帝が直々に攘夷を行ってくだされば、幕府の権威は失墜する。それが狙いだ。」
長州の考えは、帝を利用し、幕府をつぶそうとしている。牡丹にはそう感じられた。新選組である牡丹に長州の真意を話してしまった久坂。しかし、そんなことには全く気付いていなかった。
「我ら長州が新しい世を作る。だから牡丹、それまで待っていてくれ。」
久坂はそう言い残し、店を後にした。

八月十八日の政変

一連の長州の真意はすぐに新選組に伝えられた。近藤が会津候へその旨を知らせようとしていた時、会津と薩摩は長州のやり方を危惧し、長州を京から追い出すという計画を立てていた。そして新選組にも出動命令が下ったのである。

「我らはこれから御所に参内し、御花畑を護るよう命じられた。」

近藤が皆の前で言った。

「御花畑？何だそれは。もっと大きいもんじゃねぇのかよ。花を護ってどうするんだよ。」

芹沢は明らかに嫌そうな顔をした。

「私にもよく分からないんです。広沢様も知らないって言うし、行ってみないことには何とも…。」

近藤は会津藩の公用方の広沢から命を受けたのだが、おそらくあまり必要でないところなのであろうことを近藤は理解していた。

「とにかく行くぞ。出陣だ。」

芹沢の号令で、新選組は御所へ向かった。

新選組が御所へ着いたころには、既に門には会津や薩摩・淀などの兵士が護りを固めていた。

「何だ、お前ら。関係のないものは即刻立ち去れ。中へは一歩も入れさせん。」

門を護る兵士は浅葱色の羽織を纏った者たちを一掃しようとしていた。刀を抜き、いつでも斬りかかれるような体制をとっている。

「我らは会津藩御預かり新選組である。会津候の命により御花畑を護るよう賜ったのだ。中へ入れさせていただこう。」

近藤は胸を張って言う。しかし門を護る兵士たちからは失笑が漏れている。

「御花畑だってよ。」
「壬生狼にはそれくらいで十分だな。」
あちこちから聞こえる声に、皆の顔からは怒りが込み上げて来ていた。その時、ある男の一言で笑っていた者達から顔色を奪う。
「黙れっ！！」
芹沢は鉄扇を広げ、近くにいる兵士の頬を軽く叩いた。その兵士は芹沢のあまりの迫力にその場にへなへなと座り込んでしまった。芹沢の威圧により、新選組は悠々と門を通って参内できたのだ。芹沢の存在を嫌という程感じた土方。悔しさが溢れていた。芹沢の存在こそが局長という風格であり、威厳であった。そして土方は決意する。
『近藤を局長とするためになら、自分は鬼になってやる。』

新選組が御花畑を護っている頃、堺町御門では長州と薩摩の睨みあいが続いていた。
「堺町御門は我ら長州がお護りすることになっている！」
「長州は門の護衛から外された。即刻立ち去れ。」
「何を言う！帝にお伝えしろ。長州藩士久坂玄瑞がお迎えに参ったと。」
「帝は長州に愛想をつかされたのだ。即刻立ち去れ！！」
長州藩は御門を強行突破することも出来ず、京を追われることとなった。
これが後に、『八月十八日の政変』と呼ばれるようになる。

幸せの時間

一応の任務は終えたなつ。しかしまだ島原にいた。任務が終わったとはいえ、店には手伝いとして入っている。約束された期間は、遊女として、お座敷にでていた。

その約束された期間も今晩まで。次の客の座敷が終わればなつの仕事は終わり、屯所へ帰れるのだった。

いつものように襖の外から声をかける。

「ようこそ富音屋へおいでくださいました。天神牡丹と申します。よろしゅう。」

開けられる襖。頭を上げ、中の客と視線を合わす。

「あ……。」

そこには、会いたくてたまらなかった人の姿があった。

「総司…」

何も言わずに屯所を出てきたなつ。天神牡丹の姿を見られるのは心苦しいものがあった。この姿でお座敷に出ていた。久坂との一件もあった。

しかし総司を見ると、ただ愛おしく自分を見てくれている。仕事だから仕方がないといわれればそうだろう。しかし総司に対する罪悪感が心の片隅にあったのだ。

「……ごめん…。」

「何に対するごめん?」

「えっと…何も言わずに出てきたこと…。」

「それから?」

「え…っと……。」

久坂の事は口に出せなかった。きっと総司なら分かってくれる。仕事なんだから仕方がない。でも言えない。なつはそう思った。

下を向き、言葉を探すなつ。沈黙を破ったのは総司だった。

「お疲れさま。」
総司はなつの言葉を待たずして、なつを抱きしめた。屯所にいる時の素顔のなつではなく、遊女特有の化粧をし、艶やかな着物に包まれ、女性らしさを一層増したなつを。
甘い香りが総司の鼻をくすぐる。こういうお店へは来ることがない。来たとしても何人かでだったり、新選組の宴会がある時だったり。こういうところで二人っきりになるということだなかったのだ。
「総司…？」
何も言わない総司。ただ抱きしめただけで、しゃべろうとしなかった。不審に思ったなつが総司の顔を覗き込む。上目づかいで総司を見るなつ。
「……／／／／／／／／…なつ…。」
「何？」
「そんな目で見ないでよ…」
「え？」
顔を赤らめる総司に気付かないなつはさらに総司に顔を近づけた。
総司の糸が……切れた。
「え？！？！」
くるりと視界が変わる。総司はなつの上にいた。
「総司？！」
「なつが悪いんだからな…。そんな目で見るから……。」
総司はなつに反論させないように自分の唇でなつの唇をふさいだ。総司の口付けは優しく、包み込むような温かさがあった。久坂のように自分の欲望だけの強引な口付けではない。愛のある口付けに、なつは酔いしれていた。
一向に反攻しないなつに、総司は戸惑いを感じ始める。体勢が体勢なだけにどうすれば良いのか…。馬乗りの状態から普通に戻るのも不自然。そして自分の限界というものも感じていた。

総司の唇が徐々に下に下りていく。鎖骨らへんに来た時に、なつもいつもと違うことに気付いた。
「総司…？」
「そろそろ…良いだろう…？」
「／／／／／／／／／／／／／／／」
総司の言っている意味は分かる。顔を赤らめながら小さく頷いた。

不器用に外されていく帯にも、総司の息遣いにも、全てに神経を集中するなつ。でもそれは幸せの瞬間だった。固まっていた身体がだんだんとほぐれていく。総司の身体から溢れる愛を感じ、そして総司からの愛以上の愛を返そうと努力する。
二人にとって、幸せな時間だった。

屯所での報告

総司との愛を確認し合った次の日、なつは島原での仕事を終え、屯所へ帰るところだった。店の女将と禿の蓮華に挨拶をし、島原大門に差し掛かった。

「なつ！！」

名前を呼ばれ、顔を上げるとそこには愛しい人の笑顔があった。

「総司、今日、見回りは？稽古はないの？」

「さぼった。」

「土方さんに怒られるよ～？」

そう言いながらも嬉しさを隠せないなつは顔がほころぶ。総司はなつの手をとり、屯所への道を楽しそうに歩いていた。

二人が屯所に入ろうとすると、ちょうど土方が外へ出て行くところだった。二人の世界に入り込み、土方の存在に気付かない総司となつ。この幸せな雰囲気が癇に障った土方。

「おう、なつ、お帰り。総司、お前また稽古さぼったろ？早く行け。で、なつはいつもの仕事に戻れ。」

声をかけられようやく土方の存在に気付いた二人はあからさまに嫌な顔をする。

「えぇぇぇ。今日は総司とゆっくりすごしたいなぁ。」

「そうですよ。ちゃんと成果を上げてきたんだからご褒美に一日ぐらい休みをくれたって良いじゃないですか。」

ああだこうだと言う二人に土方は青筋を浮かべた。

「うるせぇな！褒美は昨日やったじゃねぇか！総司に店を教えてやったのが褒美だ！お前ら、まだいちゃつくつもりか！！」

昨晩、総司になつの店を教えたのは土方だった。この時ほど、自分が総司に優しく気遣ってしまった事を後悔したことはない。

なつは帰宅の報告をしに近藤の部屋を訪れていた。
「なつ、本当にご苦労だったな。お前のおかげで長州の奴らを京から追い出すことに成功した。しかし奴らはまた戻ってくるだろう。このままで終わる奴らじゃないと思う。その時はまた力を貸してくれるか？」
「近藤さん、もちろんですよ。私はそのためにここにいるんです。」
なつの心強い一言に近藤は安堵の表情を向けた。
「…にしてもお前、よく久坂からそんな話聞き出せたよな。噂じゃあいつ、頭がきれる奴らしいじゃねぇか。それを丸めこんだんだから大したもんだよ。…まさかお前……。」
土方は勘が鋭い。土方の言葉で一斉に近藤・山南の視線が刺さった。
「や…やだなぁ…そんな目しないでくださいよ。ちょっと惚れられただけですよ…。」
突如、障子が外れそうなほどの勢いで開け放たれた。
「惚れられた？！」
竹刀を持った総司がそこに立っていた。
「総司、お前、稽古に行けって「何されたの？！」
土方の言葉なんて耳に入らない総司はなつに詰め寄る。
「…何されたって…えーっと……忘れた！！」
小首をかしげながらおもいきりはぐらかした。
「なつ！まさかお前、総司の前に久坂に抱かれたか？！」
土方の遠慮のない言い方になつは慌てる。
「抱かれてない！！神に誓って久坂には抱かれてない！！」
なつの反論に疑問を持ったのは山南と近藤だった。
「…久坂……には？」
「総司には…か…。お前ら、いつの間に…。」
慌てて否定したことが別の意味で肯定してしまい、顔の赤くなるなつと総司。
「あ…あたし、夕食の準備してきまーす…。」

「私も稽古に…。」
なつに続いて総司も出て行く。
「それにしてもなつ、絶対久坂となんかあったぞ。」
「あの総司となつが…」
「もう沖田君もなっちゃんも大人の仲間入り…か…。」
それぞれの思いを口にする三人であった。

芹沢の勘

なつは慌てながら近藤の部屋を出て、台所へと急いでいた。久しぶりに食事の支度。何を作ろうか考えながら向っていると、前方に芹沢の影を発見した。

芹沢とは、お梅を抱いたあの日以来、顔を合せていない。本来ならば、今も会いたくないのだが、そういう訳にもいかず。意を決して歩みを進めた。

「お帰り。」

芹沢はゆっくりとなつに近づく。そしてなつの目をジーっと見た。その奇妙な行動に、なつはたじろぐ。

「な…なんですか…？」

なおもその視線を止めない芹沢が一言言った。

「おめでとう。」

芹沢の言葉になつは顔を赤らめた。芹沢の言った意味を即座に理解したなつ。それを見透かされていることが恥ずかしかった。

「どうやら相手は客じゃねぇようだな。」

「なんでそう思うんです？」

「お前に目は前を向いてるじゃねぇか。もし抱かれた相手が客なら、そんな前を向けねぇよ。ましてや沖田と手ぇ繋いでなんて帰ってこねぇ。」

なつは芹沢の観察力に脱帽した。人のことなんてどうでも良いと言いながら、一番良く見ているのはこの人なんじゃないか。と思うほど。それは近藤や土方を上回るんじゃないだろうか。

「芹沢さんは何でもお見通しなんですね。そんな風に見れる人がなんで強請紛いのことをやってるんですか？それじゃ自分が破滅するって芹沢さんの目にも映ってるでしょう？」

「あぁ、見えてるさ。でも俺はそれで近藤らの株が上がれば良いと思っている。そのうち会津藩は俺を抹消しろと命を下す。それに従

うか従わぬかでこれからの新選組の行く末が見えてくるさ。お前はそれをしっかり見届けろ。」
なつは驚いた。芹沢はここまで考えているのだ。でもなつには分からなかった。何故、自分を破滅の道に追い込んでまで、近藤を立てるのか。
「芹沢さんと共存していくことは出来ないんですか？」
「土方がそんなことさせないさ。あいつは近藤の一本柱にしたがっている。そしてその柱を支えるだけの力を土方は持っているからな。俺はその引き立て役で良いんだ。」
芹沢は不敵な笑みを浮かべ、なつに背を向けた。
「なつ、お前は近藤と土方を護ってやれ。」
芹沢が何故なつにこう言い残したのか分からない。でもなつに見せたその姿が芹沢の本当の姿なのかもしれない。誰よりも人間が大好きなその姿が。

密命

近藤、土方、山南の三人は会津本陣金戒光明寺に呼び出されていた。本来なら芹沢と新見も呼ばれるはずなのだが。彼らが呼ばれないのには理由があった。

「芹沢は何とかならんのか！奉行所から苦情が相次いでおる。これ以上こちらに迷惑がかかるのであればそれなりの覚悟を持っていただきたい。」

会津藩公用方の広沢は怒りに満ちた声色で言った。

「広沢様、それは私たちが芹沢に手を下しても良いという事でしょうか。それが会津公のお考えと捉えてよろしいんですね。」

土方はニヤリと笑みを浮かべながら言う。

「あぁ。そう捉えてもらっても良い。」

「畏まりました。」

土方が頭を下げるの見て、慌てて近藤、山南も頭を下げた。

帰り道、近藤は腕を組みながら眉間にしわを寄せていた。そして前を歩く土方に言う。

「なぁ歳、何とかならないか？」

「あ？芹沢を救えってことか？」

近藤が前向きにこの話を聞き入れると思っていなかったが、やはりそうきたかと近藤に向き直った。

「芹沢さんは新選組を旗揚げした時からの同志ではないか。これでは仲間内の争いではないか。」

土方ははぁと溜息をついた。

「いいか？芹沢の今までの行いを考えてみろ。強請たかりに乱暴狼藉、刃傷沙汰も数知れず。これじゃあ会津公に愛想尽かされても仕方ないだろ。せっかく京まで上ってきてここで会津に見放されたら俺たちはただの浪士集団に戻っちまうんだぞ？」

近藤は分かっているというが、どこまで本気なのだか。
「近藤さん、辛い決断になるとは思います、しかしこれは新選組が通らなくてはならない道なのではないでしょうか。」
山南は近藤を諭すように言った。近藤の眉間のしわはさらに深く刻まれていた。そして目を閉じ、ゆっくりと、深く頷いた。

近藤の部屋には試衛館一派と斎藤が集められていた。近藤、土方、山南のただならぬ表情に普段、冗談ばかりの左ノ助も口をつぐんでいた。
「会津藩から芹沢を何とかしろというお達しがあった。これがどういう意味か分かるよな？」
皆、一様に頷く。
「芹沢暗殺は新選組の行く末に必要不可欠な事だ。分かってくれ。今回の暗殺は芹沢ひとりを殺っても意味がない。芹沢一派の一掃だ。それには綿密に計画しなくてはならない。相手は神道無念流の達人なんだからな。それに新見も頭がきれる。まずは芹沢の頭脳からだ。」
土方はそう言うと、一枚の紙を広げた。

局中法度

土方が広げたものには『局中法度』と書かれ、このように記されていた。

一、　士道ニ背キ間敷事
一、　局ヲ脱スルヲ不許ズ
一、　勝手ニ金策致不可
一、　勝手ニ訴訟ヲ取扱不可
一、　私ノ戦闘ヲ不可
以上相背候者切腹申付ベク者也

「…切腹……」
「…これは俺らにも…か…？」

それぞれ胸の内には思いがあるだろう。しかしこれをもってしないと、芹沢暗殺は難しい。特に、頭のきれる新見を陥れるには。
新見を切腹させるための手筈はこうだ。
最近の新見は、島原に入り浸り、全く屯所へ帰って来ていないのだ。仕事もせずに遊郭で遊んでいる。これは士道にあるまじき行為だろう。新見が入り浸り出したすぐ後に法度が出来た事にし、法度を破った者として切腹させる。
新見に切腹を迫るという事は、頭のきれる新見を丸め込まなければ行けない。どんな反論をされても返答出来るように、山南と土方が受け持つ事にした。
芹沢暗殺には、かなりの困難が要されるだろう。芹沢は何といっても神道無念流の達人だ。シラフでは反対に殺られてしまう可能性もある。とにかく、酒をしこたま飲ませ、酔って寝入ったとこを暗殺

する。
　そういう事で、今晩は隊士全員を島原まで連れて行き、屯所を空にしておくのだ。
　万が一の事を考え、腕のたつ者達が選ばれた。
　沖田、土方、原田、山南
　他の者は平隊士達が屯所へ帰らぬよう、また怪しませないように島原へ残る事になった。
「これは内密に、そして失敗は許されない。皆、心してやってくれ。では土方
くん、山南くん、新見くんを頼んだ。」
近藤は神妙な面持ちで二人に告げた。
「あぁ…行ってくる。」
「承知いたしました。」
　そう言い、土方と山南は出て行った。

「近藤さん、なつちゃんはこの事知ってるんですか？」
平助は思い出したように言った。
「いや…言ってない…」
「それは言った方が良いんじゃないか？それにお梅さんはどうするんだ？芹沢さんが寝ているとなれば彼女だっているだろう。」
　永倉は女を供にするのは…と顔を歪めながら言う。
「あの方には悪いが、芹沢さんのお供をしてもらおう。」
なつがはたして、納得するだろうか？あの一件以来、顔を合わせてはいないものの、京言葉を教えて貰うのにしばらくほとんどの時間を共にしていたのだ。芹沢へもお梅へも、近藤らとは違う思いを持っている気がする。
言うべきか言わぬべきか。近藤は答えを出せぬまま時間は過ぎていった。

新見の切腹

島原のとある店を訪れた土方と山南。
「山南さん、覚悟はいいか？」
土方は、店の前で山南に聞く。
「覚悟が無ければ来ていませんよ。さぁ行きましょう。」
普段、温厚な山南の気迫に若干押されぎみの土方。しかし、土方も意を決して店の中へ入った。
「これはこれは、新選組の副長が二人揃って来られるとは…いったい何の御用だ？」
新見はこれから自分の身に降り注ぐ事には全く気付いていない様子だ。
「新見さん、貴方が島原にいる間にこのような物を作らせてもらいました。」
そう言うと、土方は『局中法度』と書かれた紙を新見に手渡した。
「我等新選組も人数が増えてきました。大所帯になったからには、規律が必要だ。それがこの『局中法度』ですよ。」
「新見さんはこの法度をどう思いますか？」
土方と山南は、新見を納得させるような言い方で言った。
「そうだな。我等新選組も規律が必要だな。この法度、心得た。」
土方は新見のこの言葉を待っていた。新見に納得させれば、新見にも法度を適用させる事ができる。
「では新見さん、島原に入り浸り、仕事をしないという事は士道に背く行為だとは思いませんか？」
新見の眉がピクリと動いた。
「…それはどういう意味だ…？」
頭のきれる新見は土方の言葉を理解している。しかしあえて聞き返した。
「だから新見さん、あんたのやってる事は士道に背く行為なんだよ。

」
新見の眉はさらにヒクヒクと動き出した。しかし、ある事に気付き、笑いだす。
「…はっ…土方、山南、残念だったな。その法度はこれから適用されるんだろ。私が島原にいたのは法度が出来る前だ。」
「残念ですねぇ、新見さん。この法度が出来たのは貴方が島原に入り浸り出した日なんですよ。貴方はこの法度を破った事になりますね。」
珍しく、山南からは温厚な雰囲気は消え、殺気すら漂っている。
新見は言い返したい思いはあった。刀を抜いて土方と山南に斬りかかったところで、二人の実力は知っている。無残に殺されるくらいなら、武士らしく切腹してやると。
「…お前ら…この法度で自分の首絞めるなよ…特に山南さん、あんたは気をつけな。」
そう言い残し、新見は潔く切腹した。
『自分の首絞めるなよ』
この時、新見は新選組の未来が見えていたのだろうか。
『局中法度』による残酷な運命が。

その時まで

なつは、他の隊士達より少し早く島原の角屋という店に来ていた。天神牡丹としてではなく、新選組女中のなつとして舞踊を披露することになっていた。そのための着付けやら化粧やら色々と準備が忙しい。

遊女特有の化粧はせず、いつもより濃いめに化粧をした。

何だろう？さっきから落ち着かない。

皆の前で舞踊を披露するから？いや、そんな簡単な物じゃない。

起きてはならない事が、これから起きるのではないか。

そんな嫌な胸騒ぎがする…。

何かの不安に囚われながら宴会の時間は着々と近づいてきていた。

屯所では、近藤から芹沢に、新見の切腹が伝えられていた。

「……そうか…」

芹沢は一言呟いただけで近藤の前から姿を消した。

芹沢は気付いていた。今日の宴会がただの宴会ではないことを。自分の最期が近いことを…。

新見、俺もすぐに行くさ。あっちでもまた俺の世話をしてやってくれ。

抵抗しようと思えば出来る。でもそんな気も起こらない。新選組はもう近藤の力でやっていける。俺はそのお膳立てをしてやったまでだ。

俺を殺るのは誰だ？俺に恨みがある土方か？初めて人を殺る沖

田か？

　ひとつ気掛かりは…お梅だ。出来る事ならあいつには生きて欲しい。でも俺がいなくなった世界に生きるなんてあいつは望んでないだろう。

　それなら一緒にいこうぜ？

　死の恐怖を味わわないように、俺がお前を殺ってやるよ……。

なつの胸騒ぎはおさまらないまま、宴会は始まった。

「今日は皆さん、遠慮しないで呑んで下さい。朝まで騒ぎましょう！」

　平隊士達は幹部の奢りで酒が呑めるとあって、皆上機嫌だ。次から次に運ばれてくる酒に浴びるように飲む隊士達。

　そこへ、いつもの仕事着とは違う、艶やかな着物を着た女性が現れた。

「……え…？おなつ…さん…？」

「…うわっ／／／／／／きれいだ……」

「／／／／／／／／／／／／」

　平隊士達はそこになつが来るとは聞かされておらず、ましてやこんな艶やかな着物姿を見られるとは思っていなかった。全員が口をぽかんと開け、顔を赤らめる者、おもわず酒を落としてしまう者がいた。

「実は、なつには特技があってだな…舞踊をやっているのだ。今まで披露する機会が無かったが、今日は特別にやってもらう事にした。」

「「「おぉぉぉぉ」」」

　歓声が沸き上がった。なつの舞いは誰しもが釘付けになり、その妖艶さ、艶やかさに、一瞬で恋に落ちる者が続出した。総司と恋仲なのは全員が知っている事だが、それでも自分に入る余地はある！と張り切る者もいた。

なつは舞いながら、近藤達の表情を見る。明らかに固い。何か自分に隠している。長年一緒にいた者には、僅かな変化が分かるのだ。

いったい何を隠しているの？

ねぇ…近藤さん…

最後の安らぎ

「なつ、芹沢さんにお酌を…」
「…はい」
近藤の真意が分からないまま、芹沢の横に座りお酌をした。
「…今日のお前には色気がある…」
芹沢はボソッと呟いた。
「本当ですか？それは嬉しいな。総司のおかげですかねぇ？」
なつは笑いながら言う。芹沢は何も言わずに盃を傾け続けた。ふと、なつは、新見がいない事に気付いた。
「あれ？新見さん、来てないんですか？」
辺りを見回しながら芹沢に聞く。この時、芹沢はなつが何も知らされていないことを知った。それならば最後にこの新選組を託そうと、芹沢は語り始めた。
「あいつは別の店だ。なつ、これからこの新選組にはお前の力が必要だ。お前にしか出来ない仕事がある。近藤と土方を助けてやれ。」
何も分からずはいと頷く。この芹沢の真意に気づかわれるのはもう少し先の事だった。
しばらくすると、芹沢はフラフラとなりながら、平間、平山に支えられながら屯所へ帰って行った。何も知らない平間と平山を引き連れて。

芹沢らが帰るのを確認すると、近藤達の緊張は一気に高まってきた。
もうすぐ…もうすぐで…新選組が変わる……――
急に近藤が立ち上がり、だいぶ酔いの回った隊士達に言った。
「今日は無礼講だ。なつ、皆にお酌してやりなさい。普段、総司の

目があって凛とも喋れな　いだろう。今日は私が許す。」
「「「おぉぉぉぉ」」」
またしても歓声を上げる隊士達。ひとりひとりにお酌をしていくなつ。お酌をされる隊士達は顔を真っ赤にしている。
土方ら芹沢暗殺組は、目を合わせて出て行く。
「斎藤さん、もしあいつらが凛に何かしたら遠慮なく殴って下さい。任せました。」
平隊士達の方を指差しながら、斎藤に耳打ちして行く総司。何故俺に頼む？！というような顔をした斎藤。その斎藤の肩をポンポンと叩いて、総司は出て行った。
平隊士達は本当に遠慮なく凛と喋っていた。
「おなつさん、京言葉はどうしたんですか？最近、普通ですよね。」
なつは島原から帰って来てから普通の言葉に戻っていたのだ。
「それは、私が気まぐれだから。」
「私、おなつ京言葉好きだったのにな～ねぇ、また話して下さいよ～」
だいぶ酔っ払っているのだろう。かなり凛の顔の近くで喋ってくる。
「なんなら、僕と二人きりの時に京言葉で…ねぇ…おなつさん…」
肩を抱いて、手を触り出した。

…嫌っ！！総司っ！！！！

「いだだだだだぁぁぁぁ～～～！！！！！！！」
「総司？！」
なつが振り向くと、そこに総司はいなかった。
「悪く思うな。頼まれた事は断れん性分でな。」
「…何で斎藤さんが…？総司は？」
なつが総司の座っていた所を見ると、そこにいるはずの姿が無い。
総司だけじゃない。土方も山南も左之助も。

「…ねぇ…斎藤さん…今日、何があるの？」
「俺は何も知らん。」
斎藤は知っている。ただ、聞かれてはまずい事。だから話せない。
何を隠しているのか、それは聞かれてはまずいことなのか…。なつは心から離れないモヤモヤの原因を暗中模索していた。

屯所に着いた芹沢は、いつものようにお梅の体を求めた。
お梅を抱くのはこれが最後だ。
お梅、お前は俺と出会えて幸せだったか？
俺じゃなければもっと平穏な暮らしが出来たかもしれない。
でも…俺には考えられねぇんだ。お前に出会わない人生。
あっちの世界でも、一緒にいようぜ。

心に刻みつけるように芹沢はお梅の身体を求めた。
「…お梅、愛してる……。」
お梅の耳元で囁く。お梅は艶やかな色気を放ち、芹沢にニコリと笑いかけた。芹沢はお梅がいつも身につけていた懐刀でお梅の心臓を刺した。その懐刀は芹沢が贈ったもの。梅が刻まれた刀だった。
「…芹…沢…はん……」
お梅の顔は幸せに満ち溢れた表情だった。愛する者に抱かれ、愛する者からの言葉、愛する者に殺された喜び。お梅はこれが本望なのだろう。
お梅の身体をそっと布団へ置く。そして愛おしそうにその身体を見つめた。

暗殺の夜

「…どうだ？もう寝入ったか？」
「あぁ…そろそろだな。」
先に着いていた左之助に土方は聞いた。酔っているとはいえ、相手は芹沢だ。油断は出来ない。
「……雨が降ってきましたね…」
山南が降り始めた雨に手をかざしながら鬱陶しそうに眉をひそめた。雨は芹沢の命の終焉を祝うかのようにその勢いを強め始めた。
「いいか？芹沢は俺と総司、平間と平山は山南さんと左之助だ。仕留めるんだぞ？いいな。」
土方は皆に最後の確認をした。
「よし、行くか。腕が鳴るぜ。」
左之助は山南と目で合図し、ゆっくりと進んだ。
「俺らも行くぞ。総司、殺られんじゃねぇぞ。」
「土方さんもね。」
二人はこれからの時間を楽しむかのように怪しい笑みを浮かべた。

芹沢暗殺、それは新選組の行く末に関わる大切な事。
通らなくてはならない道。

「近藤さん…ちょっと……」
隊士達はすっかり酔っ払い、その場で寝ているもの、島原の女と戯れる者、様々であった。　今、まさに新選組筆頭局長が暗殺されるという時だった。
近藤はなつに呼ばれた理由が分かっている。おそらくごまかす事は出来ない。
「近藤さん…貴方は何を考えているんですか…？今日の貴方はおか

しい…貴方だけじゃないです。いつの間にか総司も土方さんも山南さんも左之助さんもいない。他の皆も上の空です。何を隠しているんですか？」
宴会場から少し離れた廊下で、他の誰にも聞かれないように小さく…しかし力強く近藤に問い質した。
「なつ…お前には何も隠し事は出来ないな…私達は芹沢さんを暗殺する。」
やはり…といった表情をする。
「もう何も聞くな…」
「近藤さん…私は屯所へ戻ります。」
そう言うと近藤に背を向けた。
「待て！戻って何をするつもりだ？！あいつらの暗殺を止めるつもりか？！そんな事をするつもりなら俺は今ここで、お前を切る……」
なつが振り向くとそこには刀を抜き、刃先を凛に向けた近藤が立っていた。
「…芹沢さんは知ってますよ…？貴方達に暗殺される事を。私はただ、武士らしく切腹してほしい。」
なつが感じた嫌な予感、心に引っ掛かっていた物はこれだったのだ。
そして芹沢からの言葉。
『近藤と土方の力になってやれ』

芹沢さん、貴方は全て分かった上で私に言った。今日の宴がただの宴ではない、自分を暗殺するための宴だという事も。いつも隣にいる新見さんがいない。
貴方は別の店だと言ったけれど、その言葉には続きがあったんでしょう？
別の店で殺された……――

「なつ、やはりお前を帰す訳にはいかない…」
「近藤さん、お梅さんは…お梅さんはどうするんですか…？」
「彼女は…悪いが芹沢さんのお供をして貰う。」
未だに刃先をなつに向けたまま話す近藤。
「お梅さんを殺す理由は何ですか…？」
なつの声には怒りが現れてきた。いとも容易く人の命を奪おうとする者。何の罪もない人を殺そうとしている。なつは自分に向けられた刃先を掴んだ。掴んだ手の平からは赤い滴がツーッと流れる。なつの思わぬ行動に近藤は動揺した。
「…っ！…なつ！！離せっ！！」
なつは刀を離さずに言葉を続ける。
「私は…私は何もお礼を言ってません。芹沢さんにも、お梅さんにも一言だけ、言いたいんです。『ありがとう』と…ただそれだけ…」
なつと近藤の間に睨み合いが続いた。お互いの心を見抜くように真っ直ぐ。
「近藤先生…終わりました…」
監察の山崎が芹沢暗殺の終わりを告げた。
「…そうか…ご苦労だったと、土方くん達に伝えてくれ。なつ、もう良いだろう。手を離しなさい。」
なつから流れた血は着物を真紅に染めていた。なつは近藤に向けられた刀から、ゆっくりと手を離した。今もなお、なつから流れる血。そしてなつの目からも涙が流れた。
なつはその場で膝からガクンと崩れ落ちる。近藤はそんななつを支え、抱きしめていた。涙を流し、近藤に抱きしめられ、なつは意識を手放した。

芹沢鴨死す

「…ん……。」
朝日が眩しい。目を細めながら、自分のいる場所を確認する。所々にシミのある、見慣れた天井。
「…目、覚めた？」
声のする方を見るといつもと変わらない笑顔の総司。
「良かった…けっこう血が出てたんだ。顔色も悪かったけど、今はもう大丈夫だね。」
そう言うと、背中を抱えて起こしてくれた。
「総司…私は……」
「近藤さんから話は聞いた。無茶するよ、まったく。あの時意識が無くなってから、昨日は一日ずっと寝てたんだ。」
なつは約一日半寝ていた事になる。
「総司…芹沢さんとお梅さんは…？」
総司は後ろめたさもあるのだろうか、目を逸らしながらポツリポツリと話し始めた。

きつくなる雨音は、これから起こる惨事の音を消してくれる有効な後ろ盾だった。長州藩の賊の仕業だと発表するこの事件。必ず芹沢を討ち取り、近藤を新選組の柱にするのだと。
足音を消すように四人はそろりと八木邸の庭先から侵入する。向って左側の部屋に芹沢はいる。そしてその奥に平間がいるはずだ。平山はそのまた奥に。
土方は障子に手をかけると他の三人に目を配らせた。そして頷く。
そろりと襖を開けた。きらりと煌めく銀色の光が眼に飛び込んできた。その光の持ち主はゆらりと立ち上がる。
「さぁ、始めようか。まともに相手するのは初めてだな。」
芹沢の重く圧し掛かるような声色に、背筋に冷たい汗が流れる。

総司と土方が立ち向かう。山南と左乃助は刃先を芹沢に向けながら平間と平山の方へ移動していく。
「流石だな。既に担当は決まっているということか。これなら新選組をお前に任せられるぜ。土方…」
余裕に構えた芹沢は悠々と言葉をつなげる。まるで時間稼ぎをしているように。間もなく玄関がバタバタとざわめいている音が耳に入ってきた。それを合図にするかのように芹沢が総司に斬りかかる。煌めく光は閃光の如く襲いかかる。総司は受け止めつつも芹沢の射抜くような眼力に威圧されているのを感じた。これが芹沢鴨という人物の大きさなのだと。
土方が芹沢の脇を狙い、突きを放つ。それを鉄扇ではじき返すとくるりと翻った。元の構えに戻ったがそこに対峙しているのは総司と土方だけではない。山南と左乃助も刃先を芹沢に向けていた。
「もう逃げられねぇだろ…」
土方の低い声が響く。
「俺は逃げも隠れもしない。かかってこい。」
芹沢の肝の大きさを実感していた。
芹沢に振り落とされる刃。何本かはじき返されるが、四対一では軍配は目に見えている。低く呻くような声をあげると芹沢の体は廊下に流れ込んだ。その後を追う総司。芹沢が振り上げた刀は運悪く、鴨居に刺さってしまった。そして八木家三男の為三郎の使用している文机に足をとられ、芹沢の巨体はドォンと音を立て倒れた。すかさず総司は心臓を一突きにした。
肉に刺さる感触に手が震える。人の命を奪うということ。その事実の重たさに、総司は体の中から沸き起こる動悸に肩を上下させた。
「総司…行くぞ。」
土方の声に我に返った。

「……そう…」

総司から語られた芹沢暗殺の状況を聞き、なつは一言だけ返事した。それ以上何も聞かない。おそらく総司はこれ以上は語りたくないはず。そしてこの事実は闇に葬られるのだとなつも心の何処かで納得していた。

新選組に生きる場所を選んだ以上、これを蒸し返してはならない。なつは目を瞑り、芹沢・お梅・平山に黙祷を捧げた。

芹沢一派の葬儀は暗殺の翌日に盛大に行われた。届け出には、不逞浪士による殺害と書いた。芹沢らの遺体は、壬生寺に埋葬された。こうして、芹沢暗殺の幕は閉じたのである。

疑惑（前編）（前書き）

この『疑惑』は史実には全く関係のないお話です。
全3部作となっております。

疑惑（前編）

「土方さん！貴方は裏切り者だっ！」
「お前が餓鬼なんだよっ！」
「まぁ待て！話せば分かる事かもしれん！落ち着け！二人とも！」
「土方さんっあんたどこにそんな力がっ…！」
「大丈夫か？なつ。」
「はぁ…何とか……」
それは突然、総司と土方の取っ組み合いの喧嘩が始まったのだ。物凄い破壊音と供に、襖と土方が庭へ投げ出された。それにキレた土方も負けじと総司を投げ飛ばす。仲裁しようとしたなつは、二人に弾かれ庭の木にぶつかった。
そこへ物音を聞き付けて、なんだなんだとやってきた近藤、永倉、左之助。近藤は総司を、左之助は土方の腕を羽交い締めにし、暴れる二人を制止しようとしている。
木にぶつかったなつに怪我が無いか確認している永倉。
事の初めは昼下がりだった。

なつと総司は芹沢とお梅の墓のある壬生寺へ来ていた。二人の最後の顔を見る事も出来ず、今生の別れとなってしまったなつ。せめてお墓の前で、『ありがとう』と伝えたかったのだ。花を生け、線香に火を灯し、ゆっくり目を閉じて手を合わせる。
「帰ろうか？」
総司はなつの手を取り、屯所へ戻った。そこには今、出掛けようとする山南の姿があった。
「二人で散歩かい？そういえば土方くんがなっちゃんを探してたよ。何やら聞きたい事があるとかで…」
「土方さんがですか？！何だろ…なんか悪い事でもしたかな。山南さん、どこ行くんですか？」

「あ…ちょっとね…／／／／」
山南は顔をほんのり赤く染めた。
「女ですか？」
総司は悪戯っぽく言った。
「はは…／／／／まぁそんなとこだよ／／／／／／」
足取り軽く出ていく山南を微笑ましく見送った。
「山南さんにもそういう人いたんだ。あ…土方さん、何の用事だろ。」
怒られるかもしれないという思いがあり、土方の元へ行くのは気が進まない。しかし探していたと知った以上、放っておくのも気にかかる。仕方なく、土方の部屋へ向かった。

なつが土方の部屋へ行くと、書類の山に囲まれた土方がいた。
「土方さん？私を探してたって山南さんに聞いたんですけど…私、なんかやらかしました？」
恐る恐る土方に声をかける。勢いよく振り返る土方に殴られる気がしておもわず目をつぶり、肩を竦めた。
来るはずの痛みが来ない。ゆっくり目を開け土方を見ると……いやらしく笑う土方の顔が間近にあった。
「…な…何ですか…？」
土方から離れるように後ろに下がる。
「なぁ…久坂に何された？」
土方は気になって仕方がなかったのだ。あまり人を信用しないという久坂に重要機密を喋らせたなつ。なつがどうやって久坂を信用させたのかが土方の興味の対象だった。
「……だからっ…惚れられただけですよ。」
「俺は結果を聞いてるんじゃねぇ。経過を聞いてるんだ。」
「…け…経過と言われたって…初めて会った段階で気に入ったって言われただけですけど。」
「でも気に入っただけで重要機密は喋らねぇだろ。どうやって久坂

を落としたんだよ。総司には秘密にしといてやるから言えよ。」
土方は圧力のある目付き、口調で言う。こうなったらもうどうあがいたって逃げられない。
「初めて会った時から好意を抱いてくれたみたいなので、ちょっと鎌かけてみました。」
「どうやって？」
「今度は一人で来て下さいって…そしたら次の日から毎日来てくれて…」
なかなかやるな、こいつと思いながら、土方は相変わらずニヤニヤした表情でなつの話を聞いた。
「しばらくしてから聞いたんです。久坂さんは京で何をやっているのかと…そしたら……」
「そしたら？」
「…く…口…付け…をされました…」
「ほぉ～それから？」
「それで終わりです。口付けされた後に話してくれました。」
なつには土方からの疑いの目が向けられていた。

疑惑（中編）

土方はなつに疑いの目を向けながら徐々になつに近づいていった。
「そうか…こんなことはされなかったのか…？」
そう言うと土方はなつの耳にふっと息をかけた。
「ひゃあっっっ／／／／」
なつの反応が面白かったのか、今度は甘噛みしてきた。
「いやっ…／／／／」
調子に乗る土方。女の扱いには慣れているので、どこが弱いかしっかりと心得ているのだ。耳から段々と首筋にかけて口付けをし、舌を這わせる。
「やめてっ…ん…／／／／」
おもわず声が出たなつを見ると、土方の口付けに感じ、今までにない色気を放ったなつがいた。

あ…やばい…

土方が反応した。

い…今ならまだ間に合うっ／／／／

しかし、なつから放たれる色気は尋常じゃなく、土方が止められる物ではなかった。

あ…無理だ……

「…土…方さん…やめ…て…／／／／」
感じた顔でそんな事を言っても土方の興奮をあおるだけだった。土方は嫌がるなつに強引に口付けた。

「ンンッ…／／／／」
なつの逃げるような仕草に土方は執拗に迫る。なつを押し倒し、身動きの取れない状態にさせてから、着物の中にスルリと手を忍び込ませる。口付けは激しさを増し、土方は舌を絡ませた。
「…土方…さん……もうやめ…」
なつは涙目になりながら、必死に土方から逃げようとするが、乗りかかられているため身動きが取れず、土方のされるがままだった。

「ひーじかーたさぁーーーん！」
襖が勢いよくと開いた。
土方に暇を潰して貰おうと思い、将棋を持ってきた総司。今、総司の目に映るのは、兄と慕う人が自分の恋仲の相手を襲っている姿だった。
ガシャーンと持っていた将棋を落とした。
「……そ…総司…」
涙目になりながら手を伸ばし、助けを求めるなつ。総司は土方の着物の襟元を掴み、殴り飛ばした。土方は襖と一緒に庭に転がる。自分が悪いと思いながらも殴られた事に腹を立て、殴り返した。
総司の尋常じゃない怒りに、危険を感じたなつは仲裁に入る。しかし、二人の激しい取っ組み合いに突き飛ばされてしまった。そこへ駆け付けてきた近藤、永倉、左之助。そして現在に至る。
二人を一緒にさせておくと、いつまた殴り合うか分からないため、とりあえず、別々の部屋で話を聞く事になった。

「歳…お前はいったい何をしているんだ！女を抱きたきゃそれなりの所があるだろう。」
近藤は呆れて溜め息をつきながら言った。
「…いてっ！！！」
「す…すみません…」
総司に殴られた傷の手当てをする平助。どうも平助は貧乏くじを

引いてしまうらしい。
「とりあえず、何でなつにあんなことしたんだ！」
自分の幼なじみの女癖の悪さは重々承知してたつもりだが、まさか昔から共に暮らしてきた、妹のような存在のなつを襲うとは思ってもいなかったのだ。
「初めはちょっとからかってやるつもりだったんだよ。だけど、あまりにあいつが色っぽい顔するから…男だったら俺の行動は普通だ！！」
「からかう事自体が普通の行動じゃない！！はぁ…もう良い。反論する気にもなれない…。お前、総司にはちゃんと謝れよ。それと！なつにもな。」
近藤はそう言い捨て、総司の元へと向かった。

あ…近藤さん…私を置いて行かないでぇ～～～！！

平助の心の叫びは近藤へは届かず、土方の方をちらっと見る。
「何見てんだよ！」
「…すみません……」
どこまでも貧乏くじを引く平助なのであった。

総司の部屋では、なつが総司の傷の手当てをしていた。
「…総司……ごめんなさい…」
必死に抵抗しようとしたものの、土方に感じてしまったのは事実。その意味も込めて、総司に謝罪した。
「なつが悪い事じゃない。」
なつの本意を知ってか知らずか、なつを責める事はしなかった。
「総司…大丈夫か…？」
ゆっくりと襖を開け、近藤が入ってきた。
「大丈夫ですよ。それより土方さんは…」
「あいつも悪気があった訳じゃないんだ。ただ馬鹿なだけで…」

土方には見放すように言っておきながら、総司には土方を庇う言い方をした。
「なつからだいたいの話は聞きました。久坂の事は仕方ありません。それもなつの仕事だったと思えば諦めもつきます。」
総司、大人になったな…とふと思う近藤であった。
「でも土方さんは…土方さんは私となつを応援してくれてると思ってたんです。なつのいる店を教えてくれたのも土方さんですし…」
総司には土方の行動が理解出来ないのであろう。応援してくれたり、裏切ったり、どちらが本来の土方なのか分からなくなっていた。
「とにかくお前らが仲違いしてもらってちゃ困るんだ。総司、大人になってくれないか？」
「……分かりました。土方さんと二人で話をさせてください。」
「あぁ分かった。」
「…近藤さん……」
心配そうに近藤を見つめるなつ。大丈夫だと言うように頷いた。

疑惑（後編）

「土方さん、沖田です。」
総司は近藤となつを自室に残し、ひとり土方の部屋へ来た。
「…入れ。」
二人は向かい合う訳でもなく、土方は机に向かい、総司は柱にもたれ掛かりながら話し出した。
「……土方さん…」
「……何だ…」
「土方さんは…私の敵ですか？味方ですか？」
突拍子もない総司からの質問に、驚いて総司を見る。
「…それは…どういう意味でだ…？」
「どういう意味かは土方さんの理解した方で答えてください。」
訳の分からない言い方をする総司に首を傾げながら考えた。
「味方だ…」
「味方か…」
総司はハハハっと笑いながら言った。
「分かりました。今回の事は忘れてあげます。」
土方には何が何だかさっぱり分からない様子だったが、とりあえず許して貰えた事にホッとした。
「悪かった…。でも、俺がもし、敵だって言ったらどうしてた？」
「そうだなぁ…。土方さん…「俺を斬るつもりだったか……」
自分のやった事は総司をそこまで追い詰める事だったのかと、総司の返答を聞き終える前に口を挟んだ。しかし、総司から出てきた言葉は意外なものだった。
「『豊玉発句集』を隊士全員に配るつもりでした。」
「……総司……何故……お前が…それを……」
『豊玉発句集』とは土方が作った句の詩集のようなものだ。

「私だけじゃないですよ？なつと二人で遊びに来てる時に見つけちゃったんです。」
何でもないかのように言う総司。しかし土方からするととんでもない事だった。
「てめぇぇぇ！！人がいない間に人の物あさってたのかぁぁぁぁ！！！！」
土方の怒りの声が屯所中を響かせた。
「良いんですか？私にそんなに怒って。別に良いですよ。皆に配るだけだから…。」
ニッコリと笑う総司。これが総司なりの仕返し。でもここで土方も負けてられない。
「お前も言うようになったなぁ……せっかくなつの敏感なとこ教えてやろうと思ったけど、やっぱやめた。」
総司がピクリと動いた。
「土方さんっ！！！教えて下さいっ！！！！！」
土方はニタリと笑った。
「いいか？総司、あいつの弱いとこは首だ。耳から首にかけて下がってくるんだよ。」
総司は前のめりになって土方の話を聞く。
「軽い口付けなんて甘い。舌を這わせるんだ。あいつはそれで感じる。…まぁ俺はあいつの感じてる声と顔にやられて我慢出来なくなったんだけどな！」
笑いながら言う土方にイラッときた総司。土方が隠している『豊玉発句集』を手に取った。
「さーて、皆に配ってこよ。」
「ちょっと待て！俺が悪かった！だから返してくれーーーー！」
またもや屯所中に土方の声が響いた。
とりあえず、総司と土方の内戦はこうして幕を閉じたのである。
「はぁぁぁぁーー…」

一日の仕事を終え、縁側に腰掛けたなつ。何だか今日はとても疲れる一日だった。土方には抱かれそうになるし、総司と土方の仲裁をしようとして突き飛ばされるし、そんな一件で夕食準備にバタバタするし。

疲れた身体に鞭打ってのろのろと自室の襖を開けると……。

「……何してんの？総司…」

自分が寝るはずの布団に総司がいたのだ。

「一緒に寝ようと思って。」

ニコニコと笑いながら言う総司。全く悪びれた様子がない。まぁ一緒に寝る事ぐらいよくある事で、お互い抱き合って寝るくらいだ。それなら良いだろうと明かりを消した。しかし、今日の総司はただなつと一緒に寝る事が目的では無かった。昼間土方に言われたなつの弱い所を確認しに来たのだ。

そんな事とは知らず、いつものように、なつは横になり、総司の腰に手を回す。

「総司…おやすみ……」

なつの耳に息がかかった。

「？！？！？！？！」

なつが顔を上げるとニタリと笑った総司の顔があった。

「…ちょっと……何…？」

「なつ…土方さんを本気にさせるなんてどんな顔見せたの？私にもその顔見せてよ。」

総司は自分の愛しい人の身体を他の男に触られ、そのまま寝るなんて嫌だったのだ。

「なつの穢（ケガレ）を落としてあげるよ。」

ニコニコと笑う総司。なつは抵抗をやめ、総司に身体を任せた。

総司はなつに口付けをした。初めは唇を合わせるように。だんだんと速度を早め、角度を変えて何度も口を重ねる。唇に舌を這わせ、相手の舌と絡ませた。

総司は土方に言われたように耳に口付けをし、舌を這わせるよう

に首筋をなぞった。なつの身体が波打った。
「…あ……／／／／」
なつから出る感じている声に総司も反応し始めた。
総司の舌の動きと共になつからも妖艶な声が洩れる。なつのその顔を見た瞬間、総司の理性は吹っ飛んだ。色っぽいなんてそんな言葉では表せないほど、艶やかで、感じているその顔が、色気そのものだった。
帯を解き、着物の中に手を入れる。着物の裾から足を絡ませる。総司の舌が這う度に波打つなつの身体。総司も限界だった。
ゆっくりとなつの中に訪れた総司は、温かさに幸せを感じていた。なつもまた、総司と繋がった喜びと中から沸き上がる快楽の渦にのまれていた。
「…なつ…？」
「／／／／何…？」
「…幸せ…？／／／／／」
「／／／／／／すごく…」
愛する者に愛される幸せ。芹沢とお梅もこの幸せを感じていたんだと、なつは初めて芹沢とお梅に共感できた気がした。

あの二人は…幸せだったんだ……――――

愛される人の胸に抱かれながら、幸せを感じながら、なつは眠りについた。

新選組の再出発

芹沢の亡き後、新選組は近藤を筆頭に以下のような編成となった。

局長　近藤勇
総長　山南敬助
副長　土方歳三

副長助勤　沖田総司
　永倉新ハ
　斎藤一
　松原忠司
　武田観柳斎
　井上源三郎
　谷三十郎
　藤堂平助
　原田左之助

京では近頃、八月十八日の政変で追い出された長州の者が、怪しい動きを見せていた。しかし奴らが何をしようとしているのか分からず、新選組も必死の捜索をしていたのだ。芹沢を排除した事により、会津藩からの信用も戻りつつあった。だが、これといって大きな事件を扱う事もない。

新選組を大きくしようとする土方は、一旗挙げる機会を虎視眈々と狙っていたのである。

「なつ、後で局長室に来てくれ。」

台所で食事の後片付けをしていたなつに土方がそう言った。なつ、強姦未遂事件以来、部屋に二人になる事を禁じられた土方。話がある時は必ず誰かが付き添う事になっていた。仕事の依頼であっても

それは同じであった。今回は近藤がその担当である。
「なつです。失礼します。」
近藤、土方のいつもと違う雰囲気に、少々緊張する。
「なつ、また仕事に出て欲しい。」
正直、あまり乗り気になれない近藤。大人になったとはいえ、やはり総司以外の男性と二人の空間にいなければいけない。それはなつにしか出来ない事であるとは分かっていつつも、親心のような気持ちであった。
「今回はどのような内容で？」
「近頃、長州の奴らが戻って来てるのは知ってるか？奴ら、絶対に何かをしでかすつもりだ。探って欲しい。」
「…承知しました。」
仕事内容を聞くと、足早に局長室を後にした。向かった先は総司の場所。今回の島原行きには、何か大きな事件が待っている気がする。久坂のように口付けだけでは終わらないかもしれない。ただ何となくそんな気がするのだ。言ってみれば『女の勘』だから総司に会って行きたかったのだ。

「総司…？」
中庭で剣を振っていた総司に声をかける。
「…なつ…コホッコホ……」
「総司…大丈夫…？最近ずっと咳してるみたいだけど…」
そう。ここ最近、総司は咳が止まらず、微熱が続いているらしいのだ。
「大丈夫だよ。きっと疲れが溜まっただけだ。すぐに治るよ。それよりどうした？」
「そう…それなら良いんだけど…。…あのね、また仕事へ出る事になったの。今回は……」
「…今回は…？」
「ううん！何でもない！…あの…行ってきますって言いに来ただけ

！」

『女の勘』は話さない事にした。余計な心配をかけたくない。総司は優しく笑い、なつをそっと抱き寄せた。

「なつ、またしばらく会えないけど、これも仕事だ。仕方がない。私も頑張るよ。」

総司はなつを安心させるように頭を撫でながら、優しい口調で言う。

「……でも…どうしても会いたくなったら…会いに行って良いかな…？」

そんな総司の言葉が可愛くて、おもわず笑ってしまった。でもその総司の言葉は励みになる。なつは大きく頷いた。二人は見つめ合い、軽く触れるだけの口付けを交わした。

山南敬助の恋人

手早く用意を済ませ、前回と同様、他の隊士に見つからないように裏口から出て、島原へと急いだ。
島原大門に近付くと、門の下でなつに向かって手を振る蓮華の姿が見えた。
「牡丹姉さん！お帰りやす。」
蓮華は以前島原で働いた時になつの周りの世話をしていた禿だ。
「蓮華…ただいま…元気にしてたん？」
「はい！牡丹姉さんが帰ってきはるって聞いて、明里姉さんも喜んではりましたよ！」
明里とはなつの働く店、冨音屋の太夫で、以前島原にいた時にも良くしてもらってた芸妓仲間だ。
「牡丹、お帰りやす。待ってたんえ。」
店に付くと女将の菊が大きな声で出迎えてくれた。その声に誘われてまだ化粧途中の明里が出てきた。
「牡丹！お帰りやす。あんたがおらんくてうち、寂しかったんえ？ぎょうさん話したい事あるし、うちの部屋に来てぇな。」
半ば強引に引っ張られ、荷物を蓮華に渡し、明里の部屋へやってきた。
「牡丹聞いてくれる？うちな、好きな人できてん。」
明里とは以前もよくこういう話をしていた。
「明ちゃんが好きになる人ってどんな人なん？」
なつもやはり女の子。恋の話は大好きだ。
「せやなぁ、一言でゆうたら優しい学者はんやなぁ…」
頬を赤らめながら言う明里。その人を思って言う顔は本当に幸せそうで、想い合っているのだとすぐに分かる。
「優しい学者はんて事は頭のえぇ人なんやな？」
「そうや。うちが何か聞いたらすぐに答えが返ってくんねんで？す

ごいやろ？それにな、頭がえぇだけじゃないねん。腕もえぇんよ？ナントカ流の免許皆伝とか言ってはったわ。」
頭が良くて、腕も良い、そして優しいなんて、山南さんみたいな人なんだろな。そんな事を考えていると、決定的な言葉が明里の口から出てきた。
「その人な、新選組にいはんねん。それもけっこう偉いさんみたいやで？新選組いうからどんな人か思うやろ？やけどあの人はほんまにえぇ人なんや……」
これは、山南に間違いないだろう。
牡丹としてのなつは、山崎の父親からの紹介であって、自分が新選組にいる事は誰も知らない。冨音屋になつがいるという事を知っているのは、土方、総司、山崎。局長の近藤すら知らず、総長である山南にも伝えられてはいない。明里と知り合ったのもたまたまだろう。
たまたまとはいえ、兄のように慕う山南の相手が、明里だったとは…。世間って狭い。そう思うなつなのであった。

その日、山南は明里の元を訪れていた。
「山南はん…会いたかった…」
座敷の襖を閉めるなり、山南に抱き付いた明里。その明里をしっかりと抱きしめる山南。本当に二人は愛し合っているのだろう。
「そうや！山南はん聞いて！今日な、前ここにいた天神が帰ってきたんよ。うちその娘の事めっちゃ好きでな、帰って来て早速あんたの事話してしもた。」
目をキラキラとさせながら話す明里を愛おしそうに見つめた。
「明里を夢中にさせるのは私だけではないのか。その天神に妬いてしまうな。」
優しく冗談を言う。
「んもう…うちが惚れてるんは山南はん…あんただけや…」
「／／／／／／／／／／」

ウルウルとした瞳で上目遣いで見られ、山南は照れてしまった。
「今度、その天神を紹介するわな。牡丹いうねん。」
「あぁ、楽しみにしてるよ。」
まさか自分の惚れている女の言っている天神が、自分達から忍び込ませている密偵だとは…。頭の良い山南でもそこまでは気が付かなかったであろう。

重要人物

なつが冨音屋に戻ってから、何処から聞き付けたのか、以前の馴染みの客が続々と天神牡丹に会いに来ていた。以前の馴染みなので、あの時の事件には関わってない者ばかり。どこかの浪人や、京の町人、様々ではあるが、早く任務を終わらせたいなつにはこの時間が無駄であるようにしか思えなかった。

「牡丹、次は古高はんや。覚えてるやろ？前もあんたを贔屓してくれたはった…」

「覚えてます。確か近江の浪人さんやったなぁ…？」

「そうや。あの人、金払い良いから頼むえ。」

菊は手を合わせて足早に今、来た客の元に急いだ。

「古高さんか…」

なつはまだ知らない。この男がこれから起こそうとしている事件の重要人物になるとは……――――

「大変お待たせしました。天神牡丹どす…」

深々と下げた頭を上げると、髪をひとつに束ね、ニヤリといやらしく笑いなつを眺める古高の姿があった。

「久しぶりだなぁ牡丹。お前どこに行ってたんだ？」

「お久しぶりでございます。うちはここの天神やけど、別のとこの天神でもあるんや…せやから勘忍え…？」

滑らかな京言葉を巧みに扱う。普段、使っていなくても、島原へ来ると自然と出るようになっている。

「それより古高はん…？今、何してはるんどす…？」

一応、近況を聞き、怪しい動きがないか確かめる。

「俺か？俺は今、四条小橋でちょっとした道具屋をやってるんだ。その時の名は桝屋喜右衛門っていうんだよ。」

なつの第六感が、危険を感じた。何故道具屋をするのに偽名を使

う必要があるのだろう？名を変える事はあっても偽名を使うのはどう考えてもおかしい。
「古高はん？何で名前を変えはるんどすか？古高俊太郎ってえぇ名前やと思いますえ？」
怪しいと思う人にはとことん惚れさせるように持っていく。自分の事を好きなんじゃないかと思わせるぐらいする。そして、ここぞという時に何を考えているのか聞き出すのだ。
「…まだ話せねぇなぁ。牡丹が俺を求めて来たら話してやるよ。」
「古高はん…天神は惚れた男はんやないと身体は渡しまへんえ…？」
「それなら大丈夫だ。お前は俺に惚れる。」
この男はどうしてこんな事が言えるのだろう。よっぽど自信があるのだろうか。

古高俊太郎
苦労しそうだ……――

なつは毎日、休む暇もなく座敷へ出ていた。古高以来、怪しい人物には遭遇していなかったが、なつでも知っている、長州の重要人物が今、なつの目の前に座っている。
桂小五郎
新選組の中でも最重要人物として、日々居場所を探っていたが、中々姿を現さない奴だった。
「桂はん…お久しぶりどすなぁ…」
「あぁ…本当だねぇ牡丹。久坂はまだ長州だ。もうちょっと待ってやってくれ。」
桂は久坂から何と聞いているのだろうか？桂の言い方からすると、なつが久坂を待ち焦がれているといった所だろうか。勘違いにも程がある。おもわず吹き出しそうになりながら必死で笑いを飲み込んだ。
「紹介しておこう。こいつが高杉晋作、でこっちが吉田稔麿。この

二人は吉田松蔭の門下生だ。流石のお前さんでも名前聞いた事ぐらいあるだろう。」
吉田松蔭の話は同門の久坂から聞いていた。日本を愛するからこそ、日本の行く末を危惧し、思想を称えていたが、安政の大獄で処刑されてしまった人だ。
「へぇ～この人が久坂の惚れた女…。久坂、なかなかやるねぇ。」
高杉はなつをじっくり眺め、そう呟いた。
「うん。なかなかの美人だね。久坂いないし俺達でもらっちゃう？」
間髪入れず口を挟んできたのは吉田稔磨。この二人、目付きがいやらしい。
「よさんか。牡丹も久坂に惚れておる。邪魔をするな。」

やっぱり惚れてると思ってるんだ。
ここには勘違い野郎ばっかりだな…

心の中で溜め息をつくなつなのであった。
「それとだな、こいつが「肥後脱藩宮部鼎三」
桂がもうひとりの男を紹介しようとするのを遮り、男はそう呟いた。低く地を這うような声で言った男。高杉や吉田の軽い雰囲気とは違い、重く、重圧のかかる雰囲気を醸し出している。
「こいつは無愛想な男でな、だが尊皇攘夷の志しは非常に強い男だ。もしかすると私以上にな。」
高笑いする桂の声はなつの耳には入ってこなかった。この重苦しい雰囲気の男、何故か惹きつけられた。ここなら与えられた任務を突破できるかもしれない。そう思い、宮部を見つめていた。
「牡丹ちゃんどうしたのー？宮部を見つめちゃって。もしかして一目惚れ？」
笑いながら言う吉田。こんな男に一目惚れする奴の顔が見てみたいと思いながらも、自分の密偵という立場上、肯定することにした。
「そやなぁ。うち、宮部はんみたいなお人、好きかもしれん。」

愛しい人を見るような目で、甘く囁くように言った。
「…んなっ…／／／／そんなことっ…客取るために誰にでも言ってるんだろ！／／／／」
「おいおい、宮部、照れんじゃねぇよ。久坂には黙っといてやるからさぁ、物にしちゃえよ。」
ニヤニヤと高杉は笑みを浮かべる。
「そうだよ！もったいないよ、こんなかわいい娘。お前がいらないんなら俺が貰っちゃうよ？」
同じく吉田もいやらしい笑みを浮かべる。
「お前らいい加減にしろ。すまないね、牡丹。こいつらもそういう年頃なんだ。」
「そうだよー。大きな仕事をするためには良い女を抱かないと。」
吉田の一言をなつは聞き逃さなかった。
大きな仕事……やっぱりこいつら…何か企んでる。

この中で、吉田と二人になると、すぐに襲われそうだった。なんとなく土方と同じ匂いがするのだ。高杉は女の扱いに慣れてそうだ。遊女にとてそんな重要機密を喋るとは思えない。そうなると、残されているのは宮部。ただしこの重苦しい雰囲気を突破するにはかなりの時間を要するのでは。長期戦になりそうだとなつは感じていた。

会えない時間

新選組屯所では―――

「ねぇ～土方さん…コホッコホッ…まだなつからの沙汰はないんですか？」

なつが島原へ行って二週間。以前は五日ほどで情報を掴む事が出来たのだが、今回はまだ確実な証拠を掴めないでいた。

「どうやら苦戦してるみたいだな…それより総司、お前本当に大丈夫なのか？」

「私の事は大丈夫ですよ…それより、なつのとこに行って「駄目だ。」

「何でですかー！？」

間髪入れずに否定され、総司は膨れる。

「行くなとは言わねぇ。でも、なつからの沙汰があってからにしろ。」

「……分かりましたよ。」

なつから何も沙汰がなく、毎日を過ごしている総司にはそれが一ヶ月にも二ヶ月にも感じていた。

なつに会いたい
なつに抱きしめたい
なつを抱きたい

その気持ちばかり大きくなって、正直、仕事にも身が入らないでいた。

なつも気持ちは同じであった。古高と宮部、この二人が鍵を握っているのは分かっている。古高は頻繁に来てくれる。しかし、話を聞こうとすると帰ってしまったり、ごまかされたり…。

宮部もなんだかんだ来てくれる。でも、なつが色目を使っても無視されたりでどうもうまくいかない。
時間ばかりが過ぎて、肝心の情報を聞き出せないでいた。焦りだけがなつの中に溜まっていく。もう言葉や軽く触れる程度では無理なのだろうか。そう思った時に総司の顔が浮かび、一歩を踏み出せないでいた。

総司に会いたい
総司に抱きしめられたい
総司に抱かれたい

毎日、その思いに押し潰されそうになっていた。

「牡丹～今、明里の馴染みの方が来たはるんやけど、すぐに出られへんのよ。あんたちょっとお相手してくれへん？」
「分かりました。女将さん、お名前は……」
「おいでやす～！」
なつの質問にも答えずに、菊は去ってしまった。仕方ないので言われたとおり、その座敷に向かった。
「ようこそ…お越し下さいました…天神牡丹で――――」
深々と下げた頭を上げると、そこには……
「……」
鳩が豆鉄砲をくらったような顔をした山南の姿があった。
「山南さん！！」
「なっちゃん？！君はここの天神をしていたのか！明里が言っていた天神というのは君の事だったのか！」
なつに間を与えないように話し続ける山南。なつの方が呆気にとられてしまった。
「あ…あの…山南さん…」
「あぁ！ごめん！あまりにびっくりしたもんだから。」

「総司は…」
山南は今までの驚き顔から、いつもの穏やかな笑顔になった。
「沖田くん、最近腑抜けなんだよ。よっぽど寂しいみたい。何か元気付けられるような事、言付かろうか？」
「じゃあ…早く片がつくように頑張る。だから帰ったら…私の穢を落としてね……って伝えて下さい。」
山南は悲しい表情を浮かべ、目をつぶり、小さく頷いた。

女の決意

今日のなつはある決意があった。自分の予約に古高が入っていたのだ。このまま、ただ座敷にいるだけでは意味がない。新選組のため、何より自分が与えられた仕事を全うするため、必ず情報を聞き出すと。

「ようこそ…天神牡丹でございます……古高はん…？」

「…牡丹…？／／／／」

なつは襖を閉めると古高に抱きついた。突然抱きつかれ、驚く古高。しかしその表情には嬉しさが隠せないでいた。

「古高はん…会いとおしたえ…うち、毎日古高はんの事が頭から離れへんのや…／／／／」

「…牡丹／／／／俺も会いたかったよ。でも最近、仕事が忙しくてな…なかなか来れなくて悪かったな。」

古高は天神牡丹を抱きしめながら、にやけて堪らない顔を我慢しながら言った。

「お仕事なら仕方おへんなぁ。古高はん、道具屋はそんなに忙しいお仕事なんどすか…？」

今日こそはという気迫のなつはとても積極的だった。

「俺はな、牡丹。道具屋というのは表向きなんだよ。」

「…表向き……？」

古高が喋り出した。

「俺は訳あって長州の奴らに武器の仕入れを任されてるんだ。」

「武器の仕入れたやなんて物騒やわ。武器を仕入れてどうしはんのん…？」

「…それは…お前は知らなくて良いんだよ。そんな汚い世界を知る必要はない…。」

古高は本当に天神牡丹を思いそう言ったのだろう。その表情はとても優しく笑っていた。

「うちは古高はんが心配なんや…」
悲しそうに下を向く天神牡丹を古高は愛おしそうに見ていた。下を向いた天神牡丹の表情が笑みに変わったのを知らずに。

古高の一件は、すぐに新選組に伝えられた。しかしまだ、長州の意図が分からない。なつには探索を続行するように命が下った。無論、このままで帰るつもりは無かったが。
「牡丹姉はん？次は宮部はんですえ。牡丹姉はん、宮部はんお気に入りなんやろ？」
蓮華は牡丹の着付けの手伝いをしながら言った。
「いややわぁ。蓮華は何でもお見通しなんやねぇ。大事なお客はんやさかい、今日は入らんといてね。」
「分かっております！終わりはったら呼んで下さいね！」
蓮華は無邪気な笑顔で出て行った。

宮部鼎三
古高のようにはいかないだろう。今日こそ、その時が来てしまうかもしれない…。
「ようこそ。天神牡丹でございます。」
そこにはいつもと変わらぬ、無表情の何を考えているか分からない男の姿があった。横に座り、しな垂れかかるようにしながら酒を注ぐ。
「宮部はん…会いとおしたえ…」
「お前、誰にでもそうしてるのか？」
やはり、古高と同じようにはいかないようだ。
「そんなことおへん。うちがお慕い申してるんは、宮部はんだけや…」
「…そうか……」
そう一言呟くと、何を考えているか分からない表情で盃を傾け続けた。誰かに似ている、そう思っていたがある人物と重なった。そ

の人物とは『芹沢鴨』だった。

「牡丹…お前は何故この仕事をしておる？」

ずっと黙っていた宮部が呟いた。

「生きるためや…うちはこれをしてかな生きてかれへんのや…」

「身体を売ってでも生きたいか…？」

「…生きたい……」

自分はいつの間に、こんな嘘を真剣に言えるようになってしまったのだろう。自らを偽り、天神という名の密偵をしている。嘘だらけの人間だ…。そう自己嫌悪をに陥りそうだったその時、ついにやってきたのだ。この時が。

「牡丹…お前を身請けしてやる。ただ、もう少し待ってくれ。俺にはやらなくてはならない事がある。」

「宮部はん、なんどすの？やらなあかん事って。理由を聞かな、うち待ってられへん…」

「心配するな、必ず迎えに来る。」

「いややっ！！宮部はん、教えて？何をするつもりなん？」

なつは宮部に抱きつき涙声になりながら言った。これでもう宮部は吐く。

そう思っていた……――――

覚悟の時

突如、なつは身動きのとれない状況に追い込まれていた。宮部に肩をガッシリの掴まれたのだ。

「？！！！…っ！！！！」

宮部はなつを押し倒し、激しく口付けをしてきた。宮部の目は本気だ。標的を見つけた獣の目。あの時の芹沢のような―

宮部は乱暴になつの帯を解き、着物の中へ手を入れる。

「宮部はんっ…やめっ……」

身の危険を感じ、逃げ出そうとするものの、宮部から逃れる事は出来ない。

「牡丹、嫌がる必要がどこにある…？俺はお前を身請けしてやるんだ。これくらい当然だ。」

宮部は笑っている。捕えた獲物がもがき苦しむのを見て、楽しむような目。宮部の熱いものがなつの中に入ってくる。

「！！！！！！っっつ…！！！」

痛みに顔を歪ませた。

「牡丹…お前が知りたい事を教えてやるよ…」

宮部は激しく腰を打ちつけながら言った。

「祇園祭の風の強い夜、御所の風上より火を放ち、混乱に乗じて帝を長州へお連れするのだ。駆け付けた京都守護職松平容保と幕府寄りの公卿は、その時暗殺。どうだ、素晴らしい考えだろう。もうすぐ歴史が動くぞ。俺らの時代が来るんだ。」

なつの中で時間が止まった。御所に火を放ち、帝は長州に連れ去られる。容保候と公卿様は暗殺。許される事じゃない。

なつはただ宮部を下から眺めていた。痛みも何も感じない。されるがまま。そんな天神牡丹に己の快楽を投げつけ、宮部は悠々と店を後にした。

「牡丹姉はん？！」
宮部が帰ってしばらく経つのに一向に呼ばれない蓮華は、心配になり牡丹の様子を見に来たのだ。なつは乱れた髪にはだけた着物姿で放心状態であった。
「牡丹姉はん？！しっかりしてっ！」
小さな身体でなつを抱きしめ、必死に声をかけている。その声にようやく気付いた。
「…れ…んげ…？」
「牡丹姉はん？！どないしはったんどすか？！牡丹姉はん、宮部はんが帰らはってもうちの事呼ばはらへんし、心配になって…」
蓮華は目に涙を溜めて一生懸命話している。
「…蓮華…呼ばへんで悪かったなぁ…うちは大丈夫や…蓮華…女将さん呼んで来てくれるか…？」
宮部から聞いた話は、すぐに新選組に報告しなくてはならない。天神の仕事を一段落させたかったのだ。
「分かった。ご苦労はんどしたなぁ。実は今まで黙ってたんやけど、うち知ってるんや。あんたが新選組の密偵やって事。」
「…え…？」
「土方はんにお願いされたんや。本気でやってもらわなあかん仕事やから黙っててくれって。何かとんでもない事を聞いてしまったんやろ？京の町を護るんが新選組の勤めや。はよ行き…」
「女将さん、おおきに…」
なつは着替え、新選組の屯所へ急いだ。

「何だって？！」
「あいつらそんな事考えてたのかっ！」
早急に屯所に帰って来たなつ。荷物も置かずに近藤、土方、山南に伝えに来たのだ。
「もしかすると…古高と宮部は繋がってるかもしれませんね…」
「…よし、古高を捕まえる。なつ、四条小橋だったな？」

「……」
「なつ！聞いてんのか？！」
宮部に聞いた事は至急、伝えなければならない事だった。しかし、伝え終えた後、宮部に無理矢理抱かれた記憶が鮮明に脳裏に浮かんできてしまったのだ。なつの体は小刻みに震えている。
「……なつ…？」
「……ぃゃ……」
「…なつ…？どうした？」
「……イヤァァァ――――！！！！！」
なつは頭を抱え、叫び出した。悲鳴、まさにそれだった。感じなかった痛みの全てが、今となってなつの体に襲いかかる。
「なっちゃんっ！！！」
山南にはなつの怯えているものが何なのか分かる気がした。あの時のなつの覚悟を聞いていたから。なつを強く抱きしめると、まるで小さな子をあやすかのように、背中を摩り、なつが眠ってしまうまでずっとそうしていた。
「どういう事だ？山南さん。」
「おそらくだが…なっちゃんは宮部に無理矢理抱かれたんじゃないかな？」
店でたまたまなつに会った事、なつは身体を売る覚悟で情報を得るつもりだった事を話した。
「なつ…何故そこまでして…」
「新選組のためにだろ。自分が新選組にいる意味を持ち帰りたかったんじゃないか？」
「あまりにも代償が大き過ぎる……っ…」
近藤は後悔をしていた。なつにこの仕事を頼んでしまった事を。
「近藤さん、私達が今、やらなくてはならないのは悔やむ事ではありません。なっちゃんが身を犠牲にして得て来た情報です。確実に長州の策略を阻止するのです。」
近藤はその意見に納得し、翌日、古高確保に向かわせた。

汚れた体

なつは自分の部屋で目を覚ました。ふと横を見ると、そこには会いたくて堪らなかった愛しい人が寝ていた。昨日のなつの悲鳴を聞き、慌てて飛んできた。しかし総司が見たのは怯えるなつの姿。総司には何が起きているのか理解出来なかった。

愛しい総司に触れようとした手。しかし、触れる事が出来なかった。

私は総司に触れる権利はない。他の男に抱かれてしまったこの身体。

こんな汚い手で、綺麗な総司に触れたら駄目だ。

なつは総司を起こさぬよう、音を立てずに部屋を出た。

「おぉ！！なつ！！」

「あぁ～！なつ、お帰り～！」

久しぶりになつの姿を見つけて喜びを表す永倉と左之助。左之助はなつに抱きつこうとした。これは左之助なりの愛情表現で、今までもこういう事はよくあった。

しかし、今日のなつは無意識に身体を避けてしまったのだ。

「…え…なつ？」

「…あ……ごめんなさいっ！！」

なつは走って逃げた。

「俺…なつに…嫌われたぁぁぁ？！」

屯所中に左乃助の嘆きが響いた。

私……どうしたの…？

なつは左之助から逃げ、縁側に腰を掛けた。自分が何故あのような行動をとってしまったのか分からず、溜息をついた時だった。斎藤が通り掛かり、負の雰囲気を纏ったなつの様子に気付いた。
「…どうした…？」
「あ…斎藤さん…」
斎藤はなつから距離をとって腰をかけた。
「私…触れられない……総司にも左之助さんにも…みんなが綺麗すぎて…」
斎藤はその意味を即座に理解できた。島原で身体を売ってしまった。その罪悪感に苛まれているのだろう。
「俺からしたらお前の方がよっぽど綺麗だ。この新選組にいる者で血に汚れてないのはお前だけだからな…。何も後悔する事はない。もっと前を向け。」
以前、芹沢はこう言っていた。
『客に抱かれて帰って来たら、そんなに前を向いてない。』

私、今、下を向いてばかりだ……。

「なつ！」
「総…司……」
やっと会えたの愛しい人。会いたくて会いたくて堪らなかった人。満面の笑みで駆け寄ってくる総司とは対象的に、なつは目を反らし、後ろを向いてしまった。
「なつ…？どうした…？」
総司がなつの肩に触れようとしたその時……――
「触らないで！」
「…なつ…？」
「私は総司に触られる資格も、触る資格もないの…」
「…なつ…何を言って…ゴホッゴホッ…」
以前の総司より激しい咳き込みをしていた。

「…総司…風邪、酷くなってるんじゃない…？」
「いや…大丈夫だよ…夏風邪はこじらせると長いから。」
　そういえば総司、少し痩せたかも。本当なら、背中を摩ってあげたい。熱を測ってあげたい。
　でも私には……出来ない……
　なつは忙しいからと言い、その場を後にした。
「土方さん、私なつに嫌われるような事をしたんでしょうか？」
「お前こんな忙しい時になんなんだよ！惚気るなら別に当たってくれ。」
　なつが持ち帰った情報の整理に追われる土方の背に、総司は語りかけた。
「惚気じゃないですよ！なつが私に触れるな…と…」
「そうか…」
　土方には理由は分かる。宮部に抱かれた事に罪悪感を感じてるのだ。しかし、今、なつと総司の仲を取り持ってる暇はない。先程、古高が連行されて来た。なつの調べで大方、内容は分かっているのだが、長州の奴らの集会場が分からないのだ。また宮部と古高が繋がっているのかも、今の所、証拠が出て来てない。
　何度聞いても喋らない古高。とうとう拷問にかける事となった。それでも一向に口を割らない。土方は他の隊士を全て蔵の中に入れないよう指示をし、自らが拷問をかける事となった。

夜叉の拷問

屯所中に古高の断末魔に似た叫び声が聞こえる。なつにもその声は届いていた。
「まだ喋らないの？」
蔵の見張りをしていた島田に聞いた。
「土方さんは喋らせるまで中にいるって言ってましたからおそらく…」
そうと言い、なつは蔵の戸を開けた。
「え？！なつさん？！」
島田が止めるのに聞く耳持たず、なつは蔵の中に入って行った。中では土方が、古高の足の裏に五寸釘を打ち込みそこに百日蝋燭を立てていた。溶けた蝋は肉を焼き、蔵の中には異様な匂いがたちこめていた。
「なつ、お前…入ってくるな…」
古高は逆さに吊され、身体のあちこちから血が流れている。痛みで気絶しそうになる度に水をかけられ、否応なしに意識を保っている。それは見るも無残な姿。まるで地獄にでも来たような感覚に陥る。拷問をかけている土方でさえ、先ほどから込み上げてくるものを我慢しているのだ。そんな状況を、なつは顔色ひとつ変えず、近づいて来た。
「土方さん…私にもやらせてください。」
「…っ…お前が？！」
なつは古高の顔の側まで行き、声を掛けた。
「古高さん？私の事知ってる？」
「……お前なんか……見た事もない……」
「そう。古高はん…？会いとおしたえ…？」
「？！ぼ…牡丹…？！」
なつの京言葉を聞き、自分が贔屓にしていた天神牡丹だという事

をすぐに理解した。
「…貴様……新選組のもんだったのか…」
「天神牡丹は新選組の密偵やってん。痛いやろ…？はよ喋った方が楽になるえ…？」
なつは薄笑いを浮かべている。『憎悪』という感情しか持ち合わせていないような姿だった。土方の背筋が凍りついた。
「だ…誰がお前なんかに……」
「古高はん？あんたに武器の購入をさせとるんは宮部鼎三やろ？祇園祭の風の強い夜、御所の風上より火を放ち、混乱に乗じて帝を長州へお連れする。駆け付けた松平容保侯と幕府寄りの公卿様は暗殺。違うてますか？」
なつ…いや、天神牡丹は今にも唇に触れそうな距離で話した。
「……そうだ……」
ついに古高が吐いた。どんな拷問にも口を割らなかった古高が。古高は一言、肯定の言葉を呟き、意識を手放した。

土方は次の過程を考えた。古高を奪われたとなったら、まず奪還しに来るだろう。そのための計画を必ず今日練るはずだ。
早速近藤に話をし、そして近藤は即座に会津藩へ応援要請を出した。
運命は今晩。京では祇園祭の宵山という誰もが祭りの賑わいに心躍らす日だった。

仇討への道

局長室には幹部達が集められていた。
「古高が吐いた。あいつは宮部と繋がってる。今夜、必ずどこかに集まるはずだ。」
「会合場所は山崎くんの調べにより、四国屋か池田屋。絞ってこの二つだ。」
土方と山南の報告に皆の表情は真剣そのものだった。長州の奴らは間違っている。火を放つという事は京の町が炎に包まれるという事。皆が恐怖に怯えている時に帝を誘拐し、容保侯と公卿を暗殺。これを断行させてはならない。
「今、動ける隊士は何人だ？」
「三十四人だ。」
「たったそれだけか…」
この時、新選組の中には風邪をひいているものや食あたりで寝込んでいる者が多かった。相手は浪士が三十人ほど。新選組の総勢と同じくらいだ。旅籠が一つに絞れれば良いが、そうはいかない。そこで、選りすぐりの十人と、その他の隊士とに分けられた。

近藤組は沖田、永倉、藤堂以下六名池田屋を捜索する。
土方隊は原田、斎藤、井上以下二十名四国屋を捜索する。

山南は屯所を守る事になった。
「どっちが当たりかなぁ？」
「俺らのとこに決まってんだろう？俺、くじ運強いから。」
大戦の前とは思えないほどのほほんとした雰囲気が総司と左乃助の周りを包んでいた。

三条会議所には、祇園祭のお囃子を聞きながらここに集まった三

十四人が苛立ちを隠せずにいた。
「会津藩の応援はまだ来ないのか?!」
既に約束の時間は過ぎている。
「近藤さ〜ん、もう俺達だけで行こうぜ〜?逃げられちまうぜ?」
血気盛んな左之助はもう待ちきれない様子だ。
「そうだなぁ。」
近藤には決断の時が迫っていた。

「総司…ちょっと良いか…?」
土方は総司を部屋の隅に呼んだ。
「なつがお前を避けてる理由だがな……」
土方は話す事にした。もしかすると池田屋が当たりを引くかもしれない。自分達が当たりであれば、土方は真っ先に宮部を殺すつもりでいる。しかしもし池田屋なら、総司に宮部を殺ってもらいたい。なつの仇を返すのは、総司だ。
「なつは…宮部に抱かれた……」
「……え……?」
「あいつは…それでこの策を聞き出してきた…」
土方の苦悶の表情をしていた。総司は思った。誰よりも悔しいのは土方だ。仕事だから仕方がない。表ではそう言っている。しかし、なつを島原へ行かせた事を最も悔いているのは土方だと。なつの行動にも発言にも、これで全てが納得いった。

宮部は私が殺る。
なつのために、自分のために、土方さんのために……———

「よし…我々だけで行こう。」
会津藩の援軍はいつまで経っても来ない。このままではせっかくなつが身体を賭けて得た情報が水の泡になってしまう。
「いいか?死ぬな。必ず生きてまた会おう。」

固い約束を交わし、近藤組と土方組に別れ、捜索を開始した。

屯所では、心配そうな表情で縁側に腰をかけるなつの姿があった。なつは自分も一緒に行くと言ったのだが、全員からの猛反対で、山南と共に屯所を守る事となった。

「なっちゃん、大丈夫だ。皆、死なない。もちろん沖田くんも…」

「山南さん…」

山南はなつのすぐ横に腰を降ろした。何故か山南には、触れられないという感覚は無かった。

「少しは落ち着いたかい？」

「…私には…何も出来ないんですか…？」

「なっちゃんは十分過ぎる働きをしてるよ。君がいなければ、京の町は炎に包まれていたかもしれない…」

山南は、なつの頭を撫でながら言った。なつは山南の肩に頭を預けた。

「私も皆と一緒に戦いたいです…」

「それは私も同じだ。しかし、屯所を守るのも皆と一緒に戦っているのと同じだと思うよ？もし不逞浪士が屯所を襲って来たら、なっちゃんの力を借りなくてはいけないからね。」

山南は人の心を温かくしてくれる。不安や心配、心にあったモヤモヤした物が晴れ渡るようであった。

「悔やむ事は無い。君のした事は誇りある事だ。君が京の人々を護ったんだよ。後は皆に任せよう。必ず仇を取ってくれる。」

山南の言葉により、なつの罪悪感は消えていくような気がした。

池田屋事件（前編）

近藤隊は池田屋へと急いでいた。
「近藤さん…宮部は…私に殺らしてください…」
近藤の耳打ちした総司。理由は聞かなくても分かっている。近藤は大きく頷いた。
池田屋はいつもの活気は無く、そのかわりにおどろおどろしい嫌な雰囲気が漂っていた。
「…どうやら当たりのようだな……」
近藤がそう呟くと、隊士達に一気に緊張が走る。逃げられないように表と裏口に見張りを置き、近藤、沖田、永倉、藤堂が中へ突入する事となった。一人は土方隊へ走らせた。
「主人はいるか！御用改めである！」
「へぇーい…これはこれは新選組の皆さん…今日は貸し切りとさしてもろてます…」
池田屋主人池田惣兵衛はまるで宿泊客に知らせるかのように声を張った。
「宿泊客を調べさせていただく。」
「お待ちください。勝手されては困ります。」
近藤は主人を押し退け、二階へと続く階段へ向かう。
「なんだ？騒がしいのう。」
階下での騒ぎを聞きつけ、一人がのそのそと階段を降りて来た。目に飛び込んだのは目の敵にしているだんだらを着込んだ男達。
「新選組や！！」
そう叫んだのを最後に無防備だった男を近藤は斬り捨てた。
「総司行くぞ！！」
「はいっ！」
襖を開け、近藤は叫んだ。
「御用改めである！刃向かう者は容赦無く斬り捨てる！各々方覚悟

せよ！」
暗闇の中、月明かりに照らされた白刃がキラリと光る。長く厳しい戦いが始まった。

京の夏は蒸し暑く、また重装備をしている新選組にとって、とても過酷であった。池田屋の中にいるのは四人、対する浪士は三十名余り。しかし浪士らは攻め込んで来た敵がまさか四人とは思っていなかった。二階から飛び降り逃げる者、裏階段から脱出しようとする者。しかし一階には永倉と平助が待ち構えていた。
逃げる浪士は外の者に任せ、向かい来る者を斬りつける。狭い室内に刀のぶつかり合う金属音と威嚇し合う声が響いた。

どれほど時間が経ったのだろうか。どれだけの人間を斬ったのだろうか。放出仕切れない汗は体に纏わりつき、疲れた体が重装備を外したがっていた。肩で息をし、辺りを見渡す。虫の音ほどになっている者が転がっている。ようやく終わったか。平助は汗でずれた鉢金を結びなおそうと刀を置いた。
平助の研ぎ澄まされた神経が……途切れた……――
「うわぁぁぁぁーーー！！」
その声に永倉が反応した。茂みに隠れていた浪士が平助に斬りかかったのだ。
「平助ぇぇぇーー！！！」
平助は額から血を流している。あれはまずい。永倉は急いで平助の元へ駆け寄る。
「平助っ！！しっかりしろっ！！」
「す…すみません…」
「死ねぇぇぇぇーー！！！」
不意に斬りかかられた。永倉は反応する。しかし遅れた。遅れた防御は永倉の親指の付け根を掠め、削がれる。
「！！！っつ…うおぉりゃあぁぁ！！」

親指を切られてもなお、立ち向かう永倉。平助を外へ出し、また中へ戻る。二階からはまだ近藤と総司の声がする。

今は大丈夫だ。でもかなり厳しい。土方さん…早く来てくれ…。

永倉は血の流れる親指に手ぬぐいを巻いた。

池田屋事件（後編）

「…宮部……宮部はどこだ…」
総司の頭の中には宮部を斬る事しかなかった。立ち向かってくる浪士は全て邪魔者。

私の邪魔をするな…

総司は容赦無く斬り捨てる。
「宮部ぇぇーー！！！どこにいるんだ！！！！」
総司がそう叫んだその時―――
「宮部は俺だ…肥後脱藩宮部鼎三…」
総司の前にゆらりと姿を現した。
「新選組一番組隊長沖田総司」
「お前が沖田か。何故俺を探してた…？」
「私は…あんたに大切なものを傷付けられたんだ…」
総司の目には尋常じゃないほどの殺気が漂っている。なつの仇を討つためなら鬼にも修羅にでもなれる。
「大切なもの？知らねぇなぁ。…あ、一人、女は抱いたな。」
宮部には分かっていた。総司の怒りの原因は天神牡丹を抱いた事。新選組が押し入って来た時に、天神牡丹は新選組の密偵だったと気付いたのだ。
「あの女…馬鹿だよなぁ。幕府の犬共の手先にさえならなければ、身体を売るような真似しなくて良かったのにな。」
「……黙れ……」
総司の怒りはふつふつと沸き起こっていた。
「それにあの女、標的を間違えたよなぁ。俺さえ選ばなければ、身体売らなくて良かったかもしれねぇのに。身請けしてやるって言ったら即効で仕掛けてきやがった。俺はそんな簡単じゃねぇよ。」

鼻で笑う宮部に総司は目をカッと見開いた。
「…黙れっ……」
自分が何を言われようとかまわない。でもなつを侮辱する事だけは許せない……
「ただ俺も新選組の奴だとは思わなかったのが失敗だったな。…ま、なかなか良い身体はしてたぜ？あの怯える目、思い出しただけで興奮してくる。ご馳走さん。」
「…貴様……貴様だけは絶対に許せねぇ…てめぇは簡単に殺してやんねぇ。痛み苦しみを嫌ってほど味わわしてやるよ……」
総司は畳を蹴り、宮部の懐まで入った。刀と刀がぶつかり合い、火花が散る。お互い離れ、また構え直す。
「さすが一番組隊長だ。なかなか早いじゃねぇか。面白い。」
今度は宮部が仕掛ける。それを総司は難無くかわし、一手を投じる。しかしそれも宮部はひらりとかわす。両者互角の戦いだった。
「なかなかやるな。でもな、勝つのは俺だ。お前が死んだら俺があの女、貰ってやるから安心しな。またあの怯えた目を見れると思ったら腹の底から快感が走る。」
ニヤリと笑う宮部。総司の怒りが頂点に達した。
「？！？！」
それまでとは比べ物にならない早さで総司が突っ込んで来た。その瞬間、右肩に激痛が走った。
「…っ…てめぇ…どこにそんな力が……」
痛みに顔を歪ませる宮部。総司の攻撃は容赦無く続いている。宮部はそれを止める事が精一杯で、攻撃を仕掛ける事が出来ない。
その時、総司の動きが止まった。
胸から焼けるように熱い物が込み上げてくる。
「ゴホッ…ゲホッゲホッゲホッ……」
総司の口から、おびただしい量の血が溢れた———
「お前…病なのか。じゃあどっちにしろお前の死を悲しむんだな、あの女は。」

宮部は気力を振り絞り、総司へ刀を振り下ろす。総司は迫りくる白刃を目で追った。

総司の目の前で宮部が倒れた。その先に、土方の姿を見た。総司が覚えている、池田屋での最後の記憶――――

君の涙

喉が熱い。頭がズキズキする

近藤さんと土方さんの声がする。良かった…生きてた。他の皆は大丈夫かな……

手が…温かい。心が落ち着く。

総司はゆっくり目を開けた。

「…っ！！…総司っ？！」

なつの声に皆が総司の元へ集まる。

「…そんな…皆して覗かないでくださいよ…」

「バカヤロー！皆心配してたんだよ…」

左之助の目には涙が浮かんでいる。

「お前、歳がいなきゃ死んでたぞ。」

近藤は安堵感の篭った声で優しい笑顔で嫌味を言った。

そうか…あの時土方さんが宮部を……

「良かったな。」

土方はなつの肩をポンポンと叩き、いかにも心配してませんといった表情で行ってしまった。そんな土方がおかしくなる。総司が池田屋で見た最後の土方の表情は、必死の形相で、誰よりも総司の安否を気遣ってくれていただろうというものだった。

…ポタリ……———

総司の手に一滴の雫が落ちた。

…ポタリ…ポタリ……

その雫を辿っていくと…今まで見た事のなかった泣き顔があった。目にいっぱい涙を溜め、大粒の雫がとめどなく流れている。その表情は心配、安堵、怒り、嬉しさ…様々が入り組んだものだった。目

を合わせた二人を見て、暗黙の了解の如く、総司のまわりを囲んでいた者が立ち去っていった。

二人はしばらく見つめ合った。そこにいる存在を、生きているということを納得するように。

「なつ、そんなに泣くなよ。綺麗な顔が台無しだ。」

総司は笑みを浮かべながら言った。

「……バカ……」

「え…？」

ボソリと呟いたなつの声に総司は聞き返す。

「馬鹿っ！どれだけ心配したと思ってんの？！総司が倒れたって聞いて……私を置いて逝かないでっ……」

なつの目からは止まる事の知らない雫が流れ続ける。総司は拭いきれない雫の流れ道にそっと触れた。

「私はなつを置いて逝ったりしない。なつを悲しませたりしない。約束する。」

なつに笑顔が戻った。

「やっぱりなつは笑っている方が良い。」

総司の手は温かく、生きているのだと実感する。本当に良かったと胸を撫で下ろした。

「…なつ……」

「何…？」

総司はなつの目を真っ直ぐ見つめ、優しい温かい笑顔で囁いた――

『愛してる』

総司となつは、人目も憚(ハバカ)らず、口付けを交わした。

総司の病

総司は一人、町医者を訪れていた。池田屋で血を吐いて倒れ、その後も身体の倦怠感や微熱は続いている。血を吐いた事を知っているのは土方のみ。絶対に他言しない代わりに医者へ行くという事を条件とされた。

「これは労咳だな。」

「……は…？」

「だから労咳だ。」

医者は遠慮も無く、はっきりと告げた。

「そんな訳ないですよ。私が労咳だなんて…。」

信じられるはずがなかった。総司はまだ二十四だ。不治の病に罹るなんて考えられるはずがなかった。

「血を吐く人間が普通の健康な人間だと思うか？倦怠感、咳、微熱、全て労咳の症状だ。」

地獄に落とされた気分だった。

「安静にし、滋養のある物を食え。労咳は治る病ではない。しかし、医者の言う事を守れば天寿を全うする事が出来る。」

新選組である総司が、安静に寝ている事なんて出来ない。それも一番組長なのだから。

『あの女は、どっちにしろお前の死を悲しむんだな……』

『私を置いて…逝かないで…』

総司の頭には、宮部の言葉となつの言葉が浮かんだ。

屯所の前では落ち着かない様子で土方が総司の帰りを待っていた。

「ひーじかーたさーん！」

総司は土方の姿を確認すると大きな声を出しながら走って来た。
「お前な…そんな子供みたいに走るなよ。で、どうだった…？」
呆れたように言う。
「何でもないみたいですよ！」
誰も心配させたくない。総司はわざと嘘をついた。しかし土方に嘘は通用しない。
「…お前……何でもない人間が血を吐く訳ねぇだろうが！」
「土方さん！声が大きいっ！」
総司は慌てて土方の口を塞ぐ。土方はその手を乱暴に払うと諭すように言った。
「近藤さんにもなつにも言わねぇ。俺だけには本当の事を言ってくれ…」
「……分かりました……。労咳だそうです。間違いないって…」
土方の心から心配した表情に、総司は真実を告げた。
「…労咳…か……。お前…江戸へ帰れ。」
「嫌ですよ！？」
土方が心配してくれてる気持ちはよく分かる。しかし、安静に過ごして天寿を全うする人生と、武士として生き、儚く散る人生、天秤にかけなくても答えは出ている。
「私は皆と戦いたい。私には剣を捨てて生きる人生なんて考えられないんです。土方さん分かって下さい。」
「なつを…残して先に逝かなきゃならないかもしれねぇんだぞ…それでも良いのか…？」
「……そこが辛いとこなんですよね。なつと約束したのにな。」
総司は、本当に悔しそうだった。土方には分からない。何故病が総司を選んだのか。何故こんなにも純粋に生きている総司が不治の病に罹らなくてはならないのか。言い表せない不安が心を過った。
「なぁに、二人共！昼間っからそんな辛気臭い顔して。そんな顔してたら幸せ逃げちゃうよ～？」

なつは総司と土方の背中をおもいっきり叩いた。
「…ゲホッゲホッ…なつ…私、一応病人なんだからさ……加減してよ。」
「何言ってんの?!病は気から!そんな事言ってたらいつまでたっても治らないよ!」
最近のなつはやたらと明るかった。池田屋以来、人が変わったように…。大袈裟に言ってしまえば左之助ぐらい。
「お前どこ行くんだ?」
「買い物ですよ。この格好で江戸へ行くとでもお思いですか?」
篭と財布を見せ、土方に嫌味ったらしく言った。
「お前、可愛くねぇなぁ。…買い物って一人で行く気か?」
「そうですけど…何か…?」
「お前、これから一人で出歩くな。池田屋以来、新選組を目の敵にしてる奴が多いんだよ。」
この所、池田屋で討たれた同士の敵という名目で、新選組と浪士との争いが絶えなかった。女中であるとはいえ、新選組に関わる者が一人でいるとなると狙われるだろう。
「とりあえずこれからは組長格の誰かと行け。」
「何で組長格なんですか?平隊士じゃ駄目なんですか?」
「念には念を入れろということだ。」
土方の命令に仕方ないと頷いた。
「お前最近、稽古してるか?腕、鈍ってんじゃねぇか?」
「……そういえば…」
最近は隊士も増え、壬生浪士組だった頃とは比べ物にならない量の洗濯と炊事に追われ稽古をする暇もなかった。
「私が稽古つけてあげるよ。江戸にいた頃みたいに。」

総司の稽古、加減知らずで大変だったなぁ。
懐かしい…ただ強くなる事にこだわっていたあの頃……。

なつは物思いにふけっていた。
「なつ、これから刀をさしておけ。」
土方から物騒窮まりない事を言われた。しかし、ここまでするほど危険なのだろう。土方の真剣な眼差しに冗談は言えなかった。自室へ戻り、江戸を発つ時に周斎先生に持たされた刀を取り、買い物へ向かう事となった。
総司と買い物へ行くつもりだったが、土方と話す事があるとかで、たまたま非番で、たまたま通り掛かってしまった斎藤と出掛ける事になった。
「斎藤さんっ！晩御飯、何食べたいですか？」
「……何でも良い…」
「何か言って下さいよ。」
なつはふてくされた言い方をする。
「…何があった…？」
突然、斎藤が意味ありげに言った。
「何がですか？」
「…前を向けるようになったんだな……」
斎藤が言っているのは、身体を売ってしまい、罪悪感に苛まれている時の事だ。
「山南さんに、『京の町を護るためにした事で誇りある事だ』って言われたんです。」
「…総長らしいな……」
「それにあたしが前を向いて総司を元気付けないと！」
なつはこの時、総司の病の正体を知らない。しかし、心のどこかで大変な病なんじゃないかという気がしていた。女の勘は悪い事ほどよく働く……――――

久坂との再会、陰謀

なつは島原へ来ていた。それは突然の事で、冨音屋の女将、菊からお呼びがかかったのだ。何やら、八月十八日の政変前に馴染みにしていた久坂が、一年ぶりに天神牡丹に会いに来たらしい。しかし、菊の機転で天神牡丹は休みで、また改めて来てもらうようにした。

正直言うと、なつは乗り気ではなかった。あそこに行くと、罪悪感がまた蘇ってくる気がするのだ。でもお世話になった菊の頼みは断れない。

「牡丹…勘忍え…？」

「女将さん、そんなん言わんといてください。無理言ってお世話になったんや。それに久坂はんはいずれ戻ってきはると思てたし。」

「牡丹…無理はしたらあかんえ？あんたのおかげで京の町は焼かれへんかったんや。もうあんたは十分過ぎるくらい働いてくれた。せやから自分の身体を、生き方を、あんたの大切な人を大事にしぃや。」

菊の心遣いが嬉しい。この気持ちだけで心のもやが晴れるようであった。

久坂はどういうつもりで天神牡丹に会いに来たのだろうか。ただ単に、京へ帰って来たから？身請けでもしようとしている？それとも……天神牡丹は新選組の密偵だったとばれたから？

なつは久坂の座敷へ出る時、護衛のためにと懐に小刀を忍ばせていた。万が一、新選組の密偵だとばれていた場合、久坂が冨音屋に訪れた目的は、天神牡丹の暗殺だろう。真剣と小刀、勝てるとは思ってないが深手を負わす事ぐらいは出来るだろう。心を決め、久坂の座敷の襖を開けた。

「…ようこそ…天神牡丹どす…」

頭を上げると、そこには殺気の感じられない、愛しい者を見るような表情の久坂がいた。

「牡丹、久しぶりだな。」
「お久しゅうございます。久坂はん、お待ち申し上げておりました。」
「あぁ、待たせたな。」
久坂は天神牡丹を抱き寄せた。なつはいかにも待ち焦がれていた人に会ったというように演じる。
「久坂はん…？うちを一年も放っておいて、何したはったんどすか？」
もしかしたら、また長州の策略を聞けるかもしれない。しかし、久坂の単純な恋愛感情を裏切っている事に負い目を感じてしまった。
「俺達は一年前に会津と薩摩の策略で、京を追われた。長州へ戻り、同士を募っていたのだ。」
久坂は天神牡丹に何の疑いもなく話し始めた。
「京へ戻ってきはったんは、うちを迎えに来てくれはったんどすか？」
「もちろんそのつもりだ。しかし我等はあと一つやらなければならないことがある。」
やはり身請けしようと思っていたのか。と思いながら、久坂の話の続きに耳を傾けた。
「我等は御所に嘆願書を提出するのだ。一年前の事は我等が騙された事であった我等の真意ではないと。そしてまた長州が御所をお護り出来るよう願い出るのだ。」
「そうどすか。うち、久坂はんが心……――――」
『心配だ』と言おうとした瞬間、久坂の口から出てきた言葉。なつは目を見開いた。
「…そして我等は池田屋の敵を討つ。」
池田屋の敵。すなわち新選組を襲撃するということ。

そんなこと絶対にさせない。
新選組の皆はあたしが護る…。

「久坂はん、それはほんまの話どすか？」
「あぁ明日、兵を進める。」
「それは…朝廷に兵を挙げるということ違いますか…？」
やはりこの人達は間違っている。朝廷に兵を進めるという事は、朝敵になるという事。何故女でも分かる事が、この人達には分からないのだろう？吉田松蔭は、こんな事を望んではいなかったはずではないだろうか。このような考えになってしまったこの人が、哀れで仕方ない。
簡単に喋ってしまった情報を、なつはその夜には新選組へ持ち帰る事になった。

長州征討～さよなら久坂～

「…やはり長州は戻ってきたか。山南さん、皆に戦の準備をするように伝えて下さい。」
「承知いたしました。」
これから戦が始まる。会津や薩摩は既に御所の警備についている。なつの話を聞いている間に、新選組も出陣せよとの命も下った。
「近藤先生…私も連れて行っては貰えないでしょうか…？」
「なつ…お前を連れて行く訳にはいかん…」
遊びに行く訳じゃないのは分かっている。しかし、いつも屯所でただ待つだけというのも嫌なのだ。
「お願いですっ！私も皆と一緒に戦いたい。」
「お前、何故戦に行きたがる？女があんな戦地に行く必要はない。」
それまで黙って聞いていた土方が口を挟んだ。
「護りたいんです。新選組を、皆を。久坂は必ず新選組を襲います。私が久坂を殺る…」
「連れて行ってあげましょうよ。なつは私が必ず護ります。それになつを屯所に置いて行って、屯所が襲撃されないとは言えないでしょ？陣に連れて行って、負傷者の手当てとかやってもらえるじゃないですか。」
襖の陰から聞いていた総司が言った。
「…近藤さん……連れて行こう。俺が責任を持つ。」
なつの思いの外強い意志と、総司の決意に土方も納得した。近藤は目をつぶり、しばらく考え、ようやく静かに頷いた。

新選組が陣を張った場所は九条河原。会津藩兵とともに竹田街道の警備を行った。長州軍は京都市街へ進軍していた。御所には会津藩と薩摩藩の軍が集まっており、長州軍は猛攻激にあい、兵を引かざるを得ない状況になっていた。長州は御所に向けて発砲してしま

ったのである。この事に、帝の大変な怒りを買い、長州は朝敵となってしまった。
またこの戦は御所だけの損傷に留まらず、京の町にも火が移ったため、炎に包まれる事になった。
新選組は陣の近くにいたが、銃声と火の手を見て、御所近辺まで移動してきていた。大方決着は着いているだろうと思い、なつを伴って…。
久坂はその頃、最後の望みを賭け、鷹司卿の邸宅に来ていた。長州贔屓の鷹司卿なら、嘆願書を渡して貰えるに違いない。そう考えたのだが…朝敵となった今、手を差し延べてくれる者はいない。
「我等は間違っていたのか…？松蔭先生、国を変えるためにここまでやって来た。何故お上は分かろうとしない？」
「久坂さん…あなたのやり方は間違っている…」
「？！誰だっ！」
久坂が声のする方を振り向くと、ひとりの女が立っていた。その腰には刀が差してあり、肩には白地に赤く誠と染められた腕章をつけている。
「……牡丹……」
化粧をせず、きらびやかな着物を着なくても、そこにいる女が天神牡丹だという事は分かる。
「牡丹…お前は…新選組だったのか……」
久坂は落胆の表情を見せた。
「騙していてごめんなさい。天神牡丹は新選組の密偵でした。」
久坂は今まで、何故こんなにも先手を打たれてきたのか、今、ようやく理解が出来た。惚れた女を通して、敵に情報を与えていたのだ。池田屋の事もおそらくこの女が…。
「俺も馬鹿な男だな…敵に情報を与えていたとは…」
久坂は微笑みながらなつを見て話した。
「私には貴方達のやっている事が理解出来ない。朝廷に兵を進め、発砲した。その飛び火で京の町は炎に包まれている。どれだけの人

を不幸のどん底に陥れたら気がすむの？」
なつの声には怒りが満ちている。
「帝を長州へお連れする？自分達が好き勝手できるように帝を利用してるだけじゃない！」
なつの激しい罵倒にも久坂は決して微笑みを絶やさなかった。
「…牡丹…しかしお前達新選組のしている事はどうだ…徳川幕府は近い将来滅びる。その幕府の手となり足となり、働かされてるだけなんだぞ？そして刀の時代は終わる。刀で外国とは渡り合えん。」
「新選組は帝を敬い、幕府に忠誠している。貴方達みたいに、帝を軽んじていない…。吉田松蔭は、こんなことを望んではいなかったんじゃないの…？」
吉田松蔭の名を出した瞬間、久坂の顔が変わった。
「…何が分かる……」
久坂の口調は今までにない程の憂いにも似た怒りの篭ったものだった。
「お前に分かるか？！井伊の奴が勝手に異国と条約を結んだ。それに反論しただけで、暗殺されたのだ。邪魔者は消す。それが今の幕府の腐ったとこだ。お前ら新選組も同じだ！」
なつは何も反論出来なくなってしまった。
「…し…新選組は…そんなんじゃ……」
「何が違う？池田屋の同士は皆、尊皇攘夷の志の熱い者ばかりだった。それをことごとくお前達は切り付けたのだ。邪魔だったから殺したのだろう？吉田も…宮部も…」

……宮…部……

なつの目の前にあの時の宮部が出て来た。獲物を捕えた獣の目。もがき苦しむ様子を楽しんでいる顔。
なつの変わり様に久坂は気付いた。
「牡丹…宮部にやられたか…残念だ…俺もお前を抱きたかったよ…

…」
久坂の元に微笑みが戻った。
「もう終わりだ、牡丹…。私もすぐに後を追う。」
久坂は刀を抜き、なつに向けた。なつは刀を向けられているにも関わらず、自分の刀を抜こうとしない。いや、抜けなかった。
「あっちでは……もう敵じゃない…」
久坂は優しい顔でなつに刀を振り下ろした———

痛みが来ない久坂は痛みを感じさせないように殺ってくれたのだろうか…

「何故刀を抜かない！！」
総司の必死な顔がそこにあった。久坂は自分の足元に倒れていた。
「…総…司……」
総司はなつを力いっぱい抱きしめた。
「良かった。」
総司は木の陰からなつと久坂の様子を見ていたのだ。何があってもなつを護れるように。
「…なつ……どうした…？」
「……」
「黙ってないでよ…私は何を言われても平気だ…」
総司の声は安心する。何を言っても受け入れてくれる。そんな気がした。
「……宮部…って聞いたら…あの時の……」
なつは言葉が出なくなってしまった。でも総司にはそれが何なのか分かる。

そうだ…なつが最後に抱かれたのは…宮部だ…
穢を落としてあげると言いつつ、私はなつを抱いてない。
なつの中にはまだ宮部が…

なつはどんなに明るく振る舞っても、ふとした時にあの獣のような宮部が出てくるのだ。まるで悪夢でも見ているかのように。自分がやった事は、京の町を護るために必要な事だった。何度言われても、その時はそう思えても、自分が宮部に抱かれたという事は事実。なつの中で癒えない傷になっていた。

なつの心に刻まれた傷を癒せるのは、やはり総司しかいないのだ。

二人旅

「総司、ちょっといいか。」
土方は、床に就こうとした総司の部屋を訪れていた。
「どうしたんですか？こんな遅くに。」
「お前に休暇をやる。なつを湯治に連れて行ってこい。」
そう言うと、土方は総司の前に金を置いた。
「…え…？湯治…ですか…？」
「なつは京へ来てからずっと働き詰めだった。朝早くから夜遅くまで。湯治はなつの疲れを癒してもらうためだ。一人で行かせる訳にはいかないから、お前が護衛として付いていけ。」
土方の素直じゃない優しさが嬉しい。本当は、総司の体を休ませようとしてこんな事を言っているのだ。
「分かりました。護衛として、付いて行きます。」
土方の言葉通りに返事した。しかし土方も分かっている。総司が土方の優しさを分かっていながらこう返事することも。

翌朝、玄関では気分の乗らないのかそれとも申し訳ないのか、なつはなかなか出発できないでいた。
「本当に良いんですか？また仕事を山盛り残しておいてくれるんでしょう？それなら毎日少しずつの方が良いんですけど…」
「何を言ってるんだ。少しは気分転換もしないと駄目だろう。…仕事は…気分転換してまた頑張ってくれ。」
近藤はハハハと笑い、なつの肩をポンポンと叩いた。
「総司、なつを任せたぞ。」
「分かってますよ。護衛ですから。任せて下さい。」
後ろ髪引かれながらも、総司はなつの背を押し、二人は出て行った。
「……歳…湯治の本当の目的は…総司だろう…？」

近藤には分かっていた。土方と総司が隠している事は重大な事だと。何年一緒にいると思っているんだ、と言うと近藤は部屋へ戻って行った。

なつと総司は、自分達が新選組である事を忘れたかのようであった。こんなにも平和でのんびりとした時間。江戸にいた頃のようだ。

「総司、昔よくあぁやって遊んでたね。」

子供達が木の枝を持ちながら走り回っているのを見ながら言った。

「総司はいつも私より先に行って、必ずあたしが追い掛けてた。あの時は少しでも追い付いて追い越したかった。」

総司は昔を懐かしむなつを愛おしい目で見つめていた。

「でも、もう追い付けないくらい強くなっちゃったな…」

「なつに追い付かれちゃ新選組の一番組長は務まらないよ。」

総司は憎まれ口を叩いた。

「なんか総司が遠くなっちゃったなぁ。」

笑いながらそう言うなつ。そこにはどこか寂しさが隠れていた。

私からしたらなつの方がよっぽど遠くなっちゃったよ…

総司は心の中でそう思った。無邪気に剣を振っていたなつが、身体を売らなければいけない任務を任されている。その情報にどれだけ新選組が助けられているか分からない。

でも本当は、私だけのなつでいてほしい。何処にもいかないでほしい

朝早くに屯所を出たにも関わらず、寄り道やら休憩やらを多くとったので、湯治場へ到着したのは夕刻であった。湯治場の近くの旅籠に入り、宿泊の手配を済ませる。古い旅籠だが、部屋は広くもなく狭くもなく、調度良い落ち着いた雰囲気だった。

「なつ、先にお湯入ってきなよ。疲れたろう？」
「いいの？じゃあ久しぶりに広いお風呂で泳いじゃおう！」
楽しそうに出ていくなつを見て、総司はふと思った。もし、なつと二人の生活になれたら、こんなに幸せなのだろうか。こんななつをずっと独り占めできるのだろうか。他の男の目になつを触れさせないでおくことができるのだろうか。
そう考えた自分に総司は自嘲気味に笑った。

なつを独占するにはこの病が邪魔をしている。

なつと総司は交代でお湯に浸かり、部屋へ戻ると食事が用意されていた。二人、横に並び、なつは総司にお酌をする。その様子はまるで夫婦だった。二人がほろ酔いになってきた頃、女将が部屋へ入って来た。
「ようこそおいでくださいました。いやぁ～番台から話は聞いておりましたが、お似合いやわぁ。」
女将は少し興奮ぎみに話を続けた。
「番台から素敵なご夫婦がお泊りやって聞きましてん。ほんまに美男美女ですなぁ。」
なつと総司は女将の勢いに負けて言葉が出ない。
「ほんまに素敵な旦那様と奥方様やわぁ。」
「…あの～…実は夫婦じゃ「ありがとうございます。先月、祝言をあげたんです。」
えっ？！と驚くなつは無視して女将と話を続ける総司。
「いやぁ～ほんなら今、幸せどっしゃろ？うらやましいわぁ。」
なつはびっくりしつつも総司がそう言ってくれた事が嬉しかった。
「総司…夫婦なんて嘘ついて…」
なつは嬉しさを隠せない笑顔で言った。
「良いじゃないか。別に誰にも迷惑かけないよ。それに―――」

私は夫婦になりたい…

そう続けようとして、総司は言葉を止めた。

私は長く生きられない。そんな人間と夫婦になってもなつは幸せになれない。

「…それに…？」

「…それに…あの女将さん、夫婦だって信じてたからさ。」

総司は尤もらしい事を言った。総司の優しさに顔がほころぶ。

何故私は病なんだ。病なんかじゃなければ、今すぐにでも夫婦になるのに…。

総司の哀愁にも似た表情に気付いたなつ。そっと総司の肩に頭を乗せた。突然のなつの行動に顔を赤くした総司の顔を見て笑った。この時は京での戦も、総司の病も忘れられた。二人は見つめ合い、口付けを交わした。

総司は部屋の明かりを消し、なつを布団に横にならせた。覆いかぶさり、なつに何度も口付けをする。

「／／／総…司…／／／／／／…私は……」

なつの言いたい事は分かっている。だからこそなつを抱きたい。

「なつが負い目に思う事はない。私はどんななつでも愛している。だから今日限り……忘れよう……」

そう言うと、総司は深い口付けをする。何度も何度も唇を合わせ、二人の息が上がる。器用に解かれる帯、激しくなる総司の息遣い、求めている所に這わされる舌。なつの感じる声に総司も感じた。

自分の意とは反対に波打つなつの身体。総司は限界を迎え、そっと入口にもっていく。なつの身体が強張った。その身体を優しく抱

きしめた。
「なつ…大丈夫…？」
「…うん…大丈夫…／／」
ゆっくりと訪れた総司は優しく、温かかった。宮部に抱かれたという事実を忘れさせてくれる。そんな温かさだった。
誰に何を言われようと、決して消え去らなかった罪悪感。総司に愛される事で、ようやく浄化されたのだった。

異体

今日は江戸から新入隊士が来る事になっていた。その人は伊東甲子太郎といい、平助が試衛館に入門する前にいた所の道場主である。その門人を引き連れて、新選組に入隊することになったのだ。

なつは玄関を念入りに掃除していた。そこへとびきり嬉しそうな声が聞こえて来た。

「なつちゃ～ん！」

未だ未練たらたらの平助である。

「平助さん、お帰りなさい。」

「只今戻りました。紹介します。伊東道場の伊東甲子太郎先生です。」

「ようこそおいでくださいました。新選組の女中をしております、なつと申します。」

深々と伊東一派に頭を下げた。

「藤堂からよく貴女の話は聞いております。なつさん、お噂通りお綺麗な方だ…」

伊東はなつの肩に手を置き、今にも口付けしてしまいそうな距離で言った。

「…っ…伊東先生、皆さん、長い旅でお疲れでしょう。お部屋へご案内します。」

伊東からさっと離れると部屋へ案内した。

「土方さん、私あの人はどうも好きになれないなぁ。」

陰から覗いていた総司は土方にそう嘆いた。

「総司…俺もだ…俺の苦手な頭のきれる奴がまた増えやがった。」

「一人目は山南さんでしょ。」

土方を冷やかすように言う総司。それに土方は、肯定とも否定とも取れる笑みを浮かべた。

「遠い所、ご苦労様でした。伊東先生に加わっていただき、心強い限りです。」
近藤は伊東を局長室に招き入れ、歓迎した。
「伊東先生には参謀をやっていただきたい。」
山南の発言に、土方は目を見開き山南を見た。
「まだ入ってすぐじゃねぇか。新選組の事を大して分かってない奴がそんな大役できるか。」
「そんな事はない。伊東先生は平助から私達の報告を逐一受けているんだ。よく分かってらっしゃる。」
「仕事の話をしてんじゃねぇよ。俺が言いたいのは…――」
「まぁもう良いじゃないか。伊東さん、参謀の役目、受けていただけますか？」
このままでは土方と山南の口論が激化しそうなので、近藤が口を割って入った。
「かしこまりました。参謀のお役目、しっかり努めさせてもらいます。」
伊東が了承した所で、その場は解散となった。しかしすぐに伊東は自室で、一派を集め、不敵な笑みを浮かべていた。
「新選組…既に幹部はバラバラのようだな…土方と山南には確執があるようだ。上にまとまりがないんじゃ新選組は時期に崩壊する。我々の力が試される時だぞ…――」
そういう伊東を見ながら複雑な心境なのは平助だった。伊東は自分の師である。しかし近藤もまた師なのだ。
もし分裂となれば、自分はどちらにつけば良いんだ…？
平助の心は揺れていた。
なつは伊東達の歓迎の宴の食事作りに大忙しだった。パタパタと動き回るなつの側で溜息をつく男が一人。平助だった。

「どうしたの？平助さん。伊東先生が来てくださったのにそんな浮かない顔して。」
「伊東先生が来られたからだよ…」
それっきり平助は黙ってしまった。なつは心配そうに見つめる。その間を割って入るように、鼻歌を歌いながら浮かれた男が入ってきた。
「〜〜♪〜♪〜」
「どうしたの？左之助さん、ご機嫌で。」
左之助は聞いてくれるのを待ってましたとばかりに話し始めた。
「そんなに聞きたいか？聞きたいか？なら話してやるよ。実はさぁ…俺、おまさちゃんと恋仲になったんだよねぇ…」
とても幸せそうな左之助。左之助はずっとおまさに想いを寄せていたのだが、当のおまさは全く相手にしていなかったのだ。それがここへ来て恋仲になったとは、どういう心変わりなのだろう。
「おまさちゃん、照れ屋さんだから、本当はずっと俺の事好きだったのに言えなかったんだよ…」
否定したかったが、あまりに左之助が幸せそうなので、黙っているなつと平助なのであった。

不調和音

「ねぇ、最近、山南さんの様子、変じゃない？」
一通りの仕事を終え、総司に稽古をつけてもらっていたなつ。休憩しながらなつは言った。傍らにはなつの剣裁きに興味の持った斎藤もいる。
「なんかずっと考え事をしてるって感じだよね。」
「悩み事かなぁ？聞いてみようかな…」
「…止めておけ…あの人にも特別な人はいるだろう。その人に任せておけ…」
山南には明里がいる。それはなつが一番よく分かっていることだ。それでもあの思い詰めたような表情の山南を見ているだけしか出来ない自分が、情けなくなってしまった。

あたしは山南さんの力にはなれないのだろうか……――

翌朝、なつが掃除をしていると、玄関から女性の声がした。
「あのぉ…すんまへん…」
「はぁーい。何か御用ですか？」
「……」
その女性はなつをじっと見つめた。
「……あの…何かついてます……――あれ？明ちゃん？」
「やっぱり牡丹や！あんた何してんの？！ここ新選組やで？」
明里はなつが新選組の密偵だった事を知らない。別の店から手伝いに来てくれている。そういうふうに聞いていたのだ。おそらく、明里は山南に会いに来たのだろう。とりあえず上がってもらう事にした。

客間に明里を通し、山南を呼びに行ったのだが、生憎出掛けているらしい。明里に伝えると、今日は休みだから帰りを待つと言う。
「なぁ牡丹、あんたなんでここにおんの？新選組と関わりがあんの？」
お茶を持って行くと、明里は興味深々に聞いてきた。
「あんな明ちゃん…今まで黙ってて悪かったとは思ってるんやけど、うち、新選組の密偵として店に出てたんや…。」
明里と話していると自然と京言葉になっているなつがいた。
「…そうか…。ようやく謎が解けたわ…。あんたがいんようになると必ず新選組が絡んだ事件が起きてたもんなぁ。」
納得がいき、すっきりした表情の明里。
「それより山南はんや！あんたの事なんも教えてくれへんかった。帰ってきたら怒らなあかんな。」
冗談ぽく笑いながら明里は言った。なつははっと気付く。明里なら山南の最近の異変を何か知っているかもしれない。
「なぁ明ちゃん…最近山南さんの様子がおかしいんやけど、なんか聞いてる？」
「……うちも気になって今日、来てみたんや…。お店には来てくれはるんやけど、なんか上の空というか…」
急に寂しそうな表情をした。
その時、襖が開いた。
「お待たせ致しました。申し訳ありま……明里っ……」
予想外の人間が部屋にいたためびっくりした顔の山南に、明里は笑っていた。
「先生に会いとなって来てしもた。」
冗談ぽく言うが、明里の目はとても愛おしそうに山南を見ている。なつは二人を邪魔しないよう、こっそりと出て行った。
明里の横に座り、戸惑いの表情を見せる山南。
「なぁ、先生、酷いやないの。牡丹が新選組と関わる人間やったなんて聞いてへんで？うちに隠し事をするなんて……」

明里は泣き真似をし、顔を下に向ける。本当に泣いていると思い、戸惑った。
「…明里…黙ってて悪かった…泣かないでくれないか…」
明里の肩を抱き、顔を覗き込む。そこには舌をぺろっと出した明里の顔があった。
「先生うちに騙されたな？牡丹が新選組やって事黙ってたお返しや。」
明里はいつもと変わらない明るさを見せていた。しかし、すぐに真面目な表情に戻り、口を開いた。
「先生最近、様子がおかしいで？何か悩み事でもあるん？うちに話して貰えへん？」
「……」
山南は黙ったままだった。
「…うちはそんなに頼りないんか…？」
明里は悲しそうな表情を浮かべた。
「うちは先生の力になりたいんや！先生の喜びも痛みも全て受け入れたいんや！」
明里の目からは大粒の涙が零れていた。山南はそっと明里を抱きしめた。
「私は駄目な男だな…女性を泣かせてしまうなんて…」
山南は明里が泣き止むまで抱きしめていた。

夜、幹部達は集められ、屯所移転の議論が交わされていた。
「ここの屯所は手狭になってきた。もっと広い所に引越しようと思っているんだが…」
「良いんじゃねぇの？今より広い部屋になるんだろ？ゆっくり寝られるじゃねぇかぁ。」
「左之助さんは今でも十分ゆっくり寝てるじゃないですか。」
左乃助と平助は楽しそうに話していた。
「今の所、西本願寺を考えている。あそこは長州の奴らと繋がって

ると専らの噂だ。ここらで釘を射しておくべきだろう。」
「西本願寺は良くないんじゃないか？あそこは歴史のある由緒正しいお寺だ。そこを血生臭い物で染めてしまうのはいかがなものか…」
山南が反論した。
「山南さん、あんたは俺らがやってる事は血生臭いって思ってるんだな。これも御厚誼のためなんだよ。」
「西本願寺、良いじゃないですか。あそこには一年に一度しか使われない講堂がある。普段は持て余しているはずです。」
伊東が賛同の口を挟んだ。
山南は思った。

新選組に、私の居場所は……ない……――――

山南は決意を固めていた。新選組にはもう、伊東という頭脳がいる。頭脳が二人もいては、意見がぶつかり合うだけだ。新選組は土方に任せておけば良い。必ず大きくしてくれる。

もう誰も…私を必要とはしていない……――――

山南の脱走

「おはようございます、山南さん。朝食の準備が出来ました。」
なつが朝食の知らせに行く。しかし中から山南の返事は返ってこなかった。
「…？…山南さん…？入りますよ…？」
襖を開けると、ガランとした部屋。布団は端に畳まれており、いつも片付いていた部屋だがより一層片付いている。
「…山南さん……何処か出掛けるなんて言ってたっけ…？」
「なつ、おはよう。どうした？」
山南の部屋で立ち尽くしているなつに永倉が声をかけた。
「おはようございます。永倉さん、山南さんて何処か出掛けてるんですか？」
「……いや…？そんな話は聞いてないが…」
二人の頭にはあってはならない言葉が浮かんだ。

―――脱走―――

山南が脱走なんて有り得ない。誰しもが思う事であった。しかし、山南の持ち物が全て無くなっている。
「…これは……脱走だな…」
「どうするんですか？」
「決まってるだろ。脱走した者は連れ戻す。」
「連れ戻した後は…？」
……
――言わないで。聞きたくない事を何故聞いてしまったんだ
「……切腹だ…」

その場にいる全ての者がそんな事を望んでなんかいない。それはもちろん、土方だって。
「法度は絶対だ。例外は認めん。」
土方はこの時、後悔したのではないだろうか。法度という物を作ってしまった事を。芹沢一派を壊滅させるために作った法度。

『お前らも気をつけろよ…特に山南さん…』

新見が切腹の前に言った言葉。あの意味が今、理解出来た。新見はこの事を言っていたのだ。
「……総司…追ってくれ…」
「…はい。」
「総司…草津まで行って山南さんに会えなかったら……その時は戻って来い…」
誰しもが思った。山南さん、逃げきってくれ……――

総司は山南を追い掛ける支度をし、その準備をなつが手伝っていた。
「ねぇ…山南さん…本当に追うの…？」
「これも私の仕事だ。…私だって…追いたくない…でも、土方さんや近藤さんが私に頼んだ理由を考えたら分かるだろう？」
近藤と土方の本当の気持ち。

山南を逃がせ

総司だから山南を逃がす事が出来る。なつは総司を見送った。
「今回はやけに素直なんだな…」
もう見えなくなった総司の姿をまだ頭で追っているなつに土方が声をかけた。
「お前の事だから自分が追うとでも言うかと思ってたが。」

「あたしが追うと言った所で、それを許しましたか…？」
「いいや…しかし時間稼ぎぐらいにはなったかもな…」
なつははっとなった。なつの後悔の顔に気付いた土方。
「大丈夫だ…総司に任せておけば。それに山南さんは捕まったりしねぇよ。」
山南さんなら大丈夫。そうは思って見ても、もし見つかって総司が逃がそうとしても山南なら、逃げるだろうか…？

山南さん…逃げきってくれ……

自分の願いとは反対に総司は山南を追っていた。矛盾した行動がおかしくなる。いっそこのままここで時間を潰してしまおうか。そうも考えたが、もう一度山南に会いたい。逃げきって欲しいはずなのに、会いたいなんて自分勝手な考えに総司は苦笑した。

総司の目の前に、会いたかった…でも会いたくなかった人が…現れた———
「…沖田くん……」
逃げも隠れもしない堂々としたその姿は…まさに『武士』そのものだった。
「…山南さん……なんで……」
ここで自分に見つかればどうなるかは山南も分かっている。

じゃあ何で……

「今日はもう日も暮れる。宿で一泊して、明日帰りましょう。」
山南の表情は晴れやかなものだった。様々な苦しみから、ようやく抜け出せる。もう何も考えなくて良い……。
「…何で逃げなかったんですか……隠れる事ぐらい出来たでしょう…」

山南が自ら総司の前に姿を現した理由がどうしても分からなかった。
「何故かなぁ。私は弱い人間なのかな。逃げきる自信が無かったのかもしれない。」
「…っ…そんなことっ…」

私はこの人を…連れて帰らなければならないのか？その先に待っているのは…
……切腹…

「介錯は沖田くんに頼みたい。」
「！！…嫌ですよっ…」

自分の手で…山南さんの首を落とす……そんな事…出来ない……――

「…っ…山南さん、私は貴方を連れ戻しに来たのではない。逃げてください…私は見つけられなかった事にします……だからっ――――」
「私は逃げないよ、沖田くん。」
総司の必死の懇願にも、山南は頷こうとしない…

もう…決めているんだ。脱走をする時から、武士らしく切腹するときっとこの人は
切腹する理由が欲しかったんだ……――――

それぞれの思い

屯所では、皆、眠れぬ夜を過ごしていた。布団の上で眠ろうと頑張るも、目が開いてしまう者。何かを振り払うかのように稽古をする者。気紛らわそうと本を読む者。仏壇の前で瞑想する者。それぞれが時間を忘れようとしていた。

なつもまた眠れなかった。山南なら大丈夫。でももし帰って来てしまったら？幼い頃から共に生活をし、剣術や学問を教わる師であった。本当の家族に捨てられた自分にとって、試衛館の皆が家族だった。山南は大好きな兄の一人。

あたしは、何も力になることも出来なかった……――

「…なつ……」

縁側で浮かない顔のなつに土方は声をかけた。なつは土方の顔を確認すると何を喋るでもなく、また俯いた。

「……俺は間違ってたのか……？」

土方がボソリと呟いた。

「…俺は新選組を大きくするためには多少の犠牲は仕方ない。そう思ってた。」

土方の声は、後悔に満ちている。

「それがきっと…山南さんを追い詰めちまったんだな…昔から一緒にいるのに…何も分かってやれなかった…」

その時、鬼の目から、涙が落ちた――――

鬼の涙に気付いたなつ。土方を抱きしめた。まるで小さな子をあやすかのように。そうしないと、この鬼ですら消えてしまいそうな気がした。

もう…家族を失いたくない……――――

「土方さん…貴方が悔やんだら、皆が困りますよ…皆、貴方のやり方についてきたんだから。近藤さんも、総司も、あたしも……山南さんも…」

翌日、総司は山南を連れて、屯所に戻って来た。

何故…

皆、落胆の表情を浮かべた。ただ一人、山南は清々しい表情をしていた。

山南の切腹は本日五ツ時と決まった。山南は、なにもかも吹っ切れたような表情をしていた。山南の部屋へは隊士達が次々に出入りしている。恐らく、皆が何らかの説得をしているのだろう。それを山南はことごとく否定しているに違いない。やり切れない表情の者達が山南の部屋から出てくる。どの隊士も山南の脱走を、咎める事はしない。何とかして生き延びて欲しい。その思いだけなのだ。

なつは近藤の部屋にいた。

「近藤さん…もうどうにもならないのですか…？」

なつは分かりきった事を近藤に聞いた。

「なつ…分かっているだろう？山南さんはもう覚悟を決めておられる。我々が出来るのは武士らしい最期を用意することだけだ…」

近藤の答えは分かっていた。それに山南はこのまま『生きる』という事を選択はしない。

その時、土方に呼ばれた。

「なつ…山南さんが呼んでる。」

なつは重い足どりで、山南の部屋へ来た。正直言うと、今、山南に会いたくない。現実を受け入れたくないなつは、山南に別れを言われるのが一番辛い。

しかし意を決し、襖を叩く。
「…なつです。失礼します…」
「忙しい時間に来て貰ってすまないね。なっちゃんにお願いがあるんだ。」
山南はいつもと変わらぬ優しい顔で、いつもと変わらぬ優しい口調だった。
「…これを…明里に渡して欲しい…」
なつが手渡されたものは、朱い簪と一通の文だった。
「…これはっ…山南さんが渡して下さいっ…いくら山南さんの頼みでもこれはできません。」
困った表情を浮かべる山南。
「…なっちゃんにしか頼めない事なんだよ…」
山南はなつの手を握った。
「私は本当になっちゃんに感謝しているんだ…ずっと…私達を支えてくれた事を…」
「…私は…何も山南さんに恩返ししてないです。小さい頃から剣術も学問も教えて貰ってたのに…」
「じゃあ…最後に恩返しをしてくれ…それを明里に…」
なつははっとして顔を上げた。そこには悪戯っ子のような表情の山南がいた。
「…困ったなぁ……山南さんには勝てないや…分かりました。明ちゃんに必ず渡します。」
なつは笑顔を見せた。それを確認し、山南も笑った。なつが見た、最後の山南の姿だった。

浅葱色

なつは島原へと急いでいた。明里に早く渡さなくてはいけない。きっと明里は知らない。山南がこれから何をしようとしているのか。もし、何も知らずに山南の死だけを聞いたら…絶対納得なんて出来ない。最期に一目だけでも会って欲しい……――

「女将さん！！」

なつは冨音屋に着くと慌てて女将の菊を呼んだ。

「牡丹！どないしたん？そんなに慌てて…」

なつの慌てようにびっくりした菊。しかしただ事ではないという事をすぐに理解してくれたようだ。

「女将さん…明ちゃんを貸してくれまへんか？代わりはうちがやるさかい…」

「新選組でなんかあったんやな？明里という事は山南はんの事やな。詳しい話は後で聞くさかい…明里～！」

物分かりの良い女将で良かった。

「へぇ～い…何どすか…？…牡丹？どないしたん……」

「これ…山南さんからの預かりもんや…表に籠を用意してあるさかい、はよ屯所に行って！」

明里は山南からの文を読み、血相を変えた。身づくろいなんてしていられない。明里は慌てて店を出て行った。

文に何が書いてあったのかは分からない。しかし山南の事だ。単刀直入には書いてないはず。でも、明里にはしっかり伝わっているんだろう。

お願い……間に合って……――――

明里は籠の中で思った。

…っ…何でうちに相談してくれんかったん?!うちの存在はあんたにとってなんやったんや…

迎えに来てくれるって…言うたやないの……

「牡丹…あんたは良かったんか…?あんたにとっても大切な人なんやろ?」

なつは菊の質問に穏やかな笑顔で答えた。

「うちはえぇんや…笑顔でお別れして来たし。あの人の中で最後のうちは笑顔やねん。今、戻ったら…泣き顔に変わってしまうわ……」

菊は今にも崩れ落ちそうななつをしっかりと抱きしめた。

明里は籠を降り、屯所の前に佇んでいた。

ここに来てしまったら別れを言わなければならない。

あの人を困らせずに喋る事が出来るだろうか――

「…もしかして……明里さん…?」

「……はい…そうどす…」

永倉が屯所の前に佇む明里気づいた。山南と明里の話はなつから聞いていた。本当に幸せそうな二人だと……――永倉にも、明里がここへ来た理由は分かっている。きっと止める事はしない。別れを言いに来たんだと…

しかし、中では着々と山南切腹の準備が進められている。これを彼女に見せる訳にはいかない。永倉は、山南のいる部屋の格子戸へ案内した。

「ここが山南さんのいらっしゃる部屋です…」

「おおきに…」

永倉にお礼を言うと、フゥーと溜息をついた。

うちは泣かへん…泣いたらあの人を困らせるだけや…

意を決し、格子戸を叩いた。

「山南はん…？」

スッと開かれた格子戸の窓の奥には、今まで見た事のない、不安そうな山南の顔があった。

「明里…」

「そんなしけた顔せんといて…牡丹……なつさんが届けてくれたんや…これ…おおきに…」

明里は、大事に握られていた朱い簪を見せた。それを見て、山南はいつもの優しい表情に戻った。

「うち、お別れに来たんちゃうねん！お礼を言いに来たんや…」

山南の武士としての最期に躊躇いがあってはいけない。明里が出した答えは、これだった。

「…おおきに……」

笑顔を見せた明里に、山南は小さく頷いた。山南には安堵が零れていた。

格子戸が閉まった瞬間、明里の目から涙が溢れた。山南に泣き声が届かないように、少し離れた所で泣き崩れた。止まらない涙。もう山南に触れる事も、傍にいる事も出来ない。ただ中から溢れる涙を流し続ける事しか出来ない。笑顔の別れ、それが山南への最後の贈り物だった。

山南の切腹の時は刻々と迫って来ていた。総司は自室に篭ったっきり、出て来ない。総司の心に迷いがあった。

山南は武士としての立派な最期を望んでいる。それにはしっかりと答えてあげたい。しかし長年共に暮らし、戦って来た仲間を戸惑いなく介錯出来るだろうか。こういう迷いがある時、必ず来てくれる人がいた。

「…土方さん…か…」

「悪かったな、俺で。なつは島原に行ってる。山南さんの女の代わりだ。」
土方は嫌味っぽく言った。
「山南さんはお前の介錯を望んだんだろう。何の迷いがある…」
総司は俯いたままだった。
「光栄な事じゃねぇか。昔からの仲間が武士として死ぬんだ。その介錯を出来るなんて。」
「土方さん、山南さんへの仲間意識あったんだ。」
総司は笑みを見せた。土方もまぁな、と言い笑った。
武士として死ぬ山南を自分の手で介錯する。そしてそれを山南も望んでいる。総司に出来る事はただひとつ。山南を武士らしく送る事。それが総司に与えられた使命。ようやく総司の胸に決心が沸き起こった。
前川邸のとある一室に山南と新選組幹部全員が集まっていた。切腹の際には幹部全員が集まる事になっている。幹部は全員、浅葱色の羽織りを着ており、そして山南は、白装束に浅葱色の裃姿。武士として生き、武士として死んでいく者の最期がそこにはあった。
「最後に言い残したいことはあるか？」
土方の顔に、もう後悔は見当たらない。武士らしく死ねる。そんな山南が誇らしくもあった。
「では、最後に二つだけ、お許し下さい。一つ目は沖田くん…私が声をかけるまで待っていてください。」
総司はしっかりと頷いた。
「二つ目は…なっちゃんにありがとうと…そう伝えて下さい。」
「…心得た……」
土方の言葉を聞くと山南は、いつも見ていた穏やかな表情になった。
山南の切腹は武士に相応しく、横一文字に大きく切られていた。
そして総司の介錯も何の迷いもなく、潔かった。

近藤は言った。
『大石内蔵助ですらこんな素晴らしい切腹はしていない。山南さんは武士の中の武士だ。』
屯所へ帰って来たなつ。そこは皆、山南の死を悼んでいた。どの隊士にも覇気は無く、山南が皆にどれだけ愛されていたかが分かる。
なつの帰りを待っていたように、土方が声をかけてきた。
「…お帰り……。」
「ただいま戻りました…。」
「山南さんからの伝言だ。『ありがとう』」
「…え……？」
「最後に言い残したい事を聞いた時に頼まれた。」
思いがけない事だった。お礼を言わなければならないのは自分の方。お礼を言われる事なんて何もしてないと思ってた。
「…あたし…『ありがとう』なんて言われる事…何も…」
なつに戸惑いの表情が浮かんだ。
「自覚がなさすぎなんだよ。新選組がどんなにお前に感謝してるか……もちろん…俺も…」
だんだん語尾が小さくなる土方。
「…え？！最後が聞き取れなかったんですけど？！」
土方が珍しく素直になったものだから、面白くなって聞き返した。
「…おまっ…聞こえてたろ！」
土方との何気ないこの会話が、悲しみを忘れさせてくれるようだった。きっと山南は暗く沈んだ新選組を望んではいない。
なつは心に固く決意した。
あたしが皆を盛り立てる。だから山南さん、見守ってて下さい。
これからどんな事が待ち受けていようとも、貴方が作ってくれた新選組をあたしは必ず護ります。

晴れ渡った二月二十三日の夜の空に、流れ星がスーっと流れた。

山南の足跡

山南の死後、隊士達は何かを振り払うかのように、仕事、稽古に打ち込んだ。皆、それぞれ、最後に山南と交わした会話が力になっているのだろう。力のある者であれば、身分関係なく採用する新選組。しかし処分も、幹部であろうが平隊士であろうが分け隔てなく行う。それは大きな結束となり、大きな力になる。山南はそれを残してくれたのだ。

毎日が淡々と過ぎて行く中に、一つ大きな事があった。八木邸、前川邸と借りていた屯所だが、隊士の増加により、屯所を移転する事が決まった。移転場所は、山南が反対していた西本願寺。西本願寺は敷地も広大で、宿泊場所も十分にある。まだまだ隊士を増やす予定の新選組にはもってこいなのだ。

最近は仕事、稽古に加えて引越準備が加わった。皆がとてもバタバタとしている。なつもまた、バタバタしているうちの一人だった。

「なつさん！縄が欲しいんですけど…」

「縄なら倉の中にあるんじゃない？」

「なつさん！押し車、一台しかないんですか？」

「前川さんとこにもう一台あるはずだけど…」

「なつさん！掃除できました！」

「なつさん！これはどこに運んだら？」

「なつさん！沖田さんと別れる予定は？」

全て聞いていたらなつ自身の仕事がはかどらない。そう思ったなつは必要なこと以外は答えないようにしていた。

「まったく、あたしは聖徳太子じゃないっつうの！！」

そんな独り言を言いながらバタバタと働くなつをほほえましく見ている男が一人。井上源三郎だった。彼もまた幼い頃から共に暮らした仲間。兄…ではない…父…でもない、それとは別の何かだけれ

ど大切な人だ。
「なつ、少しは休憩したらどうだ？」
お茶と菓子を持って来てくれた。
「源さん、ありがとうございます。」
二人は、隣に座りながら休憩する事にした。
「なつ、無理してないか？山南さんが死んでから人が変わったようだ…」
山南が死んだ次の日から、なつは今まで以上に隊士達に明るく振る舞うようにしていた。
それは山南のためでもあり、いつまでも暗く引きずっていられないという思いがあったから。
「あたしが皆を元気付けなきゃ。それが山南さんへの恩返しだと思っているから。」
源三郎は思った。いつまでも子供だと思っていたが、もう一人前の大人の女性になっている。でもだからこそ、自分の気持ちを押し殺しているのではないかと。
「何、二人で抜け駆けしてるんですか？私も混ぜて下さいよ。」
甘い物の匂いを嗅ぎつけ、総司が二人の間に入ってきた。
「総司、お前もう片付けは終わったのか？」
「私は今日は見廻りでしたからこれからします。……なつが…」
「「…は？！」」
人任せな総司の発言になつと源三郎は聞き返す。
「…だって私には稽古とかありますから…ゴホッゴホッ…ほら、風邪もひいてますし。」
源三郎は思った。なつは総司の母親の役目もはたしているのだと。二人が恋仲なのは分かっているが、何とも不思議な感覚になる源三郎なのであった。
総司に頼まれると断れないのがなつの性格。よっぽど総司に惚れ

ているんだなと、自分で納得してしまう。
総司の部屋は、汚くはないが片付いてもいない。細々としたものが散らばっている。纏めて入れるために箱を探す事から開始した。
ほとんどの隊士は既に引越準備のために、荷物を纏めている。箱を探すのはなかなか困難であった。しかし全く手のつけてない部屋がひとつある事に気が付いた。

山南の部屋

そこは山南が脱走した時のまま、何も手を付けられていない。そこへ行くと山南の生きていた空間があり、とても辛くなる。幹部でさえ近寄ろうとしなかった。しかし、ここを片付けない訳にもいかず、箱を探しがてら入ってみることにした。
きちんと畳まれ、端に寄せられた布団。文机の上には何も乗っておらず、がらりとした部屋だった。しかし、紛れも無くここには山南が生きていた。あの優しい笑顔も、たまに見せる鋭い目線も、人を和ませてくれるあの声も、もう見たり聞いたりする事は出来ない。
山南の死から明るく振る舞っていた自分は偽りの自分で、今、こうしてただ山南の生きた証を探している自分が本物なんだとなつは感じた。

山南さんの死を受け入れたつもりで受け入れてなかったのは…あたしだったんだ。

新たな旅立ち

結局、総司の部屋の片付けはやらなかった。というより出来なかったのだ。どうしても山南の墓へ行きたくなったというのが理由。今までなつは忙しいからという理由で山南の墓へ行っていなかった。しかし、本当は山南の死を認めてしまうのが嫌で避けていたのかもしれない。

山南の墓は屯所に程近い、光縁寺という寺にある。水と花を持ち、山南の墓に近付くと、先客がいる事に気付いた。

「…近藤さん……」

まるで謝罪しているかのように手を合わせている近藤がそこにいた。

「…なつ……」

きっと近藤も悔やんでいるのだろう。近藤の事だ、山南の様子の変化に気付きながらも何も出来なかった自分を情けなく感じているのかもしれない。

「私はどうしようもない局長だな…仲間の気持ちに耳を傾けないなんて…悔やんでも悔やみきれない…」

落ち込む局長に何と声をかけて良いか分からなかった。普段は風格のある偉大な局長だが、今の近藤はとても小さく感じる。きっと近藤も普段は他の隊士達が不安にならないよう、自分を偽っているのだろう。山南の死は、それほどまでに皆の心に大きな空間を作っていた。

そんな近藤を見ているとなつは、やはり自分が皆を盛り上げないといけないと感じてくる。自分を偽っても構わない。いつかこれが本物の自分になる。

近藤と共に山南の墓の掃除をし、花を生けて来た。近藤は屯所の手前で近藤は立ち止まり、なつに向かって言った。

「なつ、無理をするな…泣きたい時には泣いて良いんだ。泣く事は

弱い事じゃない…。俺達には甘えて良いんだ。」
近藤には分かっていた。なつが自分を偽ろうとしていた事を。山南が死んで、ようやく涙を流す事が出来た。心にあいた空間が少しずつ埋められていくような気がした。

いつものように仕事を終わらせ、自室に戻ろうとすると、総司が庭で稽古をしているのが見えた。総司は額に汗を浮かばせ、黙々と剣を振っている。その姿は江戸にいた頃と変わりないように見えた。しかし間違いなく変わっている。総司は人を斬るという経験をした。それは人の人生を終わらせるという事。
普段の総司は今までと全く変わらない。変わらず冗談を言ったり悪戯をしたりする。しかしふとした瞬間、影のある顔をするのをなつは知っている。その度に、胸が締め付けられる思いになるのだ。
「なつ…終わったの？」
なつが立ち尽くしているのに気が付いた。
「…うん。」
「…なつ……私は何のために剣術を学んできたのだろう…」
総司は酷く辛そうな表情を浮かべた。
「仲間を殺すために剣術をやってきた訳ではない…」
「…殺すだなんてっ…山南さんは切腹であって総司が殺した訳では
「同じだよ…私が山南さんの命を終わらせたんだ…」
総司にも山南の死は大きな闇を作らせていた。
なつは総司を抱きしめた。今にも崩れ落ちそうな総司。
「山南さんは、総司の介錯を望んだんでしょ？何も悔いる事はない。山南さんの最後の望みを叶えてあげたのが総司なんだよ？誇れる事だと思わない？」
総司はなつを抱きしめ返した。その手は僅かに震えていた。
その夜、なつは総司を一人にさせておけなかった。総司までどこかへ行ってしまう、そんな気がしたのだ。総司の寝ている布団になつも潜り込んだ。

「どうしたの？珍しいね、なつから入ってくるなんて。」
「…今日は…一緒に寝たいの…／／／／」
総司の着物に赤くなった顔を埋めて言った。
「／／／／…そんなかわいい事言ったら…襲っちゃうよ？／／／／」
さっきまでの辛い声とは違い、いつもの悪戯っ子の声に戻っている。
「……いいょ…」
蚊の羽の音ぐらい小さな声で答えたなつ。しかし総司はそれもしっかりと聞き取っていた。総司はなつの顔を覗き込んだ。
「……本当に…良いの…？／／／／」
顔を赤らめ、頷くなつのその表情と動作は総司の欲求を爆発させた。もう誰も総司を止められない。
総司の唇と舌はどんどん激しさを増す。なつの敏感な所を心得ている総司はそこばかりを狙ってくる。何度も快楽の波に飲み込まれ、休む暇を与えてくれない。総司の息遣いも荒く、時おり聞こえる快感の鳴咽が、またなつを敏感にさせるのだった。

引越当日、西本願寺では部屋の仕切りを作ったりで大変賑やかになっていた。なつは壬生屯所の後片付けを任されている。二年間お世話になった壬生の方のために、隅から隅を大掃除する事にした。
台所を念入りに拭いていると、ご機嫌な二人が入って来た。永倉と左之助である。
「頑張ってるねぇ！手伝おうか？」
「良いですよ～ここは私が任された所ですから。それよりあっちは落ち着きましたか？」
「あっちはもうほぼ終わりだ。結構良い感じになってきたぜ～。」
壬生を離れるのは寂しいが、新しい所での生活が楽しみというのもあった。
「そういえばなつ、総司とは夫婦（めおと）にならねぇのか？」
突拍子もない事を言う左之助になつも大慌てだ。

「な…な、ななな何を言うんですか?!左之助さん!夫婦なんてそんな…」
「別に良いじゃねぇか。誰も反対する奴いねぇだろ。」
「平助が反対するかもな…」
未だ平助はなつを諦めてない模様だ。
「なつの気持ちはどうなんだ?」
「あたしは……総司の傍にいられるなら、夫婦にはこだわりません。総司の傍で生きているだけで幸せなんです。」
二人は思った。夫婦という形式にとらわれなくても、女を幸せに出来る事はあるのだ、と。その後、世間話をしながら…というかなつの邪魔をしながら、引越の一日は過ぎて行った。

新たな新選組

西本願寺へ移転した新選組の屯所では、威勢の良い掛け声が聞こえている。稽古場所も大きくなり、また隊士も増えたため賑やかさがかなり増した。そのため、女中がなつ一人ではまかないきれず、永倉の女であるおそのは近くの家を借り、左之助の恋仲のおまさは自分の店以外の時間を手伝ってくれる事となった。この二人には、なつが密偵をしている事も話されている。

大量の洗濯物に囲まれながらおそのは言った。

「こないに沢山、終わるめどがつきませんなぁ。見てるだけで嫌になりそうや…」

「あたしも思います。でも喋りながらだったら以外に早く終わりますよ。一人でやってたら投げ出したくなるけど。」

なつは笑いながら言った。今まで、一人でやる事もあったが、総司や平助、平隊士達が手伝ってくれる事も多かった。

「必ず暇そうにしてる隊士いますから、その人達に手伝って貰うのも手ですよ。女の仕事の大変さも分からせないと！」

おそのにとってなつの存在は大きかった。ずっと男所帯の中に一人で掃除や洗濯、食事の支度などをやってきたなつは、芸妓上がりのおそのにとって一種の憧れのようであった。

「おその、仕事には慣れたか？」

なつと喋りながら洗濯をしているおそのに永倉が声をかけた。

「大変やけど、なつさんが丁寧に教えてくれはるさかい、大丈夫です。」

「そうか…でもなつはいつもいる訳ではないからな。頑張りなさい。なつ、おそのを頼む。」

なつが頷くのを見ると爽やかな笑顔で去っていった。

「永倉さん…本当におそのさんが大切なんですね。」

なつの言葉におそのは照れながらも嬉しそうだった。

今日はまさも手伝いに来てくれている。炊事場はいつにも増して明るい。そんな中に、山崎が顔を出した。
「お忙しい中、すみません。なつさん、土方さんがお呼びです。」
どうやら仕事の依頼らしい。部屋へ行くと、近藤、土方、伊東が顔を揃えて待っていた。
「今回はどのような内容ですか？」
頼まずして仕事だと感じとってくれるなつが土方にとっては嬉しかった。なつも成長したものだと…
「土佐に坂本龍馬という男がいる。この男の動きが怪しいと会津からお達しが来た。探ってくれ。」
「かしこまりました。ひとつだけよろしいでしょうか？」
「何だ？」
「おそのさんの手伝いをする隊士を付けて欲しいのです。あたしが出ている間だけで構いません。」
おそのはよくやっている。しかしそれでもなつと二人分の仕事をしきる事は出来ない。自分が屯所を空けるとなるとやはりその事がひっかかるのだ。
「分かった。毎日日替わりで隊士を付けよう。女の仕事を知るというのも精神鍛錬になる。」
近藤は納得したようである。なつも安心し、島原へ行く準備を始めた。

なつは総司を探していた。島原へ行くとなるとしばらく屯所を空ける事になる。やはり、顔を見て行きたい。
総司は寺の裏で一人、稽古をしていた。
「総司っ！最近、やけに稽古熱心じゃない？」
「当たり前じゃないか。私には時間が……」
『時間が無い』と言おうとして、言葉が止まった。
「時間…？」
「何でもないよ。それよりどうした？この時間はいつも食事の支度

だろう。」
なつには言ってない。労咳だという事を。なつより先に死んでしまうという事を。
「…うん……またしばらく島原に行ってくる。だから、会いに来たの。」
心に引っ掛かる物が有りながら、なつは答えた。
「そうか…今度は誰？」
「土佐の坂本龍馬」
「…そう……気をつけて…」
総司はなつのおでこに軽く口付け、すぐに稽古に戻ってしまった。
…何で？何で抱きしめてくれないの…？
なつは総司への不安を抱えながら、島原へと向かった。
総司は心の中で謝っていた。
なつ…ごめん……私は貴女を幸せに出来ない。
戻って来たら、もう終わりにしよう……———

坂本龍馬

土佐の坂本龍馬。彼はなつが島原へ来て二日後に姿を現した。思ってた以上に早く姿を現したので、なつは幾分安心していた。総司の態度が気になっていたのだ。しかし早く何かしらの情報を聞き出さなくては帰れない。

早く総司に…会いたい…

「ようこそ…天神牡丹でございます…」

顔を上げるとそこには、決して小綺麗とは言えぬ形(ナリ)をした男がいた。お世辞にもこの男が重要な鍵を握っているようには見えない。今まではそれなりに危険も感じ、気合いも入れて座敷に出ていたが、坂本の場合は危険とは程遠い雰囲気だ。

「おまん…」

「…な…なんどす…?」

鼻がぶつかりそうな距離で坂本に覗き込まれた。

「綺麗やにゃ〜!!」

いったい何なんだ?!この男…。やたらとテンションが高く、おさわりも多い。さっきから肩やら背中やらをバシバシと叩かれている。

「…あの…坂本はん…?…ちょっと痛いんどすけど…」

「はっはっはっすまんにゃ〜。これはわしの挨拶じゃき。」

挨拶というには手荒い挨拶だ。

「女将が推しただけある女子(オナゴ)やき。これから馴染みにしてもらうぜよ?」

「おおきに。よろしゅう頼んます。」

女将には今回の話が伝わっているようだ。それで天神牡丹を坂本

に推したのだろう。
「坂本はん…飲んどおくれやす。うちも坂本はんとしたしゅうなりたいわぁ…」
「飲むぜよ飲むぜよ～こんな別嬪に会えるんはなかなかないき。」
坂本は大いに飲み、騒ぎ帰って行った。
坂本龍馬
『脳ある鷹は爪隠す』とはこの男のためにある言葉かもしれない。

「……ハァーーー…」
土方の部屋で溜め息をつく男が一人。
「……なんだよ…総司…」
土方の布団を勝手に出し、勝手に寝転がり、いかにも聞こえるように溜め息をついた。
「……私…なつが戻って来たら、もう終わりにします…」
「はぁ？！」
突然の爆弾発言にびっくりした土方。まぁ誰でもびっくりする内容なのだが。
「……って思ってたんです。私にはなつを愛する資格は無いと思ってたんですけど…」
総司が真面目に話していると気付くと、土方も向き合って聞く事にした。
「なつの事を考えれば考える程、私がなつを手放したくないって思うんです…。我が儘だなぁ、私は。」
うなだれるように言う。
「お前の我が儘は今に始まった事じゃないってなつも知ってるだろ…。一応、これだけは言っておく。平凡な生活だけが幸せじゃない。以上。」
それ以上、土方は口を開こうとしなかった。土方には総司の考えが分かっていた。労咳という病を持ち、いつまで生きられるか分からない。残されたなつを悲しませたくない。それならば別々の人生

を歩んだ方が良い。そう言っているのだろう。
総司も土方の言っている事は理解出来ていた。
でも…なつを残して死ぬのは…一番悲しむ事だけはしたくない。
この体はいったいいつまでもってくれるのか……――――
なつが島原へ来て一週間ほどが経った。坂本はちょくちょく来てくれる。あの豪快さと手荒い挨拶は相変わらずだ。今日の坂本の座敷は何やら雰囲気が違った。いつも一人で来る坂本だが、今日はもう一人いる。
「牡丹、こいつはわしの友人の中岡慎太郎やき。仲良うしたってくれや。」
「中岡慎太郎やき。坂本～おまんの言うてた通りぜよ。ほんに別嬪やのぉ。」
坂本との初対面の時と同じように顔を近付ける中岡。類は友を呼ぶのだろうか。
「中岡はん…これからも天神牡丹をご贔屓に…」
「おぉ～しちゃるしちゃる！ところでおまん、国はどこや？」
中岡はなつに聞いてきた。ただの興味か、はたまた何か感じ取られたか…。
「うちの生まれは大坂の堺どす。何でそんなん聞かはるんどすか…？」
「ただの興味やき。深い意味はないぜよ？」
そう言った中岡は坂本と飲み始めた。本当に深い意味はなかったようだ。内心、ホッとしたなつであった。
「せや！牡丹、おまん嫌いな奴はおるかえ？」
坂本、突然すぎる。意味不明なこの質問は何なんだ？！
「せやなぁ…ここだけの話、苦手なお馴染みさんはいますえ…？いったい何でですのん…？」

「おまん、その馴染みに身請けされる言われたらどうする？」
「それはお断りしますえ…？」
坂本の意図が全く掴めない。いったいこの男、何者なんだ？疑問しか浮かばなかった。
「ほうか～何とか身請けされる方法はないんかのう？」
「せやなぁ…あ、着物。うち、天神やさかいそないにぎょうさんの着物は持ってまへんのや。毎日違う着物が着れたら幸せやなぁ。」
「それは新しい着物いうことかえ？」
「へぇ。そないなこと聞くなんて坂本はんが買うてくれはるんどすか？」
坂本は固まったまま動かない。目の前で手を振ってみるがいっこうに動く気配がなかった。
「坂本はん？」
「それじゃっ！！！！！！」
坂本が突然立ち上がった。
なつは呆気に取られる。何が何だかさっぱり分からない。
「牡丹、おまんはえぇ女子やの～。」
なつのの肩をグラグラと揺らした。
「…さ…坂本…はん…？気持…ち悪なる……」
「おぉ～すまんすまん。やるぜよ～牡丹、日本が変わるきね～～。」
なつの目付きが変わった。坂本はやはり何かやろうとしている。これを逃す手はない…
「日本が変わるってどういう意味なん？」
「南蛮でいうとこのビジネスをするがぜよ。」
「…びじ…ね…？」
「そやにゃあ～取引じゃき。お互い嫌い合ってるもん同志が手を結ぶ方法ぜよ？」
嫌い合ってる者…今の時代でいうなら、長州と会津？それか長州と薩摩？さまざまなことがなつの脳内を駆け巡った。
「中岡、わしは早速行動するぜよ。善は急げじゃき。わしは桂さん

とこ行くき、おまんは先に吉之助どんとこに行っといてくれ。」

吉之助？誰？こういう時、山南さんがいればすぐに解決してくれるのに…

坂本と中岡はまた来るき、と言って足早に去って行った。早く伝えなくては…完璧な情報ではない。でももう既に坂本は動き出した。

まさか己の言葉が坂本にヒントを与えてしまったとは…はっきりした意図が掴めないけど、新選組にとって良くない方向に進んでいる気がする。なつは不安な気持ちを隠せず走り出した。

ひと騒動

なつは着替えもそこそこに屯所へ急いだ。西本願寺の屯所は島原から程近い。籠を呼ばずとも走って帰った方が早いのだ。
息を切らしながら屯所へ帰って来た。止まる事もせず、局長室へ急いだ。
「「「?!?!」」」
疾風の如く永倉、左乃助、平助の横を通り過ぎたのは、格好は町娘、化粧は遊女という何とも不思議な姿をしたなつなのであった。
「な…何だ…?今の…」
「…なつ…だよな……」
「私のなつちゃんが…」
「「いや…お前のじゃないだろ…」」
二人に突っ込まれる平助であった。

破壊音にも似た音が近藤の鼓膜を揺らし、それに加えて現れたなつの姿に近藤は口を開けて動きを止めた。肩で息をし、鬼のような形相で近藤を捉えるなつの眼差し。まるで蛇に睨まれた蛙状態であった。
「お…お帰り……」
「土方さんと…伊東さんを…」
普段ならなつが土方らを呼びに行くところ、今回ばかりは局長自ら行くのであった。
「あの…歳…なつが…」
「おぉ。帰って来たか。早かったな。」
「あん…心の準備をしておけ…」
「何言ってんだよ。そんな驚く内容じゃねぇだろ。」
「…いや…じゃなくてなつにだ…」
訳の分からないといった様子で土方は笑った。しかしなつを見た

瞬間、近藤を笑った事を後悔したのだった…

「「「……」」」

息こそ戻っているものの姿はまだ町娘に遊女。おまけに走って来たためか、髪や着物が乱れている。直視は出来ず、視線を反らしたまま固まる三人であった。

「坂本が現れました。」

「お…おう……」

普段、物事に動じない土方すら、どもってしまう。

「よく分からない男で訳の分からない事を言っていました。南蛮で言うとこのびじ…びじ……」

「「びじ？」」

「ビジネス」

「それです！びじねすをするって言ってました！」

博学の伊東。なつの意味不明な言葉にも理解したようだ。

「取引です。他に何か言ってませんでしたか？」

「坂本は桂の所へ、もう一人仲間の中岡慎太郎という男が、吉之助っていう人の所へ行くって言ってました。坂本は桂の所へ行った後に向かうと…」

「吉之助…薩摩の西郷さんだ…」

近藤は面識があるようだ。

「なんでそんな奴のとこに…」

「おそらく坂本は、長州と薩摩を繋げようとしているのでしょう。」

「びじねすをするというのはどういう意味ですか？」

「確信は持てませんが…お互いに無い物を補い合うといった所でしょうか。」

伊東は顎をさすりながら話し始めた。

「風の噂で薩摩は飢饉だと聞きました。米が無いと…。しかし、先日の薩英戦争で、薩摩はエゲレスとの仲を深め、武器を輸入していると聞きます。」

さすが伊東である。なつにも分かりやすいように話してくれている。
「長州は高杉晋作らが反乱を起こしたため武器が不足しているとの噂です。もし、薩摩が長州に武器を渡し、長州が薩摩に米を渡すとなれば…」
「両藩が手を結ぶという可能性があるという事ですか？」
「その通りです。」
信じられない。誰もがそう思っていた。
「薩摩と長州はどちらも外国と戦をして負けている。となると攘夷ではなく、開国派となるか？」
「おそらく。そして政の実権を狙っている。そうなると邪魔になるのは会津藩と幕府。倒幕を考えるでしょう。」
共に助け合ってきた薩摩が敵になるのだ。これは大戦になるかもしれない。皆の中に様々な不安が取り巻いていた。

これから日本はどうなるのだ……――――

「…とりあえずなつ、ご苦労だった。」
「いえ…」
「…それから……」
「はい…？」
「風呂に入れ…その格好を何とかしてこい。」
なつはようやく自分の姿に気付いた。無我夢中でやっていた時は気が付かなかったが、確かにとんでもない格好をしている。なつは慌てて風呂へ駆け込むのであった。

なつは大慌てで風呂に入っていた。よく考えれば遊女の化粧のまま屯所へ帰って来るなんてやってはいけない事だった。なつが密偵をしているのを知っているのは幹部とおそのとおまさだけなのだ。平隊士には、なつが島原へ行っている間は親戚の所へ行っている事

になっている。見つからなかったから良かったものの、ばれていたら大変な事になっていた。
こんな失態をするといつもなら土方が怒るはずだが、今日はそんな余裕も無い程、なつの雰囲気が強烈だったのかもしれない。風呂の中で反省しながら化粧を落としていた。

なつが帰って来ている事も知らずに、風呂へやってきた男が一人。着物が置いてあるにも関わらず、考え事をしているためか気付かない。脱衣場と風呂の間の戸を開けた。目に映ったのは、桶から湯を肩にかけている、白く透き通った身体を持つ女の背中。一瞬、時が止まった。
なつは湯が流れる音で戸の開く音が聞こえなかったのか気付いてない。
……が、戸を開けた事で冷たい風がなつの肌に触れた。振り返ると、仁王立ちの男。
「い〝やあぁぁぁぁ！！！！」
なつの悲鳴が広い屯所に響いた。
悲鳴を聞きつけて、続々と隊士がやって来た。しかし、風呂の前には総司。それも裸なのだ。なつがいる事に気付かず、風呂に入って来たのは総司だった。
なつが悲鳴をあげたのは湯煙で総司だと分からなかったから。
「皆さん！何でもないですから戻って下さい！」
裸でそんな事言われても説得力が無い。
「おい、総司、何やってんだよ。」
左乃助はいやらしい笑みを浮かべながら総司を見る。
「何でもないですから！」
「何でも無くてあの悲鳴はねぇだろ！なつは？！」
慌てて駆けつけてみればこの姿。土方は呆れながら言った。
「私だと気付かなかったんです！お互い身体は見慣れてますから分かっていたらあんな悲鳴はあげません！」

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

皆、考えている事は同じだった。平隊士達は様々な妄想をしながら戻って行った。そして、幹部の中にも深手を負った者が一人。彼は永倉と左之助に付き添われて、部屋へ戻っていった。

「…とりあえず総司、風呂に入るなり着物着るなり何とかしろ。風邪引くぞ。」

総司は風呂へ入る事になり、近藤達が戻ろうとすると………

「なつ？！」

悪いと思いながら覗くと、湯舟に寄り掛かりぐったりとなったなつの姿があった。外で揉めている間になつはのぼせてしまったようだ。

なつはおそのとおまさに着物を着させてもらい、その後総司が部屋へと運んだ。布団に横たわり、のぼせた身体を総司が団扇であおいでいた。初め、真っ赤だったなつの顔もだんだんと元の色へ戻ってきた。

総司はなつの頭を撫でながら考え事をしていると、うっすらと目を開けた。なつの目に映ったのはボーッとした表情の総司だった。

「…総司…？」

「…気が付いた？なつがあんな悲鳴あげるから大変だったんだぞ。」

総司はなつのおでこをコツンとつついた。

「…だって…／／／／」

なつは総司の手を握った。しかし、総司はその手を離し、ニコリと笑うとおやすみと言い、部屋を出て行った。

………何で………？…総司の態度がおかしい。お願い…離れて行かないで…

総司も苦しい表情を浮かべていた。大好きで愛しいなつにあんな顔をさせてしまった。

『私を置いて逝かないで…』

池田屋で言われた言葉が総司の頭からは離れなかった。

私はなつより先に死ぬ。それならば、悲しみを知らない間に別れた方が良い……

二人の苦悩

なつが目を覚ましたと聞き、土方が源三郎を伴い部屋へやって来た。
「なつ、入るぞ」
「……」
目を覚ましたと聞いたのに中からは返事は返ってこない。襖を開けると、布団を頭から被り、丸まったなつの姿があった。
「どうした？気分でも悪いか？」
「どこか痛いとこでもあるのか？」
「……心が……」
ボソッと呟いた。
「は？」
「心が…痛いです…」
土方と源三郎は顔を見合わせ、溜め息をついた。長年共に暮らすから分かる意味だった。理由は一つしかない。総司だ。
土方は源三郎になつを任せ、総司の部屋へ向かった。

はぁ…俺は何でこんなどうでも良い事で手をやいてんだ……

土方はこう思っていても、実際は誰よりもなつと総司に幸せになってもらいたいのかもしれない。源三郎はそんな土方がほほえましかった。隊士達からは恐れられている土方。しかし総司となつの事になると人が変わったようになる。それは昔も今も変わらない。大きくなった新選組で変わらない所を見つけると嬉しくなるのだった。
「総司、入るぞ。」
土方が総司の部屋の襖を開けると、なつの部屋で見た光景と同じものがあった。布団を頭まで被り、喋ろうともしない。

…ったく…どこまで似てんだよ、こいつら…

土方は総司の布団の横に腰を降ろした。

「なつに何を言った…？」

「…何も言ってないです。」

溜め息しか出ない。

「お前、どうしたいんだよ…？」

「何がですか…？」

「なつと本気で終わりにするつもりか？」

「そんな訳ないじゃないですか！」

総司は布団からガバッと起き上がり、土方を見た。

「私は…なつと夫婦（めおと）になりたいぐらいですよ…」

「じゃあなったら良いじゃねぇか。」

「駄目なんです。それじゃあなつは悲しむ。残された者の悲しみを味わわなきゃいけないんです…」

そう言うと総司はまた頭から布団を被り、何も話さなくなった。土方は聞いているのか聞いていないのか分からない総司に話し始めた。

「お前、病の事を言ってないだろ？なつに話せ。少しはなつに選択肢を与えろよ。なつの立場になってみろ。一方的にさよならじゃ納得できねぇよ。」

土方はそう言うと、布団の上から総司の頭をポンポンとし、出て行った。

総司は布団の中で土方の言葉を繰り返していた。

『なつの立場になってみろ。一方的にさよならじゃ納得できねぇよ。』

言われてみればそうだ。もしなつの立場で何の理由もなく別れを切り出されたら、悲しいだけではおさまらない。しかし恋仲の相手に労咳だと告知されたらどうだ？出てくる感情は何だ？悲しみ？絶望？同情？

なつの事だ。何ともないふりをする。でも苦しませてしまわないか？

何で労咳なんてなってしまったんだ…

総司には悔しさが溢れていた。

土方はなつの部屋へ戻っていた。なつは相変わらず布団を被ったまま。源三郎は近藤に呼ばれたようでいなかった。

「なつ、起きてるんだろ？ちょっと話を聞け。」

なつはピクリと動いた。

「お前が総司への不信感があるのは分かってる。だけどあいつも悩んでるんじゃねぇか？」

「土方さんは何を知ってるんですか？あたしが知らない事を土方さん、知ってるでしょ…」

なつの声は震えている。泣きたいのを必死に我慢しているのだろう。

「…知ってる。だけどそれは本人から聞け。俺が言う事じゃない。」

そう言うと土方はなつの部屋を後にした。

なつは考えていた。土方は知っているのに自分は知らない。総司の事で知らない事は無いと思ってた。

他に女ができた？土方ならまだしも総司に限ってそれはない。

何か罪を犯した？それなら本人に聞く前に噂で流れるだろう。

あたしに知られたらまずい事。そういえば総司、ずっと風邪を引いたままだ。

もしかして…何か病なの…？

女の勘はよく当たる。当たって欲しくないものまで当たってしま

う。なつは突然不安になり、総司の部屋へ駆け出した。

協和と悪戯

「総司っ！」
なつは総司の部屋へ飛び込み、総司に抱き着いた。
「…なつ……」
「何を隠してるの…？お願い、教えて。」
総司の耳元で囁いた。
「何も…隠してないよ…？」
「嘘…土方さんは知ってる事があるでしょ？何を言われても大丈夫。覚悟は出来てる…」
総司はなつを抱き締めながら言った。
「しばらくこうしてて…」
総司はそれきり黙ってしまった。でもなつは何も言わない。言われた通り、総司の鼓動の音を聞いていた。

どれくらいそうしていただろう。総司はようやく心を決め、深呼吸をした。
「なつ、正直に言う。だから、私が喋り終わるまで何も言わないで…。」
なつはコクリと頷いた。総司はなつと体を離し、二人は向き合うように座った。
「私は労咳だ。」
総司は顔色も変えずに言った。
「私は池田屋で血を吐いた。それを知っているのは土方さんだけなんだ。医者に言わすと、労咳は安静に暮らしていたら天寿を全うする事が出来るらしい。」
なつは総司から発せられる言葉のひとつひとつを噛み締めるように聞いている。
「でも私は…剣の道を棄ててまで天寿を全うしたくない。私は一生、

剣士でいたいんだ。」
総司の目は真剣だった。
「もし次に血を吐いたら、まずいらしい。私はいつまで生きられるか分からない。多分…なつより早く逝ってしまう。」
なつは気付いた。自分が池田屋事件の後に言った言葉が総司を悩ませていた、という事を。
「だから、なつと離れようと思ったんだ。私といたら余計になつが悲しむ事になる。なつの悲しむ顔を見たくない……――――」
総司の顔が歪んだ。
「…でも…私が嫌なんだ。なつが私の傍からいなくなる事が。他の男の所へ行った方が幸せになれるのは分かっているのに……。」
総司の目から涙が零れた。
「私は我が儘だな…なつの幸せを願っているのになつを幸せの元に送り出せない。」
総司の言葉は止まった。次から次に流れる涙には悔しさが溢れていた。愛する女を幸せに出来ない悔しさが。

「総司…間違ってるよ…？」
なつは総司に語りかけるように優しく言う。
「あたしが総司じゃない人の所へ行って幸せになれると思う？」
総司は俯いたままだった。
「総司が労咳だから他の人に乗り換える？冗談はやめて。あたしは体の丈夫な人が好きなんじゃない。総司が好きなの。総司が労咳だから何？それは別れの理由にならないよ…」
なつは優しい笑みを浮かべていた。
「総司は新選組一番組長。常に命懸けの生活をしている。それくらいの覚悟は出来てるよ…」
総司はなつの言った言葉の意味を理解した。いつ命を落としてもおかしくない新選組。総司の死が明日であったとしても、なつなら受け入れてくれるだろう。

なつを置いて先に逝ってしまっても、なつなら大丈夫だ。

「…ごめん……」

総司は一言呟き、なつを抱き締めた。

『ごめん』

その一言でなつには伝わった。なつを理解してなかった事別れを考えてしまった事先に逝ってしまう事…

それでも良い。総司の命が続く限り、あたしは総司の傍にいる。

その日、お互いの存在を確かめ合うかのように、身体を重ねた。

先日、別れの危機を脱したなつと総司。これは土方が気を使ってくれたから。二人は朝から土方の部屋へ向かっていた。

「こんな朝、早くに土方さん起きてないけど良いの？」

「良いの良いの！」

総司の目はまるで悪戯をする前の子供のようにキラキラしていた。なつはこの目をよく見た事がある。試衛館にいる頃、二人でよく悪戯をしていた。あの時と全く変わらない目。なつはそれが嬉しくなった。

土方の部屋へこっそりと忍び込む。案の定、土方はぐっすりと寝ていた。総司の手には一本の筆。総司は手慣れているかのようにサラサラと書いていく。書かれている場所は…土方の……顔……。

『七草も　五つまでは　覚えけり』

「土方さん、五つまでは出てくるのにあと二つが出てこないんだ。悩んでる姿見てみたい。」「何が出てこないんだろ。ホトケノザとかかな？！」

実に楽しそうな二人。二人はこれを書き終えると怪しい笑みを残して出て行った。
土方は自分の顔に自分の作った句が書かれているなんて…夢にも思わないだろう。

「副長！おはようござ…い…ます…」
平隊士が土方に挨拶をしていくが、どうも様子がおかしい。が、特に気にしていなかった。いつも土方の姿を見付けると、あまり近寄らないようにしている平隊士達。
そこへ永倉が通りかかった。
「副長、おはよ…う…ござ……プッ…」
土方の顔を見て、笑いながら去って行った。

なんだよ、失礼な奴だな。

そこへ斎藤が…
「副長、おはようございます。昨日の不逞浪士です…が……何でもない…また後ほど……」
今にも笑いそうな顔をした斎藤があっという間に去って行った。

どいつもこいつもいったい何なんだ！あ～腹が立つ！！

隊士達の人を馬鹿にしたような態度に土方のイライラは募っていった。そこへ必ず貧乏くじを引く男が……藤堂平助、彼が土方の前を通りかかった。
「副長、おはようござ…いま…す……プッ…」
ブチンッ！という音が確かに聞こえた。
「どいつもこいつも人の顔見て笑いやがってぇぇぇーーー！！！！！いったい何なんだ？！え？！」
平助の胸倉を掴んで前後に力いっぱい揺らしている。平助は既に

気を失いかけていた。土方の怒号を聞きつけて近藤がやってきた。
「歳！離せ！平助が…平助が……」
土方の顔を見て、近藤の動きが止まる。
「…歳……顔洗った方が良いぞ……クックックッ…」
必死に笑いを堪える近藤。気を失った平助はその場に放置されたままだった。
近藤にはその悪戯の犯人が分かっていた。土方に恐れも無くこんな事を出来るのは二人しかいない。

総司、なつ。お前達も相変わらずだな。

土方は井戸へ来ていた。

顔を洗えってどういう意味だよ…

そう思いながら桶の水に映る自分の顔を見た。映った顔にはおでこと両頬に文字が書かれていた。字が反転して読みにくく、理解するまでに少し時間がかかったが、そこに書かれているのは間違いなく自分の作った句。土方は体の奥底から込み上げてくる怒りに体の震えが止まらなかった。
そこへまたもや運悪く登場したのは平助。気を失っていたが、しばらくして気がつき、ボーっとするので顔を洗いに来たという訳である。井戸の傍から放たれる強烈な殺気。戻りたくても足がすくんで動けなくなってしまった。
わなわなと体を震わせる土方。バシャバシャと顔を洗ったかと思うと、地を這うような呻き声が聞こえてきた。
「う゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛…総司…なつ……てめぇらぜってぇ許せねぇぇぇーー！！！！！！！！」
土方の怒りの声は広い屯所に響き渡り、皆を恐怖に陥れたのだった。

不本意の切腹

この日、近藤は伊東を引き連れて広島へと向かった。長州の本意を探り、できることなら戦を避けようという意図であった。

一方、京では最近、情勢の不安定さからか特に不逞浪士が多い。見回りに出れば必ず切り合いになっていた。総司は隊士も増えた事から、隊士達について教える時間が長くなっていた。体を休める暇も無くなるほど、毎日忙しくしていたのだ。

総司が抱える病『労咳』とは、安静にしててこそ病気の進行を止める事が出来るのであって、体に負担をかけるとなると、あっという間に進行してしまう。寝る暇もない程の総司が病気の進行を止める、そんなことを出来るはずがなかった。ジワリジワリと病という悪魔は、総司の体を蝕んでいく。悪魔が正体を現した時、総司の口から溢れるのだった。

その日、総司は一番隊を率いて見回りに出ていた。案の定、浪士達と切り合いになる。逃げた一人の浪士を総司が追った。浪士の腕はたいしたことはない。総司にかかれば一瞬で形がつく。浪士を切った直後、総司は違和感に襲われた。胸が焼けるように熱い。あの時の池田屋事件の時の感覚と同じ。その熱さはジワジワと上に上がってきた。

恐れていた事がついに起きてしまった。押さえた口元から離した手には、真っ赤な悪魔が総司に笑いかけていた。

私には……時間が…ない…。

総司は血を吐いたその日から、ゆっくり静養するどころかますます稽古に性を出すようになった。夜遅くまで一人、稽古をしている。

そんな総司を見ているのはなつと土方。総司の病の正体を知っている二人。

「お前、良いのか？総司、あんな生活してたら直ぐに身体悪くしちまうぞ？」
「良いんです。総司が選んだ道ですから。寿命を縮めても強くなりたいんだと思うから。あたしに出来るのは、総司を支える事だけです。」
土方は思った。いつの間にこんな強い女になったんだろう。好きな男が不治の病に冒されているのに男のやりたい事をさせる。どんなに止めさせたい事だろう。
誰だって好きな人にはいつまでも一緒にいて欲しいに違いない。でもなつは総司の想いを一番に考えていた。剣士らしく生きたいという想いを。

事件は、何気ない土方の一言から始まった。
「河合、今、隊にいくらの金がある？」
特にこれといって意味は無かった。ただいくらぐらいの蓄えがあるのか知りたかっただけであった。河合は新選組の勘定方。家が裕福な米問屋を営んでいるため、そろばんに長けていた。最初の隊士募集の時に入隊した者で、剣の腕はいまいちだが、当時、数字に強い者がいなかったので採用された。
河合は帳面と全ての蓄えを土方に見せた。
「おい、五十両足りねぇぞ？」
「え？！そんなはずは…」
帳面を見ながら金を数えていく。その顔は冷や汗が流れ、切羽詰まった状態だった。数え終わった河合。その顔は青白く、今にも倒れてしまいそうだった。
「五十両は…？」
「…分かりません。おそらく…紛失したと…」
「勘定方が金の管理もできないようじゃ隊士失格だなぁ。」
その時、河合の頭に浮かんだのは『切腹』の二文字…。
「申し訳ございません！金は急ぎ親元へ頼み、送ってもらいます！

ですから今回の事はお許しいただけませんか?!」
河合は必死だった。土方も優秀な勘定方を失うのは惜しい。その言葉を飲んだ。
「十日以内に届かなかった場合、切腹だ。良いな?」
「はい。十日もあれば必ず届きます。本当に申し訳ございません!」
それが悲劇の始まりだった。
河合は信じていた。普通に考えると五日程で必ず金は届く。十日なんて十分過ぎるくらいだった。土方も金は届くと信じ、他言はしていない。金が届けば水に流すつもりでいた。
河合が焦り出したのは五日を過ぎた辺りから。本来なら届いても良い頃なのに一向に飛脚は来ない。同じ頃、土方にも焦りが出てきた。何気ない自分の一言から始まったこの事件。このままでは河合を切腹させなくてはならなくなる。
そして今、頼るべき近藤は広島へ行っている。鬼の副長でいる以上、隊の規律を護るため多少の情けも不必要。今は飛脚が来るのを待つだけだった。
「おい、河合が金を紛失して切腹になるかもしれねぇって話だぞ?!」
いったい何処から話は漏れてしまったのか。隊内にはあっという間に広まってしまった。こうなった以上、金が届かなければ河合は切腹を免れない。しかし納得しない者もいた。なつだ。
「土方さん!何も切腹までしなくて良いでしょ?!謹慎ぐらいで十分じゃない!」
なつは土方に食ってかかっていた。しかし土方は冷たく言い放つ。
「規律は規律だ。山南の死を無駄には出来ない。」
なつは納得せざるを得なかった。ここで河合を救えば、山南が切腹した意味が無くなる。規律によって固く結ばれた隊が、ひとつの緩みで一気に解かれてしまうのだから。
期限は残り一日となっていた。幹部達の間では誰が介錯をするの

かという話にまで進んでいた。その役を率先して引き受けたのは谷三十郎。槍を専門にしており、左之助の師匠だという。そしてこの谷、近藤家と繋がりがあった。谷の末の弟が近藤家の養子に入っているのだ。そのためか、隊の中では威張り、平隊士からは嫌われていた。このような男は、土方も苦手としていたが…。

自分からかって出た以上、それを止める事はない。威張り散らしていてても、谷は七番組長だ。それなりの腕はある。

「谷さんに任せて大丈夫なんですか？」

総司は先程の会議には出席していなかったのだが誰かから聞き付けて土方の部屋にやって来ていた。

「あいつがやるって言ってんだから止める事もねぇだろ。」

「谷さんは槍が専門でしょ？もし刀でしくじったりしたら…」

「あいつも七番組長だ。そんな心配はいらねぇだろ。」

土方は特に疑問は持たなかった。谷を信用している訳ではないが介錯ぐらい出来て当然と思っていたのだ。

「それより総司、お前痩せたんじゃねぇか？稽古も良いが少しは休めよ。」

土方の言葉には返答せずに部屋を出ていく。

「まったく…心配ばかりかけさせんなよ…。」

土方の呟きに答える者はいなかった。

「河合さん…」

なつは河合の部屋へ食事を持って来た。それは期限とされた当日の朝だった。

「なつさん…飛脚はまだ…来ませんか…？」

なつは首を横に振った。

「なんで…？五日もあれば届くんじゃないんですか…？」

「…はい。本来なら。何かの手違いで文が届いていないのかもしれません。」

河合はもう諦めたかのように言った。その表情には既に死を覚悟

した憤りが感じられた。
「まだ分からないじゃないですか！まだ時間はあります！もう少し、信じましょう？」
なつは精一杯の励ましを送るが、河合にそれは通じなかった。
「ありがとうございます。私の好きな物ばかり揃えてくださって…」
河合は運ばれて来た料理に箸をつけはじめた。ひとつひとつをじっくり味わうように。
「私、これが一番好きなんですよ。なつさんの浅漬け。」
そう言うのとびきりの笑顔で美味しそうに浅漬けを食べていた。その表情はこれから切腹しようとしている人とは思えないくらい、穏やかだった。
「…あたし…他の隊士の方の食事の準備に戻りますね！」
死を覚悟するとこんなにも穏やかな表情が出来るのだろうか。山南もそうだった。
なつはいたたまれない気持ちになり、河合の部屋を飛び出した。一人残された河合。その目からは止まる事の知らない涙が溢れていた。

「時間だ。」
土方はそう言うと、島田を河合の迎えに行かせた。河合は既に覚悟を決めていた。その表情は清々しかった。
「河合、何か言い残す事はないか？」
「…父に…父に伝えて下さい。私は新選組に入って後悔はないと。」
源三郎は深く頷いた。
「それと…谷さん…出来るだけ早くしてください。私、痛いの苦手なんで。」
河合は笑っていた。何故死ぬのに笑える？その場にいた者全ての心だった。
「皆さん、ありがとうございました。」
そう言うと勢いよく腹に刀を突き刺した。それと同時に谷が刀を

振り落とす。
「ギャァーーーー！！！！！」
響いたのは河合の断末魔。谷は首を落とせず、肩に刀を食い込ませてしまった。あの清々しい表情は地獄を見ている。早く痛みを取り去らねば…誰よりも早く総司が動いた。心臓を一突きにし、河合は永遠の眠りへとついた。
介錯をしくじってしまった谷。ただ茫然と立ち尽くしていた。

負の螺旋

河合の切腹から数日が経ち、屯所の中もようやく日常を取り戻して来た頃だった。総司はずっと胸の内にあったことを話そうと土方の部屋に来ていた。

「…何故、谷さんにやらせたのです…私なら痛みなど気付かずにやることが出来た…。ねぇ土方さん！」

「組長なんだから介錯ぐらい出来て当然だと思ってたんだよ。」

土方は過ぎた事などどうでも良いように、総司の怒りにも平然と答えた。それに腹を立てた総司。鈍い重たい音が響いた。

「…っ…って……」

総司は土方を殴っていた。何を言う訳でも無い。ただ土方を睨んで、出て行った。そこへなつが土方にお茶を持って来た。部屋を覗くと口端から血を流した土方の姿。

「土方さん？！どうしたの？！」

慌てて土方の口元の血を手ぬぐいで拭った。

「お前の旦那にやられたんだよ…」

旦那という言葉に赤面するなつ。その恥じらう表情が愛しくなってしまった。土方はなつを抱き締めた。

「…え…ちょっと…土方さん…？」

「すまん…総司だけじゃねぇよ。悔やんでんのは…」

何の意味かは分からない。しかし土方の腕からすり抜けることはせず、土方から離れるのを待っていた。土方の声が鬼の声ではなかった。ただ一人の人間の声に聞こえた。

そっと土方の背中に手を回し、なつも同じように抱き締めた。

「……俺が…河合を殺した…」

土方はなつの耳元で呟いた。

「俺が…あんな事言わなけりゃ良かったんだ。」

土方の体が小刻みに震えている。鬼が泣いている。なつはそう感

じた。
「鬼の副長はいつまでも鬼じゃないと駄目なんじゃないですか？規律を護らせる、それが土方さんの役目でしょう？」
明るく言うなつに土方はただなつの肩にあごを乗せていた。
「私は鬼を演じる土方さん、嫌いじゃないなぁ。」
あえて『演じる』という言葉を使った。本来の土方の姿は、今、見せている姿なのだとなつは感じた。嫌われ役をかって出て、辛い思いもしてきたのだろう。その緊張の糸が切れてしまった瞬間が、今ここにある。
なつは土方が鬼に戻るまでずっと土方を抱き締めていた。

「…悪かった……。」
落ち着いた土方の目は元の鬼の目に戻っている。そして弱い部分を見せてしまったという恥じらいからか、なつに背を向け、いつもの声で言った。
「総司の様子がおかしい。何か聞いてるか？」
「最近、まともに話してもいないかも…」
土方に対して明らかな苛立ちを見せた総司。総司は理由もなく人を殴ったりしない。土方の唇の端の傷を総司がつけたのなら、何かしら理由があるはずだ。なつは総司の元へ急いだ。
総司は裏庭で一人、稽古をしていた。こういう時、迂闊に声をかけると怒られる事がある。ましてや苛立っているとき、いくらなつとはいえ竹刀が飛んで来てもおかしくない。なつは総司に気付いてもらえそうな所まで移動し、稽古風景を見ていた。

総司…痩せたな…

総司を見て、なつはそう思った。以前にも増して顎の輪郭が際立っている。しかしそれが美しくもあり、なつは総司に見とれてしまっていた。

「…どうしたの？何、ボーッとしてんの？」
なつの視線に気付いた総司。しかしなつは総司が気付いた事にも気付かない程、総司に見とれていたのだ。
「総司に…見とれてた…。」
おもわず本当の心の声が出てしまった。お互い、顔を赤らめ沈黙の時間が続いた。
「総司…土方さんと何があったの…？」
ようやく紡ぎだした言葉に総司は一呼吸おいて話し始めた。
「谷さんが介錯するのに納得出来なかったんだ。それを土方さんは『隊長なら介錯ぐらい出来て当然だと思った』って言った。河合が不憫でならない…」
河合の断末魔のような叫び声は、なつの耳にも届いていた。後から聞いた話では、谷が介錯をしくじったと…
でもなつはどうも納得がいかなかった。確かにさっきの土方は人が変わったようであった。でもそれだけの事で殴るまでするだろうか？他に何か胸の中に抱えているのではないだろうか。しかし総司はそれを聞くなという空気を出していた。総司は時に冷たい空気に包まれる。孤独を感じているような、見えない何かと闘っているような。
「ねぇ総司…痩せたんじゃない？最近、寝る間もないくらい働き詰めだし…」
総司の身体は労咳に侵されている。あんなに働くのは命を削る事。でも、剣士としての総司を応援する以上、反対は出来ない。
「もっと働いて近藤さんや土方さんの役に立ちたいんだ。」
総司の言葉には強い意志が感じられた。たとえなつだろうとここに割り込む事は出来ない。何もできない自分に腹が立ってしまった。
「……でも今日は……なつの部屋で寝るよ…」
総司はそう呟き、また稽古へ戻って行った。
なつはその夜、急いで片付けを終わらせた。少しでも総司との時

間を大切にしたい。なつが部屋へ戻ると、総司は既に部屋で寝ていた。普段、あまり寝ていないためか、横になればすぐに寝られるのだろう。ちょっと残念な気持ちもありながら、総司の温もりを感じながら寝られるのは幸せだと思う。

なつは横を向いている総司の背中にぴったりと体をくっつける。すると総司はなつの方を向いて二人は抱き合う形となった。

「総司、寝てるのかと思ってた。」

「久しぶりなんだから寝ちゃったらもったいないよ。」

こんなことをしていると、総司が本当に労咳なのか疑問になってくる。この時間はいつまでも続かないのは分かっている。でも時間が止まって欲しい。そう思う二人なのであった。

破滅への足音

河合の介錯をしくじって以来、谷は隊の中で孤立していくことになった。えばりまくっていた平隊士達からは逃げるように避け、組長や近藤、土方、伊東らには頭を下げる一方だった。そんな谷に同情の目を向けている者がいる。どうも弱い立場の人間を庇いたくなるのがなつの性格のようで…。

なつにだけは、谷も心を開いていたようだ。大量の洗濯物に囲まれるなつの横に谷がいた。

「ちょっと谷さん、突っ立ってるだけで暇なんだったら手伝って下さいよ。」

谷を見上げながらなつは言う。

「何故俺が隊士達の洗濯物をやらなくてはいかんのだ！まっぴらごめんだ。」

「じゃあそこ、邪魔なんであっちに行ってくださいよ。」

「そんな事言うなぁ。俺を一人にせんでくれよ…」

なつ溜め息をつく。でもこの男も哀れだなと思う。居場所が無くなり、ここへ来たのだと。

「おなつ、俺は武士として失格だな…自分から河合の介錯をやると言ったのにこの有様だ。でも分かってくれ…やる時に迷いが出てしまったんだ…」

谷は誰にも言えなかった言葉をなつに話した。

「私には分からないですよ？私は武士ではありません。でも私も剣を使う者です。迷いは自分の命をも脅かしますよ？」

励ましを期待した谷。しかしなつからの言葉に愕然としてしまった。

「…でも……一人の人間としてなら理解できます。」

谷の顔は見ずにぽつりと呟く。それを聞き、谷はフッと笑った。今まで、何故なつがこんなにも試衛館組から慕われているのか分か

らなかった。女人禁制の新選組にまだ壬生浪士組だった頃からいるのだ。確かに隊士の世話をする女中は必要だ。しかしそんなものはいくらでも雇える。密偵としてでも土方なら島原の女を間者にすることぐらい考えるだろう。しかしその全てをなつに任せている。

それはただ単になつが使い勝手の良い人間だからというわけではない。人間の強い部分も弱い部分も全て受け入れてくれる。それを分け隔てなく、誰にでも同じように接する。なつは心の休息所となっているのかもしれない。だから試衛館の面々はなつを置いているのだと、谷は思った。それと同時に近藤達を羨ましく思った。

その晩、谷は脱走した。なつに宛てた一通の文を残して。

「まったく…肝の据わらねぇ奴だな。斎藤、追ってくれ。

土方は呆れながらに斎藤に指示を出す。斎藤はひとつ頷くと出て行った。

谷からの文は総司から受け取った。

「なんて書いてあるの？」

「『いつまでもお前はお前でいろ』…だって。」

「？？なんかよく分かんないな…。きっと居辛くなったんだ。なつは気にしない方が良い。」

総司には理解出来ない谷からの文だが、なつは分かっていた。いつまでも隊士達の心の寄り所でいろ。谷はそう言っているのだろう。谷が帰って来たら、真っ先に迎えに行き、切腹の時間まで話を聞いてあげよう。なつそう思った。しかし、谷は、変わり果てた姿となって帰って来た。追っ手の斎藤に見つかると、刃向かったようだ。変わり果てた姿の谷を見つめ、なつはうつろな目で谷を見つめた。

せめて武士らしい死に方をしたら良かったのに…

斎藤に刃向かったのは谷の最後の意地だったのだろう。なつは谷の遺体に手を合わせた。

伊東の部屋では、何やら怪しい会合がもたれていた。そこにいるのは伊東一派と平助。
「そろそろ潮時だとは思わないか？家茂公が亡くなられ、帝までご崩御あそばされた。新選組の未来は見えたものだ。新選組を抜け、我等だけの組を作る。」
そこで話されているのは伊東一派の新選組脱退策だった。
「平助、お前は元はといえば伊東道場の者。私達と一緒に来なさい。」
「…しかし…新選組を抜けるという事は法度で禁じられていますが…」
平助には迷いがあった。
伊東は北辰一刀流の師でもある。平助が江戸へ帰った時に新選組への加入を勧めた。尊敬もしている。しかし、長く試衛館で貧乏生活をし、新選組旗揚げの時を共に過ごしてきた仲間と離れるのはとても心苦しいものだった。
「法度など気にするな。我等は先日亡くなられた帝の陵墓をお護りする御陵衛士となるのだ。近藤が反対するはずもない。」
さすが伊東の頭である。近藤さえ納得させれば土方は文句を言うまい。
「差し当たっては仲間を増やしたい。斎藤くん、永倉くんには加わっていただきたいものだ。彼等が入れば剣の腕は確かだからね…」
平助は迷っていた。どう考えても答えは出ない。平助はなつの所へ向かっていた。
なつは食事の準備に大忙しだった。そこへただならぬ顔をして入って来た平助に、なつの手が止まった。
「あの、なつちゃんにご相談したい事が…」
「どうしたの？！顔色悪いけど…。とりあえず食事の準備だけして良いかな？終わったらすぐ行くから。」
それを聞いていたおそのとおまさはニッコリと笑う。

「ここはもう大丈夫やさかい、平助さんの行ってあげ。ただ事じゃなさそうや。」
「そうどす。今日はおまささんもいはるさかい。」
二人の好意に甘え、なつは頭を下げると平助とともに裏庭へと向かった。
「平助さん、どうしたの？そんな深刻な顔して…」
「まだ近藤さんとかには言わないで欲しいんだけど…伊東先生、新選組を抜けるつもりなんだ。それで…私にもついて来いって…」
「…っでも勝手に抜ける事は法度で…」
「御陵衛士っていうのを作るんだって。帝の陵墓を護るっていう…私は伊東先生も尊敬してる。でも近藤先生だって尊敬してるんだ。選ぶなんて…出来ない…」
平助は俯いたままだった。彼にとって伊東も近藤も大切な人。どちらかにつかなければいけないのは断腸の思いなのだろう。なんと声をかけてよいのか分からなかった。
「…平助さんはどうしたいの？」
「それは…分からないんだ。伊東先生も近藤先生も好きだ。それになつちゃんと離れるのは…嫌だ…／／／／」
平助は未だなつを諦めきれていないようだ。平助の想いはとっくの昔に知っている。それから随分経つのにまだ想っていてくれたことは素直に嬉しかった。しかし、色恋だけのために平助の未来まで奪ってはいけない。ましてや返してあげられない想いなのだから。
「あたしも平助さんと離れてしまうのは寂しいよ？でも平助さんの未来は平助さん自身が決めるべきなんじゃないかな？伊東先生は必要としてくれたから誘ってくれたんじゃないの？もちろん、新選組にとっても必要だけど…」
「伊東先生には恩がある。それに新選組に誘ったのは私なんだよね…」
「何もこれから会えなくなるわけじゃない。会おうと思ったらいつでも会えるでしょ？」

ニッコリと笑うなつに平助の顔も明るくなる。
「本当に…？毎日会える…？」
「…毎日は…でも時間があればいつでも！」
なつは苦笑いしていた。平助はなつの両手を掴み、今にも泣き出しそうな勢いだった。

やっぱり諦めないで良かった！！

小さく胸の前で拳を作り、天を仰いだ。どうやらなつをを総司から奪った気でいるようで、平助は先程までの落ち込み方は天と地の差であった。
「あ…それから永倉さんと斎藤さんも声をかけるみたいだよ？」
「…え？永倉さんと斎藤さん？左之助さんとかは違うの？」
「うん。永倉さんと斎藤さん。」
なつは直感的に怪しい空気を感じていた。伊東一派と平助だけなら納得できる。しかし永倉と斎藤という事は剣の腕を買われたはず。伊東はただ単に分裂だけが目的じゃないはず。平助には口止めされているが、これを近藤に言わない訳にはいかなかった。

策謀対決

平助には、食事の用意が気になるからとその場を離れ、近藤の部屋へと急いだ。永倉と斎藤を引き込む理由が分からない。伊東の魂胆が見え隠れしているようで嫌な胸騒ぎを覚えた。

「それは本当の話か？」

近藤の部屋にいた土方が真っ先に飛びついた。

「平助さんが言ってたから間違いないと…おかしくないですか？御陵衛士って言ってたけど、本当にそれだけが目的かな？」

「とりあえず、伊東さんから話があるまで待ってみよう。確かに何か裏が有りそうだ。よく知らせてくれたな、なつ。」

「…大丈夫ですか…？新選組を潰されたりしないですか？」

不安げなつを安心させるように近藤は呟いた。

「大丈夫だ。俺がそんな事させない。しかし永倉くんと斎藤くんを引き入れるとはどういう事だろう？」

「恐らく、腕だろう。もし俺らと対峙する事があればあの二人は敵にしたくない。」

なつの予感は当たっていた。総司は腕はあるが、近藤、土方から離れるはずがない。そうなると永倉、斎藤を入れておけば間違いはない。

『対峙する』という言葉になつは考えた。

平助さんと殺り合う事になる……

「駄目ですっ！！」

突然、なつは立ち上がった。

「駄目です！分離させちゃいけない！平助さんがっ…！！」

近藤も土方も考えている事は同じだった。平助だけは助けたい、

ということ。辛苦を共にしてきた平助はなんとしてでも残ってもらいたかった。伊東とは何れ必ず何らかの諍いが起きるはずだ。その時に平助が伊東側についているのは何ともやりにくい。

「あたし、何も分からなかったから伊東さんについて行く事を薦めちゃったんです…」

「…出来るだけ伊東さんには思い止まってもらうよう説得する。心配するな、なつ。」

近藤はなつの肩に手を置き、子供に言い聞かせるように目線を合わせ言った。不安は消えない。しかしここは近藤に任せるしかなかった。

一方、平助はすっかりなつとの恋仲気取りだった。左乃助とおまさが仲良く昼食を食べているところへ浮足立った平助がやってくる。おまさは先ほど、なつを探しに厨まで来た平助との違いに目を見開いていた。

「原田さんとおまささんは夫婦にならないんですか？」

「いや～実はね～、この間祝言あげたんだよね～。これから局長達には報告するつもりなんだけどよ。」

おまさの肩を寄せ、にんまりと笑った。

「えーーー！！！！そうなんですか？！早く言って下さいよー！！」

「平助さんはどないなんどす？好いてはるお方いはるの？」

おまさの問いに平助はポリポリと頭を掻きながら照れくさそうに、しかし聞いてくれと言わんばかりに言う。

「はい～私もそろそろ身を固めようかと思いまして…」

「え？！誰だよ！お前、なつに惚れてたんじゃなかったのかよ！」

左之助が驚くのも無理はない。

「はい。ようやく実りました。なつちゃんと…」

平助の返答に、左乃助とおまさは背を向け、ヒソヒソと耳打ちし合う。

「なつさんて沖田さんと恋仲なんと違うの？！」
「そうだよ！もしかして平助、奪ったのか？！」
浮かれる平助の横で夫婦になったばかりの二人がなつと平助の関係に疑いが向けられていた。

永倉、斎藤は伊東に呼ばれていた。帝が崩御した翌年の正月ということで派手な宴会は遠慮するようにと隊内でも言われていたのだが、揚屋の一部屋を借り、正月料理に舌鼓を打つ伊東の姿に永倉と斎藤は不信感を募らせた。
「お二人共、そんな疑いの目を向けずに飲んで下さい。」
伊東は怪しい笑みを浮かべながら、二人に酌をする。
「私は策は嫌いです。お話があるなら単刀直入に言っていただきたい。」
永倉の一言に伊東はフッと笑うと話し始めた。
「分かりました。真意をお話します。我々は新選組を離れる事を考えております。ついては永倉さん、斎藤さんにも我々と一緒に来ていただきたい。」
「何故新選組を離れるのだ？」
「正直に申し上げます。今の新選組は綻びだらけだ。私達は新しい新選組を作り、御陵をお護りする御陵衛士となるのです。それにはお二人の力が必要なんです。」
『御陵衛士』という聞きなれない単語に眉間の皺を刻ませた。永倉は伊東の心を見抜くような視線を向け、そして伊東も物怖じせずに見つめ返した。
「少し時間を下さい。我々にも考える時間が必要だ。」
「心得ました。では五日お待ちします。それでよろしいでしょうか？」
永倉と斎藤はそれを了承した。しかし二人の伊東への疑いは消える事はなかった。

斎藤は帰宅後すぐに、その知らせを近藤の元へ持ってきていた。なつもそれを知る一人として土方に呼ばれ同席していた。
「伊東に御陵衛士に加わらないかと誘われた。」
「それでどうしたんだ？」
「五日の猶予をくれと永倉さんが頼んだ。」
淡々と、重要なことだけを紡ぐ斎藤の口を皆が注目していた。
「永倉くんは加わりそうか？」
「いや…俺も永倉さんも伊東には不信感がある。」
「そうか…」
永倉の態度に安心していた。万が一にも平助と永倉の二人が抜けることになれば、大幅な戦力減となる。そして対峙するとなった場合、強敵になってしまうのだ。
やはり伊東は隊を離れ、御陵衛士という名の何かをやるつもりだ。もしかすると、幕府に手足となり働く新選組に見切りをつけ、敵対する薩長と手を組むつもりなのだろうかと、なつは心の内で思っていた。もしそうとするならば、新選組は伊東一派を壊滅させなければならない。そこに加わる平助もそう…。
「斎藤、お前は御陵衛士に加わってくれ。」
何か考えていた土方は、口を開くとそんな言葉を並べた。
「は？！何言ってんの？！土方さん！」
「うるせぇな！最後まで話を聞け！斎藤は間者として御陵衛士に加わるんだ。奴らの動きを逐一俺に報告してくれ。それから、万が一にも新選組と敵対することになれば平助を護ってくれ。」
土方のとんでもない発言の裏にそんな事が隠れていたとは…鬼だ鬼だとばかり思っていたこの人の中にも、人としての心を持ち合わせていてくれたことになつは感情を抑えられなくなった。
「土方さん大好き～～～！！！！！」
なつは土方に飛びついた。
「っ！！おまっ！！やめろ！こんな時に総司が来たらどうすんだよ！」

そしてこんな時に限って総司は入ってくる。
「呼びました？……ひ～じ～か～た～さ～ん？！」
中の光景に総司は目を見開く。
「俺じゃねぇよ！こいつがっ！」
「総司～…土方さんが無理矢理…」
明らかになつが土方に抱きついていたのだが、総司にはそんな事関係ないようで、土方を睨みつける。この三人のやり取りを遠くから見つめる近藤、斎藤なのであった。

平助の勘違い

いつ伊東は近藤に話しに来るのだろう。そう思った矢先の事だった。

「局長、少しお話をよろしいでしょうか？」

「はい、どうぞ。」

ついに来たかと、近藤と土方は目を合わせた。

「早速、本題に入らせて貰います。私、伊東、新選組から離れたいと思っています。これは脱退ではなく、分派という形で。」

土方の目は見ず、近藤だけを見つめて伊東は話し始めた。

「それはどういう事でしょう？」

「薩摩や長州の動きを探ろうと思っています。名目は御陵をお護りするという事で敵の目を欺きます。新選組を離れたとすれば薩長も警戒心は薄れるでしょう。しかし、真意は薩摩と長州の動向。いかがですか？」

反対はさせますまい。といった口調ではっきりと近藤に詰め寄る。

「しかし新選組を勝手に抜けるのは法度で禁じられている。」

「だからご相談しているのです。局長が分派を納得いただけたら、これは勝手な脱退ではないでしょう。」

土方の言葉にも物怖じしない伊東は、流し目で土方を見やると不敵な笑みを浮かべた。

「分かりました。分派を認めます。これからは別の道で尊皇の志の元、共に尽くしましょう。」

「ありがとうございます。斎藤くんが我らと共に来てくれる事になりました。御異存はあるまいな？」

全てのことがうまくいったと、ニコリと笑みを浮かべ、近藤に頭を下げた。

伊東達が出ていく日の朝、試衛館一派が平助を囲んで見送りをし

ていた。
「平助、伊東先生をしっかり支えてあげなさい。」
「すまんな、一緒に行けなくて。」
「たまには遊びに来いよ〜」
「また一緒に稽古をしよう。」
それぞれが平助へ別れの言葉を告げる。ずっと共に生活してきた仲間がひとりいなくなるのは寂しい。しかし同じ京にいる者同志、また会えると信じていた。そして総司が口を開く。
「平助、私は「沖田さん！本当にごめんなさい！でも…どうしても私が良いって言うから…」
「「「は？！？！」」」
平助の意味不明な発言に皆、呆気にとられた顔をした。そして平助はなつの手を取り、見つめた。
「なつ、これからは私だけのなつだ。」
皆が一斉になつの顔を見る。あれだけ総司、総司と言っていたなつが平助に乗り換えたのか？と言葉に出さないが皆の目がそう言っていた。
「…ちょ…ちょっと待って？何で？あたし、いつから平助さんのものになったの？」
「そんな照れなくて良いよ。男と女は何があるか分からない。そういうものなんだ、沖田くん。」
間違いない。平助は勘違いしている。なつの何かの言葉を平助は良いように捉えてしまったようだ。否定の言葉を探す。しかし、はなむけの言葉に相応しくない言葉ばかりが浮かんでくる。その時、口を開いたのは総司だった。
「平助、残念だけど、なつは私から離れたくないようだ。平助への気持ちは一時的だったみたいなんだ。だから諦めてくれ。」
総司の精一杯の優しさだった。しかし、優しさも平助には大きな痛手を負わせていた。平助にとって辛い旅立ちとなった。

その日一日、総司は苛立っていた。理由は平助の勘違い。勘違いであって、なつが平助に気持ちがいくとは考えられない。でも勘違いさせるような事を言ったなつにも責任はある。おかげで今日の稽古は隊士達、皆がこてんぱんに打ちのめされていた。総司の苛立ちの犠牲になった隊士達を道場の外から哀れみの表情で見ている左之助と永倉であった。

その晩、なつが仕事を終え部屋へ戻ると明かりがついていた。普段、なつがいない時は暗いはず。明かりがついているという事は中に誰かがいるという事で。

「あ…あのう、総司さーん…？」

なつにも総司の八つ当たりの話は届いていた。間違いなく自分の事で怒っている。恐る恐る声をかけた。

「なつ、ここに座りなさい。」

総司の声は明らかに怒っている。言われた通り総司の真正面に正座した。

「平助に何を言ったの？」

「いや…何と言われても心当たりがないんだけど…」

そりゃそうだろう。『毎日会える？』『毎日は…時間がある時ならいつでも』の会話でどう考えても恋仲になるとは思えない。平助の訳の分からない勘違いであったとしても、勘違いさせた事に総司は腹を立てていた。

「なつにはお仕置きが必要だな…」

総司はニヤリと笑うと明かりを消した。真っ暗になった部屋で、総司はなつを押し倒した。目が暗闇に慣れないため、総司の姿が見えない。総司はというと、見えているのか、なつの姿は正確に捉えていた。総司の口でなつの口を塞がれ、激しく口付けされる。その口付けは溶けてしまいそうな程甘く、なつの口から吐息が洩れた。

その瞬間、総司は口付けを止めた。なつはもっとしてほしいとは言えず、疑問の表情を浮かべた。今度は首筋に口付けしてきた。だんだんと気持ちも高揚していき、総司の舌が這うと声が出てしまう。

すると総司は止めるのだ。
「総司…？」
なつには何故か分からない。総司はもっと触れて欲しい所には触れず、なつの気持ちが高揚してくると止めてしまう。なつから求めてしまいたくなるくらいだった。
「なつ、何して欲しい？言ってごらん？」
「…っそんなっ！！／／／」
「恥ずかしがらなくて良いよ。なつが感じる所を言ってくれれば良いんだ。」
まるで悪戯をする子供の目だった。しかしそれを断るということを許してはくれない目。この総司に逆らうことは絶対に許されないことであった。しかし言うのは恥ずかしい。なつはしばらくの間葛藤し、そして結果、なつの完全敗北で終わった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3929e/

浅葱色の恋

2010年10月16日00時10分発行